

一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う

六大B遺跡(A地区)発掘調査報告

1999. 2

三重県埋蔵文化財センター

序

鈴鹿や布引の山々を越え、大小の河川を渡り、大勢の人々が伊勢へ伊勢へとやって来た時代がありました。当時の人達が通った街道は、あるものは今なお県内の動脈として存在し、あるものは「バイパス」にその働きをゆずって地域の生活道路として今に至っています。往時の伊勢に至るいわばメインストリートとでもいるべき「伊勢街道」は、国道23号として位置を変え現在も三重県の主要幹線となっています。

現在の国道23号も交通量増加に伴い、新たに中勢バイパス建設が計画されました。今回報告する六大B遺跡（A地区）は、この中勢バイパスの一貫である一般国道23号中勢道路建設に先立って調査されたものです。六大B遺跡は、志登茂川の一支流である毛無川北岸の段丘上に広がる弥生時代中期から近世に至る複合遺跡です。中でもA地区は東海道・関宿と伊勢街道・津を結ぶ伊勢別街道・窪田宿の一画にあたり、近世を中心とした遺構・遺物が見つかりました。近世宿場の調査としては県内でも数少ない例であり、大変貴重な調査です。

調査を終えたところにはすでに新しい道路が開通し地域活動の新しい動脈となりつつあります。そのいわば代償として発掘された遺跡の膨大な記録を整理し報告書として世に公開していくことが、私どもに課せられた重大な責務であると考えております。本報告書が地域の歴史を解明する一助となることを念願するところであります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に心からお礼申し上げるとともに、今後とも県民の皆様の文化財保護への一層の御理解と御協力をお願い申し上げる次第です。

平成11年2月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井與生

例　　言

1. 本書は、三重県津市大里窪田町字出口に所在する六大B遺跡（A地区）の発掘調査報告書である。六大B遺跡にはA～I地区があるが、時期的に他地区と性格を異にするA地区のみここに報告する。

2. 調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局の委託を受け、昭和63年に範囲確認調査（試掘調査）を平成5年8月から平成6年8月にかけてA地区の本調査を実施した。また、整理・報告書作成業務を平成8年度から10年度に実施した。調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3. 調査は下記の体制で行った。

- ・調査主体　三重県教育委員会
- ・調査担当　同事務局文化課（昭和63年度）
　　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課第三係（平成元年度以降）
- ・調査協力　津市教育委員会
　　鈴鹿市教育委員会
- ・現場作業　社団法人中部建設協会

4. 六大B遺跡A地区の現地調査は、平成5年度に中村光司・本堂弘之が、平成6年度に本堂弘之・山本義浩が担当した。

5. 本書作成にかかる報文執筆は、中村・山本の協力を得て本堂が行った。

6. 室内整理については、市川嘉子・一木八千代・小坂規美子・太田浩子・伊藤友子・脇葉輝美・森川絹代・鈴木妙・黒川敬子・蒔田やよい・新田智子の協力を得た。また、調査補助員として、藤田有紀・川崎志乃・杉崎淳子・田中美穂が現地調査および整理作業に携わった。

7. 発掘調査ならびに整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

青木哲哉（立命館大学）・浅生悦生（津市立豊が丘小学校）・磯部　克（県立松阪高等学校）・井上喜久男（愛知県陶磁資料館）・岡田　登（皇學館大學）・萱室康光（津市教育委員会）・小林　秀（三重県史編さん室）・八賀　晋（三重大学名誉教授）・藤澤良祐（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）

8. 本書所収遺跡については、既に『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』I（三重県教育委員会1989）、『同』VI（三重県埋蔵文化財センター 1994）、『同』VII（同 1995）、『中勢道路調査ニュース』No.2・21・23 にその調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

9. 本書に用いた地図および遺構実測図は、国土調査法の第VI座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。当該遺跡では磁北はN 6° 40'W座標北から振れている。（平成7年度）

10. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

11. 本書に用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。なお、遺構の名称・番号は、調査時点および調査中の概報での呼称を踏襲せずに、新たに改称したものである。

S B 建物 S D 溝・自然流路 S E 井戸 S K 土坑 S P 水溜・水槽
P 柱穴・小穴 S Z 近世埋甕・その他の遺構

12. 本書では、遺物番号の後にアルファベット1文字を付けてその遺物の種類を示す場合がある。凡例は下記の通りである。なお、山茶椀・瓦質製品は、土器・土製品に、炻器（焼き締め陶）は陶器に含め、一覧表の備考等にその旨記した。

E : 土器・土製品 C : 陶器 P : 磺器 W : 木製品
L : 漆器 S : 石製品 M : 金属製品 O : その他

13. 「わん」の文字については、山茶椀には「椀」を、陶器製碗、磁器製碗には「碗」を用いた。

14. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目 次

I	前 言	1
1	調査の契機	1
2	調査の体制	1
3	調査経過	2
4	調査の方法	3
II	位置と環境	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	7
III	調査の成果	9
1	基本層序	9
2	遺構と遺物	9
(1)	概要	9
(2)	中世の遺構	9
(3)	中世の遺構出土遺物	9
(4)	近世初頭の遺構	9
(5)	近世初頭の遺構出土遺物	14
(6)	江戸前期の遺構	14
(7)	江戸前期の遺構出土遺物	18
(8)	江戸中期の遺構	18
(9)	江戸中期の遺構出土遺物	23
(10)	江戸中期～後期の遺構	24
(11)	江戸中期～後期の遺構出土遺物	28
(12)	江戸後期の遺構	31
(13)	江戸後期の遺構出土遺物	34
(14)	幕末の遺構	37
(15)	幕末の遺構出土遺物	39
(16)	近代の遺構・時期不明の遺構	43
(17)	近代の遺構・時期不明の遺構出土遺物	44
(18)	包含層出土の遺物	44
IV	まとめ	49
1	礎石建物について	49
2	窪田宿における遺跡の位置づけ	50
3	タタキ製マスについて	50
4	土師器皿と円形加工製品について	51
	報告書抄録	64

表 目 次

第1表	六大B遺跡（A地区）調査経過	2	第8表	遺物観察表(5)	57
第2表	調査地区と字名	5	第9表	遺物観察表(6)	58
第3表	周辺遺跡・路線内遺跡一覧表	7	第10表	遺物観察表(7)	59
第4表	遺物観察表(1)	53	第11表	遺物観察表(8)	60
第5表	遺物観察表(2)	54	第12表	遺物観察表(9)	61
第6表	遺物観察表(3)	55	第13表	遺物観察表(10)	62
第7表	遺物観察表(4)	56	第14表	遺物観察表(11)	63

挿 図 目 次

第1図 大地区割り設定・調査区割り	3
第2図 六大B遺跡A地区小地区割り	4
第3図 六大B遺跡周辺地形図	5
第4図 遺跡位置図	6
第5図 東壁土層断面図	10
第6図 遺構配置図	11
第7図 中世の遺構平面図・断面図	12
第8図 中世の遺構出土遺物実測図	12
第9図 近世初頭の遺構平面図・断面図、 S D13土層断面図	13
第10図 S E 7 出土遺物実測図①	14
第11図 S E 7 出土遺物実測図②	15
第12図 近世初頭の遺構出土遺物実測図①	16
第13図 近世初頭の遺構出土遺物実測図②	17
第14図 近世初頭の遺構出土遺物実測図③	18
第15図 江戸前期の遺構出土遺物実測図	18
第16図 江戸前期・中期・中期～後期の遺構 平面図①・断面図①	19
第17図 江戸前期・中期・ 中期～後期の遺構平面図②	20
第18図 江戸前期・中期・ 中期～後期の遺構断面図②	22
第19図 近世埋甕遺構実測図	23
第20図 S E 8 出土遺物実測図	24
第21図 江戸中期の遺構出土遺物実測図①	25
第22図 江戸中期の遺構出土遺物実測図②	26
第23図 江戸中期～後期の遺構 出土遺物実測図①	28
第24図 江戸中期～後期の遺構 出土遺物実測図②	29
第25図 江戸中期～後期の遺構 出土遺物実測図③	30
第26図 江戸後期の遺構平面図①	32
第27図 江戸後期の遺構平面図②・断面図	33
第28図 江戸後期の遺構出土遺物実測図①	34
第29図 江戸後期の遺構出土遺物実測図②	35
第30図 江戸後期の遺構出土遺物実測図③	36
第31図 江戸後期・幕末・近代の遺構 平面図・断面図	38
第32図 S E 10 実測図	39
第33図 幕末の遺構出土遺物実測図①	40
第34図 幕末の遺構出土遺物実測図②	41
第35図 幕末の遺構出土遺物実測図③	42
第36図 近代の遺構・時期不明の遺構 出土遺物実測図	43
第37図 包含層出土遺物実測図①	44
第38図 包含層出土遺物実測図②	45
第39図 包含層出土遺物実測図③	46
第40図 包含層出土遺物実測図④	46
第41図 包含層出土遺物実測図⑤	48
第42図 包含層出土遺物実測図⑥	48
第43図 整形四間型模式図	49
第44図 窪田宿にのこる屋号(一部)	50
第45図 土師器皿の口径の変化	51

写 真 図 版 目 次

P L 1	調査前遠景(窪田宿全景)、調査区遠景
P L 2	調査前近景、平成6年度調査区全景、S D13・S P76、S E10、 S E 9、S E10断面、S B 4 磁石南東角、S E10底部
P L 3	平成5年度調査区全景、S B 1・S B 4
P L 4	S B 2・S B 3、S B 4
P L 5	S B 2 東角、平成5年度調査区南東部、S Z66、S Z67、 S Z68、S Z72、S B 3 の磁石、「向 空也上人堂」道標
P L 6	出土遺物
P L 7	出土遺物
P L 8	出土遺物
P L 9	出土遺物
P L 10	出土遺物

I. 前 言

1. 調査の契機

中勢バイパスは、三重県鈴鹿市玉垣町から同一志郡三雲町小津に至る延長33.8kmの一般国道23号のバイパスで、昭和58年4月15日に都市計画決定された。このバイパスは、中勢地域の道路網を充実させるとともに総合的な地方交通体系の確立を図るために計画され、現国道23号の交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用の誘導を図り、地方経済発展に寄与するものである。

この道路計画地内にかかる埋蔵文化財発掘調査については、昭和57年に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無の照会を受けた（昭和57年1月18日付け建部三第70号）。昭和58年度に三重県教育委員会が主体となり、関係市町村の協力を得て、計画路線内の分布調査を行った。昭和59年に建設省にその結果を回答するとともに（昭和59年5月23日付け教文第67号）、建設省中部地方建設局三重工事事務所、県道路建設課と今後の取扱いについて協議を重ねた。

中勢バイパスのうち津市大里窪田町（主要地方道津関線）から同市大字神戸（都市計画道雲出野田線）までの7.2km区間が中勢道路として昭和59年4月1日に事業採択された。この区間に所在する埋蔵文化財は、遺跡数18件、遺跡面積（路線内面積）約115,000m²（いずれも平成3年現地確認調査時）である。これらの埋蔵文化財の取扱いについては、建設省中部地方建設局三重工事事務所と三重県教育委員会文化課との間で協議し、保存困難な部分については事前の発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。

事業の実施にあたっては、作業員の安全確保と発掘調査の適正かつ円滑な推進を期して、現地作業を建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託した。これを受け、建設省中部地方建設局と三重県及び社団法人中部建設協会の三者で、昭和63年4月8日付けで「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し、事前の発掘調査を実施していくことになった。その後事業計画の進展に合わせて、平成3年10

月31日付けで、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「変更協定書（第1回）」を、平成5年9月7日付けで「変更協定書（第2回）」を締結し、調査計画と道路建設事業との調整を図った。

2. 調査の体制

調査主体は三重県教育委員会で、調査担当は昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは、県教育委員会規則により設置された三重県埋蔵文化財センターである。調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づく協定を締結して、津市教育委員会から（昭和63年度～）と鈴鹿市教育委員会から（平成7年度～平成9年度）派遣職員を得ている。

本書に所収した六大B遺跡（A地区）については、昭和63年度と平成4年度に範囲確認調査を、平成5～6年度に本調査を実施した。また、平成8～9年度に報告書作成業務を行い、平成10年度に報告書を刊行した。その体制は以下のとおりである。

〔昭和63年度〕

文化財第二係長 伊藤久嗣
主査 吉水康夫
主事 増田安生
主事 浅生悦生

（津市教育委員会から派遣）

臨時調査員 和氣清章・油田秀紀
調査協力者 宮澤織江・新井ゆう子・森 貴子
 谷口裕美・園田純子・陰山誠一
 久 杏敏明・若松 剛・川辺光則
 下井則幸・奥山テルヨ・畠ひろ子

〔平成4年度〕

調査第二課長 新田 洋
主査兼第三係長 駒田利治
主事 本堂弘之・小菅文裕
技師 穂積裕昌
主事 山口 格・中村光司

（津市教育委員会から派遣）

[平成 5 年度]

主幹兼調査第二課長 伊藤克幸
主査兼第三係長 倉田直純
主事 清水正明・本堂弘之・小菅文裕
技師 穂積裕昌
主事 山口 格・中村光司

(津市教育委員会から派遣)

[平成 6 年度]

主幹兼調査第二課長 伊藤克幸
主査兼第三係長 河北秀実
主事 本堂弘之・山本義浩・中川 明
技師 穂積裕昌
主事 宮田勝功・中村光司

(津市教育委員会から派遣)

[平成 8 年度]

主幹兼調査第二課長 山田 猛
第三係長 本堂弘之
主事 宮田勝功・山本義浩
技師 水橋公恵
主事 池端清行・米山浩之

(津市教育委員会から派遣)

主事 筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会から派遣)

[平成 9 年度]

主幹兼調査第二課長 山田 猛
主査兼第二係長 本堂弘之
主事 宮田勝功
技師 西村美幸・水橋公恵
主事 池端清行・米山浩之

(津市教育委員会から派遣)

主事 筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会から派遣)

[平成10年度]

主幹兼調査第二課長 吉水 康夫
主査兼第三係長 本堂弘之
主事 宮田勝功
技師 西村美幸
主事 村木一弥・山口 格

(津市教育委員会から派遣)

3. 調査経過

六大B遺跡の範囲確認調査は、昭和63年5月25日～7月6日に、4×4mの試掘坑31ヵ所を設定して

実施した。溝・柱穴・土坑・住居跡等を検出、土師器・須恵器・山茶碗等が出土した。この時点では、古墳時代後期～中世の複合遺跡であると考え、24,600m²を本調査対象とした。

これを受けて、平成2年度にB～G地区の本調査を、3年度にH地区の本調査とB～F地区の補完調査を実施した。平成4年度には本線と直交する地下道建設の計画が明らかになったためその部分をI地区として発掘調査するとともに、家屋移転に伴い県道沿いのA地区について試掘調査(試掘坑2ヵ所)を実施した。平成5年度と6年度にはA地区の本調査を実施した。

A地区の本調査は、平成5年8月17日に東約2/3について開始した。近世の街道に接した地区だったので、室町末～江戸時代の遺構・遺物の出土も期待された。折り重なる遺構の検討や多量の陶磁器類の整理に時間をかけながら、11月16日に航空測量を実施した。20日には現地説明会を開催し、あいにくの雨天にもかかわらず110名の参加を得た。その後井戸の断ち割りなどの補足調査をし、12月16日に調査を終了した。残りの西側約1/3については、家屋の取り壊しを待って、平成6年6月21日に調査を開始した。大きな攪乱土坑があったものの遺物量は比較的多かった。8月8日に航空測量を実施し、調査を終了した。

調査期間	調査面積	担当者	備考
S63.5.25 ～7.6	496m ²		範囲確認調査 (遺跡全体)
H5.2.3	28 グリッド2ヵ所	小菅文裕	範囲確認調査 (A地区のみ)
H5.8.17 ～12.16	1,270	中村光司 本堂弘之	
H6.6.21 ～8.8	670	本堂弘之 山本義浩	

第1表 六大B遺跡(A地区)調査経過

4. 調査の方法

(1) 地区設定

a. 調査区割り

六大B遺跡は道路予定地の調査であるため調査区は幅40~70mに対し長さ 800mと長大である。このため、全体を一時に調査することはできないので道路や畔、水路でもって調査区を便宜上いくつかに分けている。これをここでは仮に調査区割りと呼ぶ。六大B遺跡では本線部分の調査区を北から南へA～Hの8つに分け、本線に直交する地下道部分の調査区をI地区とした。(地下道部分の調査区は4つに分かれるため1～4の枝番をついている)

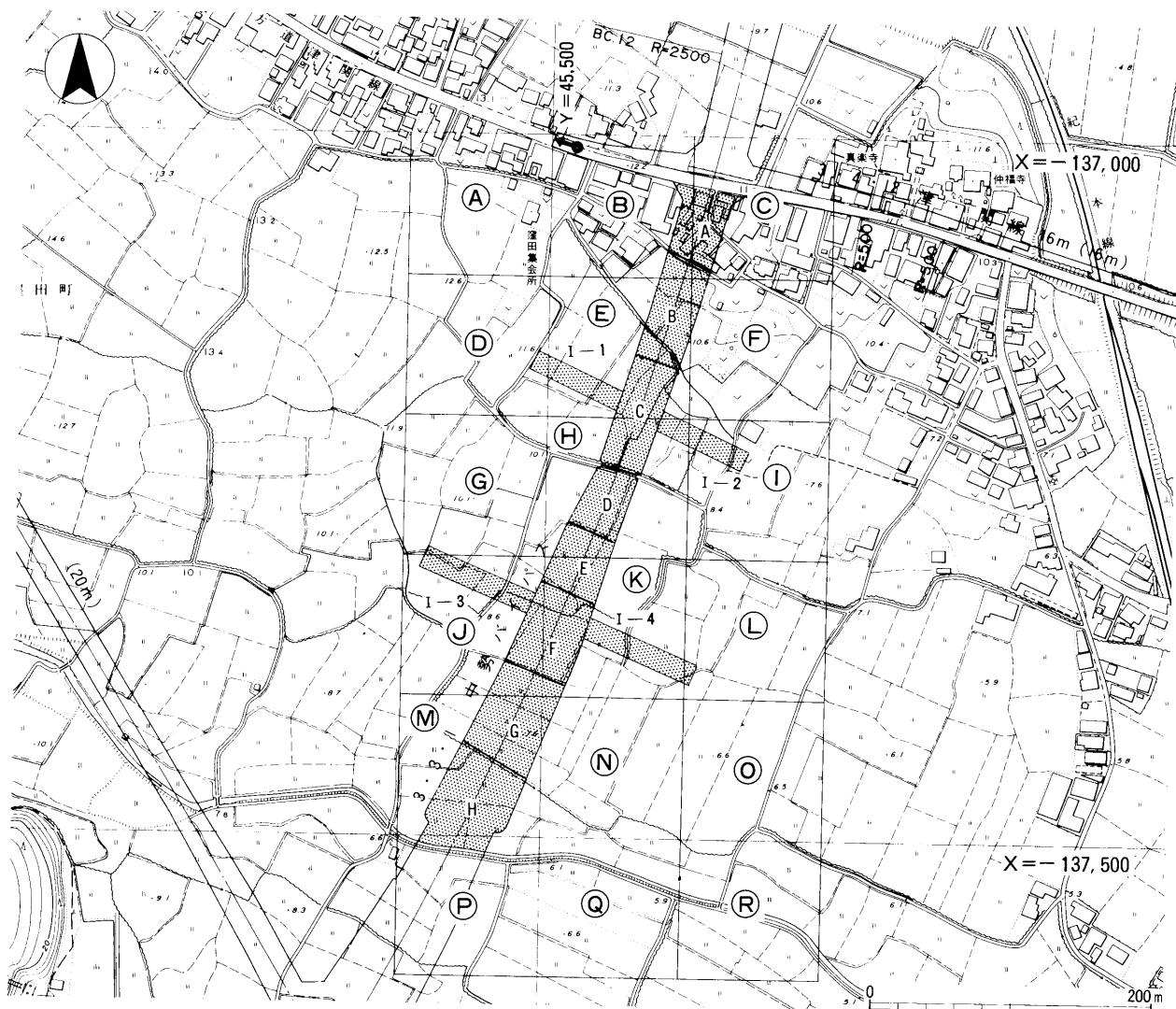
この調査区割りのアルファベットは遺跡名の後に記述し、例えば「六大B遺跡A地区」などとなる。

(「地区」は省略されることがある)

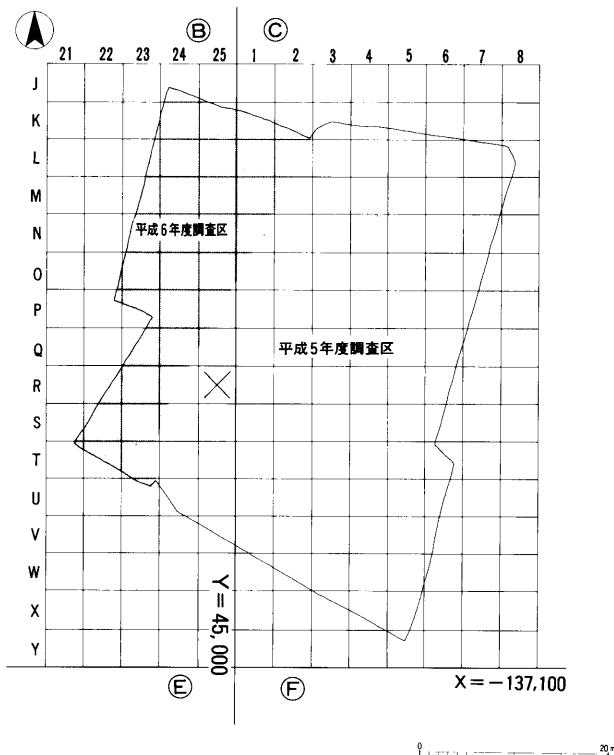
b. 大地区割り・小地区割り

発掘調査にあたっては、調査区全体に縦・横各4m単位のメッシュをかけ、アルファベットと算用数字を用いて個別のグリッドを表す「地区設定」が行われている。しかし、調査区が広くなるとアルファベットに限界があったり、算用数字の桁数が多くなったりするなどの欠点があった。六大B遺跡の調査に先立ってこの点が考慮され、4mメッシュ（小地区割り）の上に100mメッシュ（大地区割り）を設定することでこの欠点を回避している。

この大地区割り・小地区割りは国土法による国土地標によって行われている。六大B遺跡においてはX=-137,000～X=-137,600間を100m単位で6等分し、Y=45,400～Y=45,700間を100m単位で3等分して18区画を大地区割りとした。各グリッドにはアルファベット（A～R）をあてて大地区名とする。



第1図 六大B遺跡大地区割り設定（Ⓐ～Ⓑ）、調査区割り（A～I）（1：5,000）



第2図 六大B遺跡A地区 小地区割り
(Ⓐ・Ⓑ・Ⓔ・Ⓕは大地区名) (1 : 800)

また、大地区の各グリッドを縦横各4m単位で25等分して小地区割りとし、北から南へアルファベット(A～Y)を、西から東へ算用数字(1～25)をあててアルファベットと算用数字を組み合わせて小地区名とする。地区名は、大地区名－小地区名の順に表記し、例えば第2図の×印の地区は「B-R25」となる。なお、「B-R25」は六大B遺跡の調査区全体を通して1カ所である。

この方法で大地区割り・小地区割りを設定して調査された調査された遺跡は、中勢道路埋蔵文化財発掘調査では、六大B遺跡の他に下記の遺跡がある。

大古曾遺跡（平成3年度・5年度調査）

橋垣内遺跡の内平成4年度・5年度調査地区

（大古曾遺跡A地区として調査）

稻生遺跡（平成4年度調査）

南谷遺跡（　　〃　　）

六大A遺跡（平成6年度～8年度調査）

蔵田遺跡（平成6年度～8年度調査、一部未調査）

橋垣内遺跡の平成元年度～3年度調査区（A地区・B-1地区・B-2地区として調査）・山籠遺跡・

太田遺跡は、国土座標に沿った小地区割りを行っているが、大地区割りは行っていない。

宮ノ前遺跡A地区、位田遺跡、及び安濃川以南の10工区の各遺跡（替田遺跡・式ノ坪遺跡・里前遺跡・梁瀬遺跡）は中勢バイパスのセンター杭を用いた小地区割りを行っている。大地区割りはない。

(2) 図面・写真

個別遺構の実測は、平面図・断面図・土層断面図について必要に応じて行った。縮尺は1/20または1/10である。調査区全体の測量は空中写真測量により1/50と1/100の図面を作成した。このうち1/100の図面は平成6年度調査後に平成5年度調査区を接合して作成している。

航空測量図面を除く図面には、5年度・6年度通して3桁のナンバーを付け、別に図面一覧表を作成して管理している。

写真は、モノクロネガとカラーリバーサルフィルムを使用し35mmとブローニーで撮影している。適宜35mmカラーNEガも併用した。

写真は各カットごとに一覧表を作成してアルバムとともに保管している。

(3) 遺物整理

土器等の出土遺物は、洗浄・注記されたあと、実測すべき遺物とそうでない遺物とに選別される。実測されない遺物は、遺構ごとに袋詰めされてコンテナにつめられて収蔵される。コンテナには箱番号がふってあり別に一覧表を作成する。

実測された遺物は、実測図と照合できるよう遺物と図面の両方に3桁+2桁、計5桁のナンバー（例001-01登録番号と呼ばれる）がふられる。さらに報告書に掲載された遺物には、報告書の図と照合できるよう報告書の図と同じ番号（図版番号）が与えられる。

遺物収蔵時の整理は図版番号順にコンテナに詰められる。コンテナには箱番号と中に入っている遺物の図版番号が表示され、箱番号順に収蔵される。あわせて一覧表が作成され、報告書非掲載の一覧表とともに保管される。

II. 位置と環境

1. 地理的環境

六大B遺跡は、三重県津市大里窪田町字出口・竹花・榎垣内・石前に所在する。この内A地区は字出口にあたる。

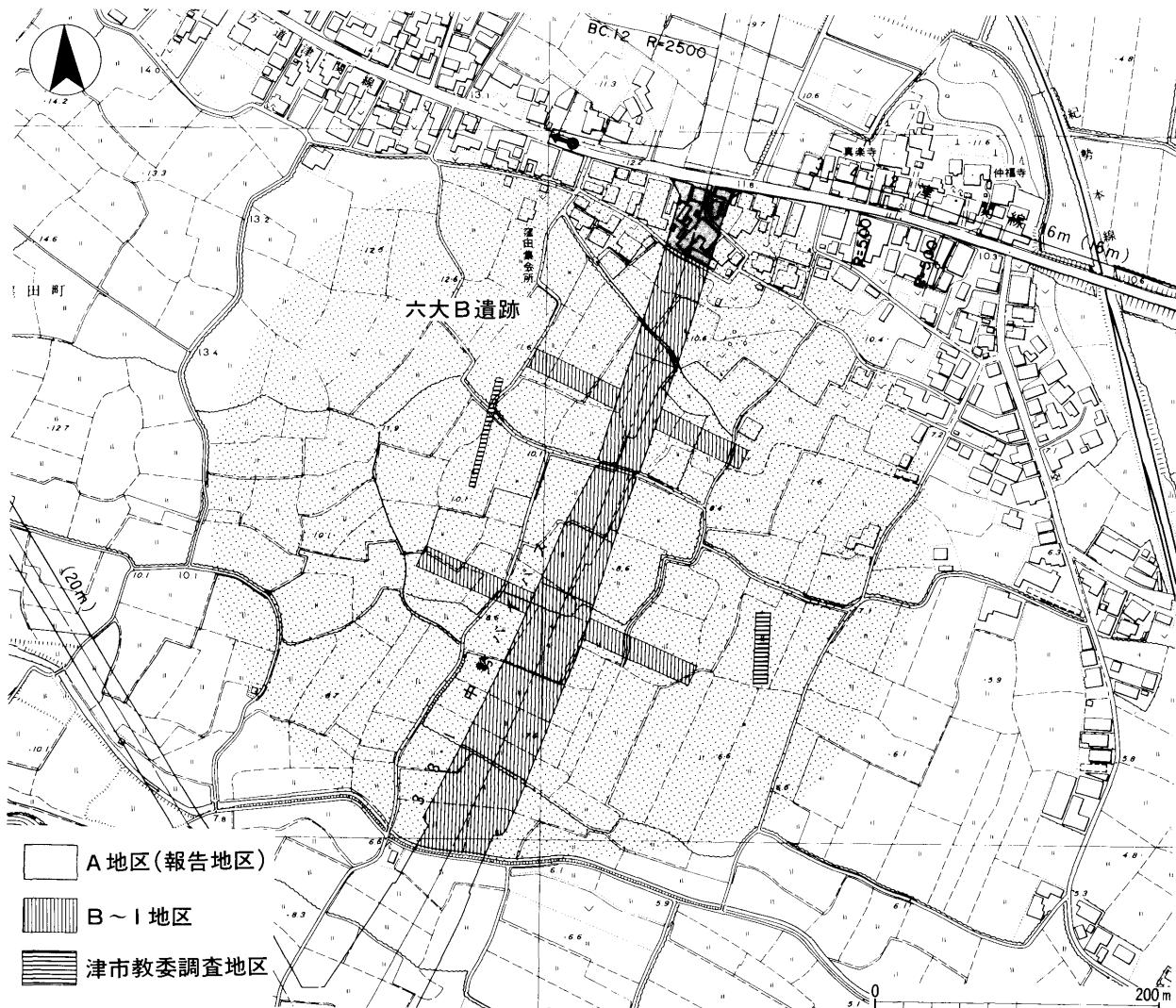
調査地区名	字名
A・B・I-2地区の一部	出口
Bの一部・C・I-1・2地区	竹花
D・E・Fの一部・I-3地区	榎垣内
F・G・H・I-3の一部・I-4地区	石前

第2表 調査地区と字名

安芸郡芸濃町椋本付近から津市鳥居町にいたる安濃川と志登茂川にはさまれた丘陵は、志登茂川支流の中の川によってほぼ南北に2分される。

北半は椋本集落付近から始まり、南東方向に延び、豊里中学校付近に至る。平坦面の多い中位段丘であり、伊勢別街道（現 主要県道津・関線）がその尾根部分を縦走するとともに、椋本・高野尾・大里睦合町等の集落が街道沿いに形成されている。（ここでは「高野尾・大里丘陵」と仮称する。）

南半は、芸濃町萩野付近に始まり津市鳥居町に至る。上位段丘であり、毛無川の谷底平野が深く入り込んでいるのをはじめ、矮小な谷底平野が多数入り組み複雑な地形を成している。丘陵の南西裾部には



第3図 六大B遺跡周辺地形図 (1 : 5,000)



第4図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

(国土地理院 1 : 25,000 津西部、津東部、椋本、白子)

安濃川の支流である美濃屋川がめぐり、それに沿う形で集落が点在する。集落の南西には安濃川によって形成された沖積平野が広がりその中央を安濃川が伊勢湾に向かって流れる。ここではこの南半部全体を「見当山丘陵」と呼ぶが、厳密な意味での「見当山丘陵」は見当山周辺に限るべきであろう。

また、六大B遺跡の所在する毛無川の中流域（大沢池以東）左岸では、中位段丘、低位段丘、さらに氾濫平野と続き、なだらかな地形が形成されている。氾濫平野はJR紀勢本線以東、海岸平野へと続いている。「高野尾・大里丘陵」の東端までいた伊勢別街道は中の川を北から南に渡り、毛無川左岸の中位段丘にのりかえ、さらにその東端で南に折れ海岸平野に向かってだらだらと坂を下って一身田に至る。

2. 歴史的環境

六大B遺跡(24)周辺では、旧石器時代～縄文時代から生活のあとがみられる。六大B遺跡の南に位置し見当山丘陵の北裾にあたる大古曾遺跡(26)からはナイフ形石器が見つかっている。高野尾・大里丘陵でも東浦遺跡(1)からは尖頭器が見つかっている。また、大里西沖遺跡(2)では縄文時代中期の堅穴住居が検出されている。

番号	遺 跡 名
1	東浦遺跡
2	大里西沖遺跡
3	中鳶遺跡
4	川北遺跡
5	墓の谷古墳群
6	窪田大垣内遺跡
7	安養院跡
18	丸市遺跡
19	山王遺跡
20	内垣内遺跡
21	天堤古墳
22	河崎遺跡

番号	遺 跡 名
23	六大A遺跡
24	六大B遺跡
25	橋垣内遺跡
26	大古曾遺跡
27	新池2号墳
28	新池1号墳
29	西岡古墳
30	西岡2号墳
65	長遺跡
31	山籠遺跡
32	門脇北古墳
33	コウゼンジ遺跡

番号	遺 跡 名
34	宮ノ前遺跡
35	森山東遺跡
36	太田遺跡
37	松ノ木遺跡
38	蔵田遺跡
39	位田遺跡
40	替田遺跡
41	武ノ坪遺跡
42	里前遺跡
66	梁瀬遺跡
43	鎌切3号墳

第3表 周辺遺跡・路線内遺跡一覧表 (1～7：周辺遺跡、18～43・65・66：路線内遺跡)

弥生時代・古墳時代になると生活の場は東に移り、^④六大B遺跡はもとより、^⑤六大A遺跡(23)・橋垣内遺跡(25)・中鳶遺跡(3)・志登茂川左岸の川北遺跡(4)で遺構・遺物とも良好な資料が報告されている。しかし、古墳は点在するもののこの周辺で調査された古墳は墓の谷古墳群(5)の1号墳と川北遺跡内の古墳2基のみである。墓の谷1号墳は木棺直葬を主体とする円墳で主体部から鉄鏃が1本出土している。川北遺跡の古墳は後世の川北城築城の際削平されているが、周溝から出土した須恵器によって7世紀前半と考えられている。

古代、窪田の地は、平城宮出土木簡に「伊世国奄伎郡」「久喜多里私部小□□」として登場する。^⑩六大B遺跡をはじめ、窪田大垣内遺跡(6)・橋垣内遺跡^⑪・安養院跡(7)から掘立柱建物が相当数検出され、綠釉陶器・灰釉陶器・円面鏡等が出土しており、奄芸郡の中心であったことがわかる。「和名抄」記載の「窪田郷」もこの地に比定される。

中世の史料には「窪田庄」「窪田御厨」として登場する。また、中勢地方の雄、長野氏の与力である川北氏が志登茂川左岸に城を築く。川北城跡は調査の結果、堀と土塁に区切られた7つの郭と70棟以上の掘立柱建物などが見つかっている。

仁和2年（886）に開かれた鈴鹿峠を越えて伊勢の野に下ってきた東海道が、伊勢・志摩方面への道を分岐するのは鈴鹿郡関町（古代にあっては「鈴鹿駅」、近世では「関宿」）である。そこから椋本を経て安濃川の平野に下って南下するのが古代の伊勢・志摩へ向かうルートであった。斎王が京の都から斎宮に向かうのもほぼこのルートである。見当山丘陵沿いの松山遺跡では平安時代の古道が検出されているが、当時の街道であった可能性がある。^⑫

このルートが高野尾・大里丘陵上（あるいはその裾部）を通るようにならったのは室町時代以降である。

る。応永25年（1418）と同31年12月の將軍足利義持の参宮、永亨5年（1433）の將軍足利義教の参宮時や、連歌師堯孝の参宮帰路はこのルートによっている。^⑬江戸時代になるとこのルートは脇往還のひとつとされ、楠原（芸濃町楠原）・椋本・窪田の宿も整備された。「伊勢別街道」の名称は明治初年に定められたもので、明治12年に県道となり、昭和29年に主要地方道津関線となった。道路は一部付け替えられているが、窪田付近では北側に拡張されてはいるものの江戸期の位置を踏襲している。

註

- ① 山口 格 他「II. 大古曽遺跡」『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う 大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995年
- ② 清水正明・小林 秀「II 津市東浦遺跡ほか」『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1993年
- ③ 伊藤裕偉「3. 大里西沖遺跡の調査」『平成3年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 -第1分冊-』三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ④ 「六大B遺跡-B・C・D・E・F・G地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 1991年
・池端清行・中村光司「III. 六大B遺跡」『平成2年度団体営土地改良総合整備事業に伴う 六大B遺跡・大古曽遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1991年
・村木一弥「II. 六大B遺跡（B～F地区）」、近藤 健「III. 六大B遺跡（H地区）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター 1992年
・中村光司『平成3年度団体営土地改良総合整備事業に伴う 六大B遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1992年
・小菅文裕 他「六大B遺跡（I地区）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター 1993年
- ⑤ 「穂積裕昌・中村光司「II. 六大A遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ』三重県埋蔵文化財センター 1995年
・穂積裕昌・山本義浩「III. 六大A遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』三重県埋蔵文化財センター 1996年
・宮田勝功「III. 六大A遺跡（第3次）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター 1997年
- ⑥ 宮田勝功・穂積裕昌 他『一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う 橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997年
- ⑦ 萱室康光『中嵩遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1977年
- ⑧ 萱室康光「川北遺跡・川北城址調査概要」『三重の古文化52』三重郷土会 1984年
- ⑨ 萱室康光『墓の谷3号墳発掘調査報告』津市教育委員会 1976年
- ⑩ 木野本和之『窪田大垣内遺跡（第2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997年
・大川勝宏『窪田大垣内遺跡（第3次）・管ヶ谷古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997年
- ⑪ 萱室康光 他『安養院跡発掘調査報告』津市教育委員会 1990年
- ⑫ 浅生悦生「何が通ったか、都からの古道」『図説 津・久居の歴史』郷土出版社 1994年
- ⑬ 高士洋幸 他「伊勢別街道の現状」『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道』三重県教育委員会 1984年

III. 調査の成果

1. 基本層序

表土－包含層－地山が基本層序である。地山は調査区の北と南で低くなっているので中央が最も標高が高い。この遺跡が立地する高野尾・大里丘陵は西から東に向かって延びてきているが丘陵の尾根部分は当調査区の中央部を横切っている。

表土から地山まで浅い部分では現代の攪乱が深くまで入っていたが、地山まで達するものは少なかった。ただし、平成6年度調査部分では家屋を解体したあとの廃材が深く穴を掘って埋められていた。

調査区の南端では地表面が下がり包含層が厚くなる。調査区の北端では地表面が一段落ち込み、遺構はみられなくなる。そのまま六大A遺跡の地山レベルにつながっていくと思われる。時代が新しくなると（明治以降）土地を嵩上げして家が建ち始める。土層断面から置き土をして嵩上げした様子がうかがえる。

地山は調査区の南半では基本的に黄褐色シルトであるが、調査区中央付近では砂質となる。調査区北端では黒褐色シルトになる。

2. 遺構と遺物

(1)概要

中世～幕末及び近代の遺構が検出された。それらの遺構を出土遺物の年代によって、中世（12世紀末～16世紀中葉）、近世初頭（16世紀後葉）、江戸前期（17世紀）、江戸中期（17世紀末～18世紀中葉）、江戸後期（18世紀後葉～19世紀中葉）幕末・明治初期（19世紀後葉～末）、近代（20世紀以降）に分けた。江戸中期～後期にわたる遺物が出土した遺構は、江戸中期～後期とした。全体としては江戸中期、中期～後期、後期の遺構が多い。また、調査区の中央部から南東部にかけて遺構が集中し、土坑などが多く切り合う。それに対し調査区の北約1/3は遺構密度はきわめて低い。

(2)中世の遺構

井戸3基（SE5・6・82）、土坑3基（SK19・

20・78）、溝1条（SD12）が検出された。

井戸 どれも素掘りものもで、SE5とSE82は掘形はほぼ円形で、直径はそれぞれ2.3m、1.8mである。SE6は隅丸三角形に近く最大径は2.5m。検出面からの深さは、SE5が1.6m、SE6が2.3m、SE82が1.1mである。付属施設は検出されなかつたが、SE82の斜面にはこぶし大の石が貼り付くように検出されており石組み井戸であった可能性もある。

土坑 SK19・20が方形。規模はそれぞれ2.5m×2.1m、1.1m×1.1mである。SK78が0.9m×0.5mの楕円形である。深さはどれも0.2m～0.3mである。

溝 SD12は、最大幅1.1m。一方の端はSK29に切られ、もう一方は調査区外へ延びる。

(3)中世の遺構出土遺物

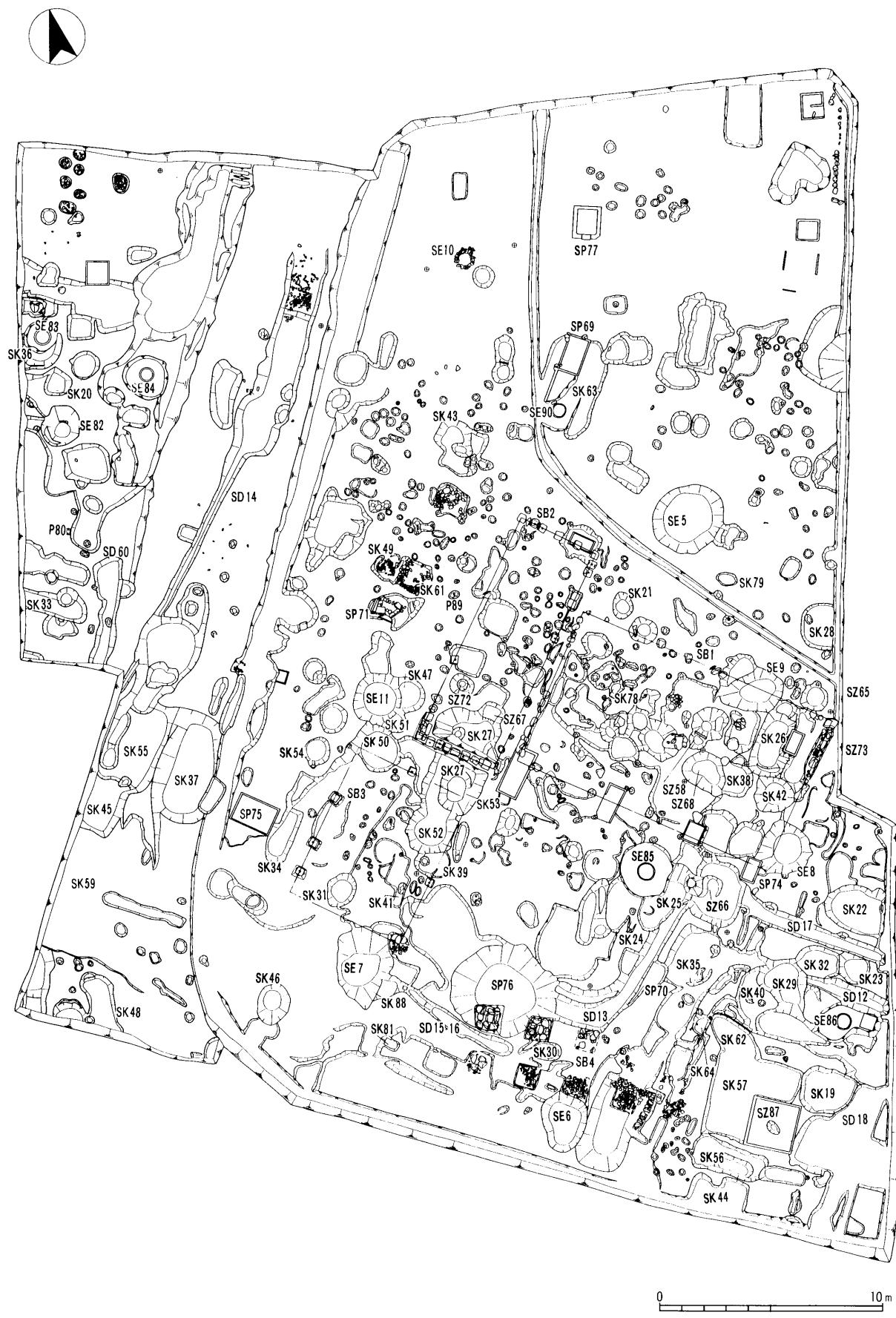
SK19出土の山茶椀(1)は底部のみだが藤澤良祐氏の山茶椀編年^⑯（以下藤澤編年と記述）では5型式にあたる。12世紀後半のものである。SE6出土の山茶椀（3～7）はいずれも藤澤編年の6型式にあたる。13世紀前半のものである。高台にはもみ殻痕が残る。SE5出土の山茶椀(2)も藤澤編年6型式のもの。また、常滑の甕口縁部(9)は、14世紀後半のものでN字に折れ曲がった口縁はよく下垂する。SD12の常滑焼甕(12・13)のうち、12は癒着てしまっているもののN字状口縁の痕跡を残す15世紀後半のもの、13は玉縁化する16世紀前半のものである。SK20からは13世紀代の土師器鍋(10)、同じく13世紀代の常滑焼甕口縁部(11)、それに19世紀中頃の行平鍋(14)が出土している。14は幕末頃家屋を建て替えた際に廃棄したものが混入したものであろう。信楽焼の製品で、腰高ではあるがすわりはよい。外面下半にすすが付着する。SK78からも藤澤編年6型式にあたる山茶椀(8)が出土している。底部外面には楕円を描いたような墨書きがある。

(4)近世初頭の遺構

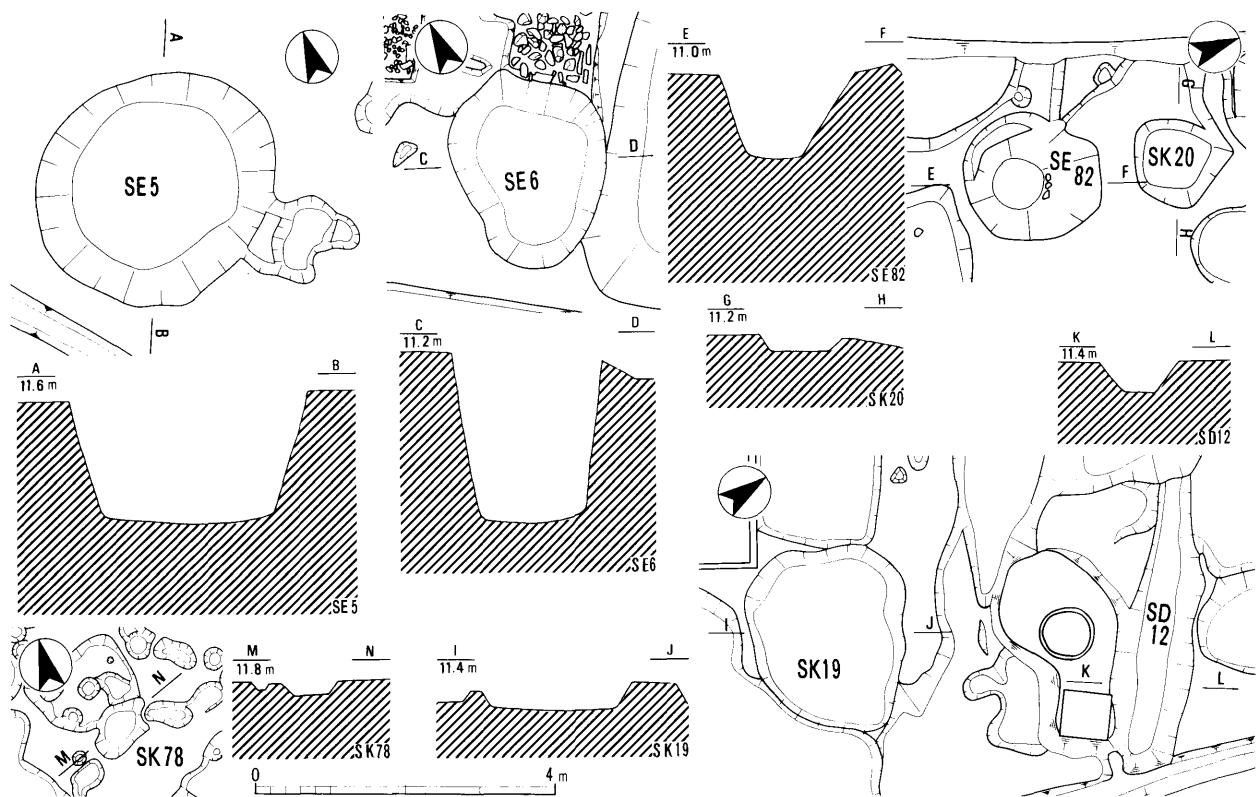
井戸1基（SE7）、土坑2基（SK21・22）、



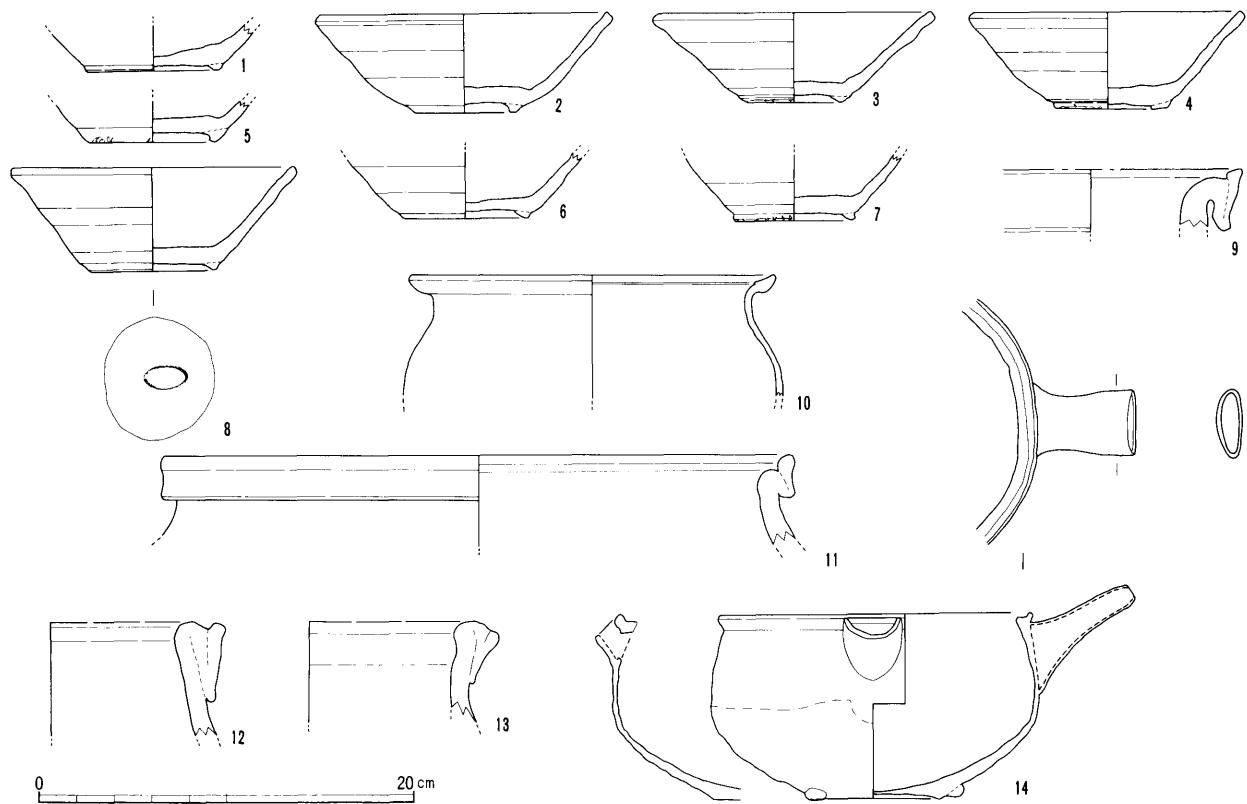
第5図 東壁土層断面図 (1 : 40)



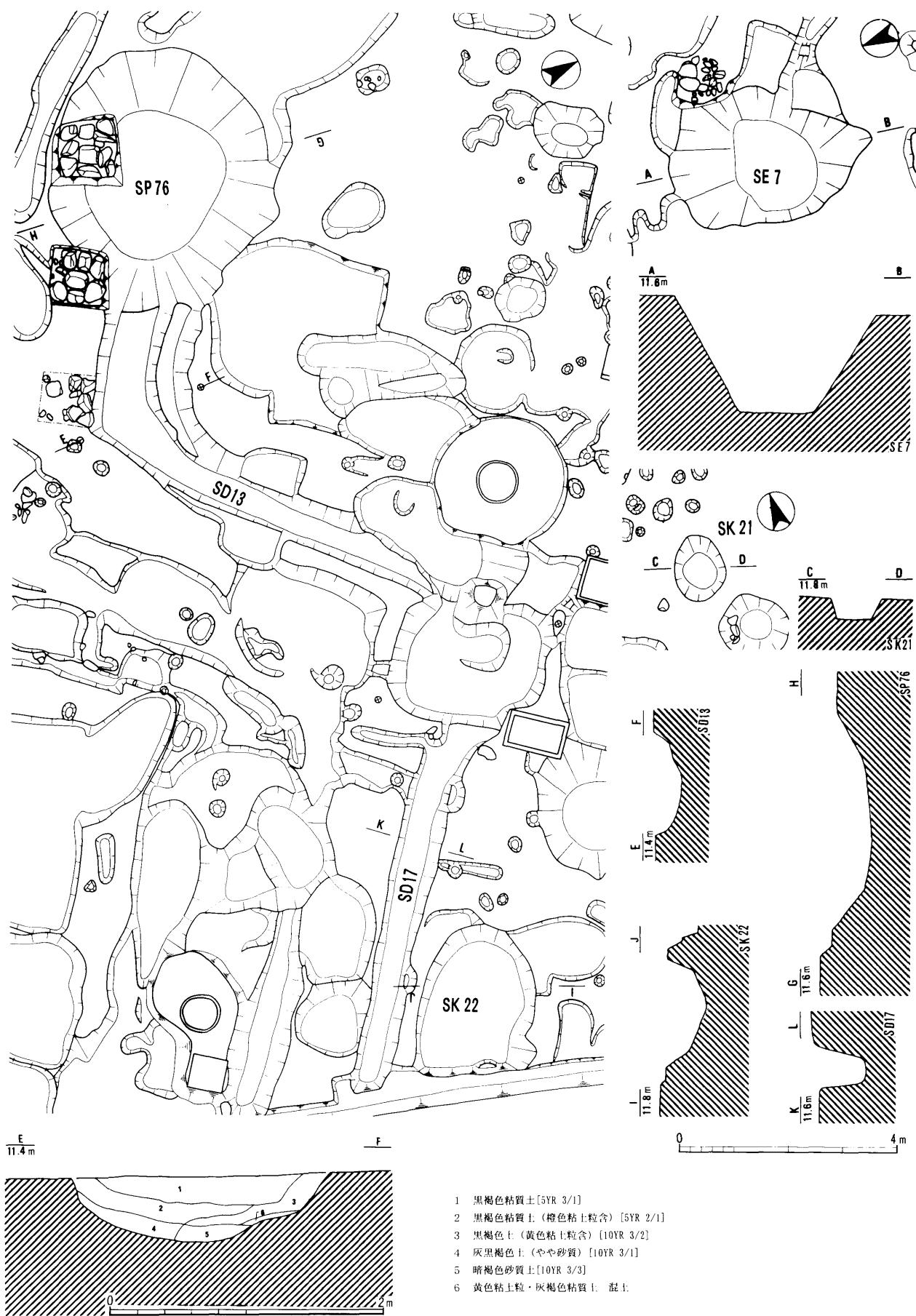
第6図 遺構配置図（1:250）



第7図 中世の遺構平面図・断面図 (1 : 100)



第8図 中世の遺構出土遺物実測図 (1 : 4) [1 : SK19、 2・9 : SE5、 3～7 : SE6、 8 : SK78、 10・11・14 : SK20、 12・13 : SD12]



第9図 近世初頭の遺構平面図・断面図（1：100）、SD13土層断面図（1：40）

溝2条（S D13・17）、水溜1基（S P76）がある。

井戸 S E 7は三角形状で検出されたが、もともと方形であったろうか。長辺3.7m×短辺2.5m、深さは2.2mである。

土坑 S K21・22はいずれも楕円形で、S K21は1.2m×0.9m、深さ0.4m、S K22は短径2.2mと大きく、調査区外に延びるため長径は不明である。深さは0.8m。

溝 S D13は幅0.8~1.7m、深さ0.5m。途中で約90°屈曲する。S D17は幅0.8m、深さ0.9m。一方の端は土坑（遺構番号なし）に切られ、もう一方は調査区外に延びる。

水溜め S P76は長径3.8m×短径3.0m、深さ0.9mで底は船底状になる。S D13と一連のものと考えられその形状から水溜めと判断した。

また、他の土坑等で切られてはいるが、S D13とS D17も一本につながる溝であろう。つまりこれらは調査区東に想定される住居等の施設からの排水路で、S P76に溜めて自然浸透、または蒸発させたものと考えられる。

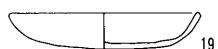
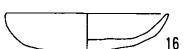
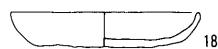
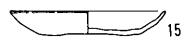
(5)近世初頭の遺構出土遺物

15~43はS E 7からの一括出土資料である。土師器皿（15~25）は口径によって、小型（口径約8.5cm、15~17）、中型（口径約10cm、18~23）、大型（口径12~12.5cm、24・25）の3つに分けられる。

内面はナデ、外面はナデとユビオサエによる調整がなされる。15・18・24など南伊勢系の様相をもつものとそうでないものがある。

26~32は陶器の皿である。26~30が瀬戸の大窯製品で、井上喜久男氏の編年で大窯V期のもの。¹⁶31・32が唐津焼製品で口縁部に鉄釉を施した皮鯨手と呼ばれるものである。

33は有田焼磁器碗。18世紀代のものが混入したのであろう。34は陶器碗で、全面に浅黄色の鉄釉系の



第10図 S E 7 出土遺物実測図① (1 : 4)

釉が施される。高台径が大きくどっしりとしたつくりである。やはり、17世紀代のものが混入したのであろう。

35の水注は大窯V期の製品で鉄釉が施される。39の黄瀬戸鉢は登窯II期の製品である。

38・40は無釉の焼締め陶。38は産地不明、40は常滑の製品である。41は瓦質の十能であろう。質からみて、19世紀幕末のものが混入しているものと思われる。

44~46は弥生土器、山茶椀の混入品。47~87は土師器である。土師器皿（47~61）もやはり口縁の径によっておおむね大中小に分けられそうである。また、49・53のようにやや深く、口縁内面に面をもつ皿がある。これはこの時期から江戸中期にかけてみられる皿である。57・59は口縁に煤が付着しており、灯明皿として使われたものであろう。南伊勢系の特色をもつものを見出すのは難しいが、55~57がそうであろうか。62は南伊勢系の鍋。63~83・85は羽釜である。83は鍔と口縁に他とちがった特徴がある。84・86は茶釜、87は内耳鍋である。耳は二カ所で、それぞれ2つずつ穿孔される。

88~98は陶器である。93は大窯V期の製品で、見込みに菊の印刻が施される。94は信楽の擂鉢。95は常滑の製品で15世紀後半のもの。97・97も常滑の製品である。

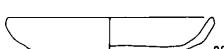
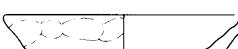
99~103の円形加工製品はいずれも陶器である。

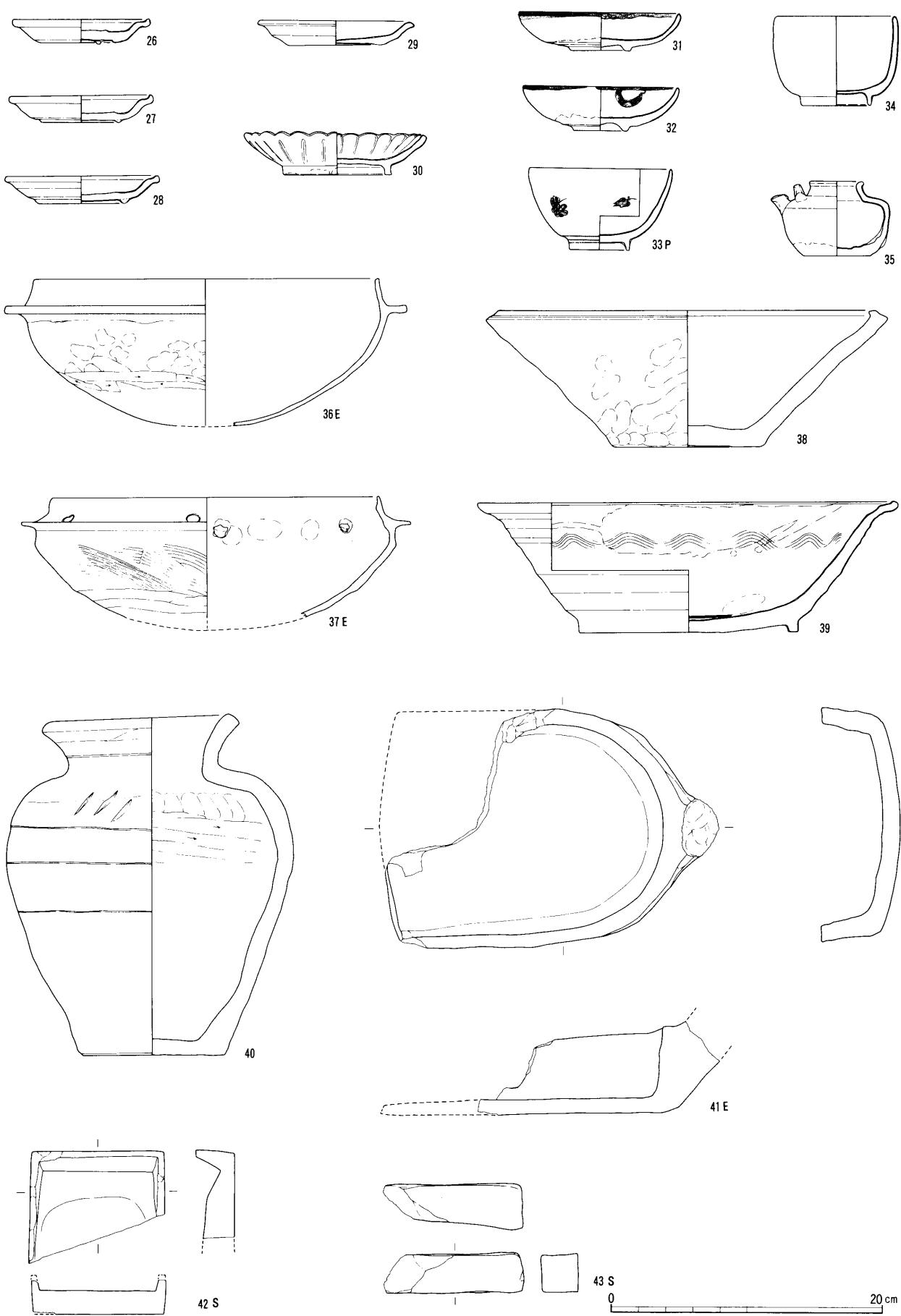
99・102は常滑の甕、101は信楽の茶壺、103は天目茶碗を用いたものである。

(6)江戸前期の遺構

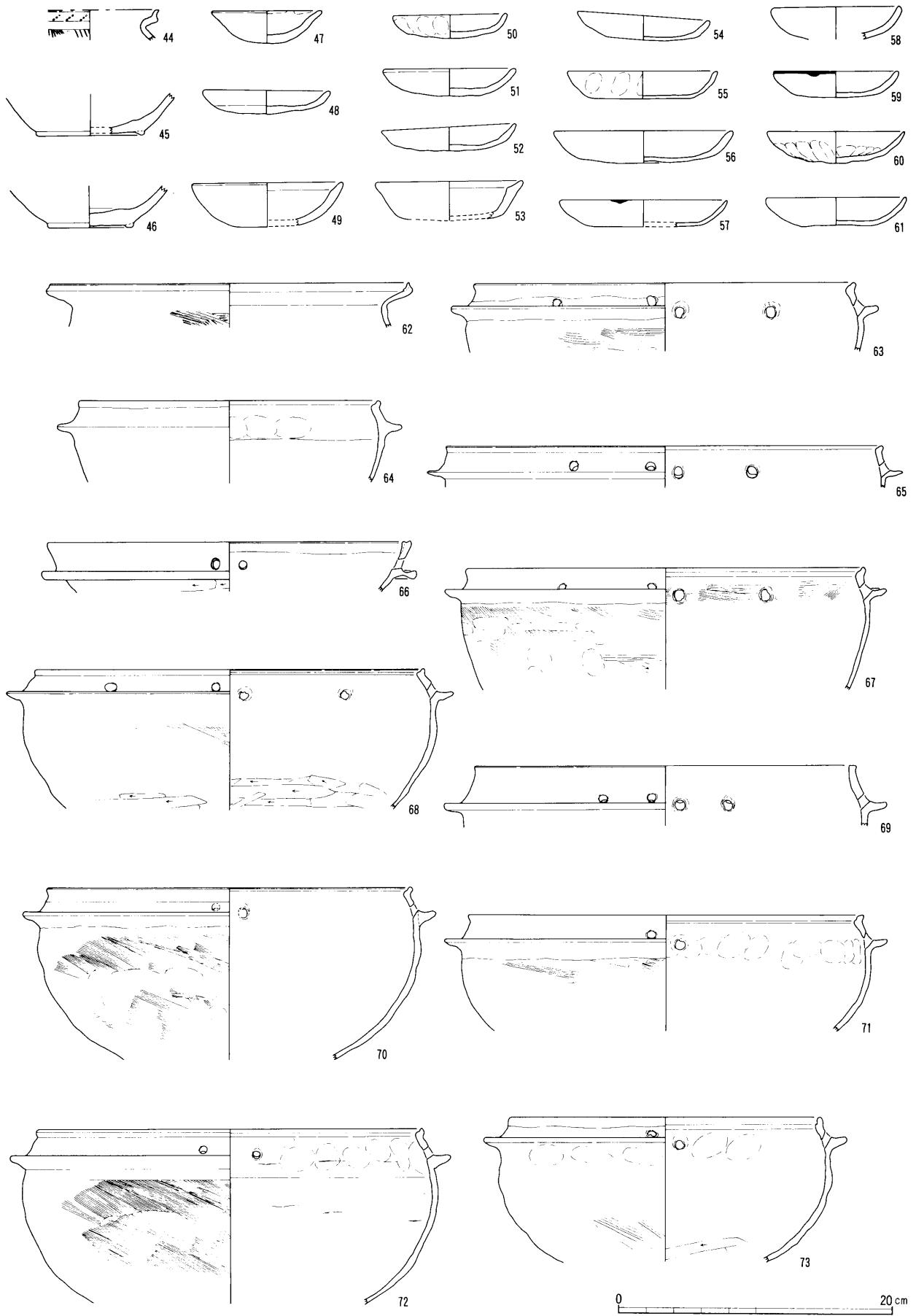
土坑6基（S K23・24・31・32・62・79）と溝1条（S D60）がこの時期の遺構である。

土坑 S K31・62・79は楕円、S K23・24・32は他





第11図 SE 7 出土遺物実測図② (1 : 4)

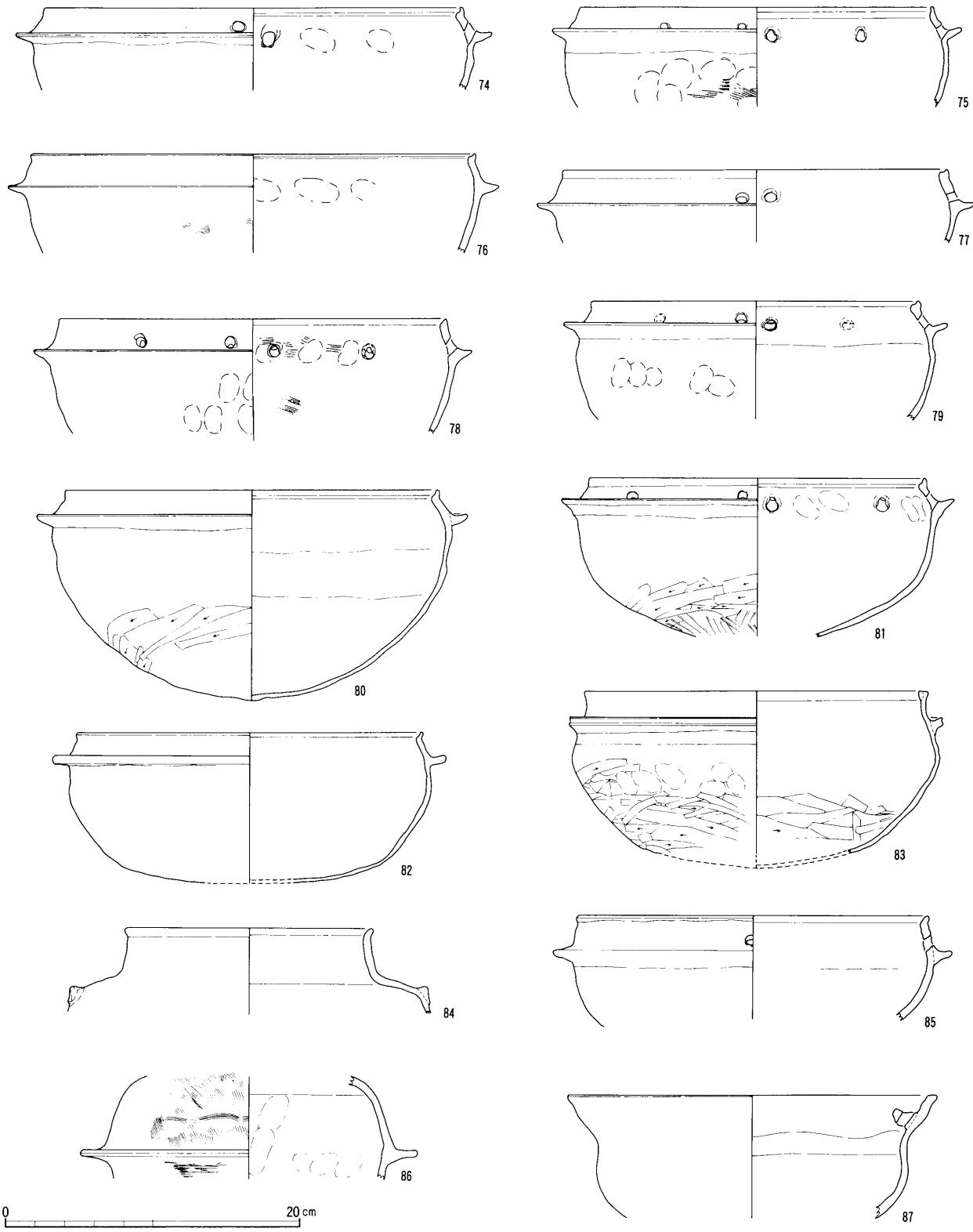


第12図 近世初頭の遺構出土遺物実測図① (1 : 4) [44・47・48・50~56・62~73: S D13、45・46・49: S D17、57~61: S P76]

の土坑等に切られているが方形と考えられる。規模はSK31は長径1.7m×短径1.3m、深さ0.4m。SK62は推定2.5m×1.2m、深さ0.3m。南端を正方形の土坑（遺構番号なし）に切られている。SK79は1.0m×0.6m、深さ0.4m。SK23が1.3m×1.3m、

深さ0.3m。SK24が短辺0.3m長辺は不明、深さ0.2m。SK32は2.0m×1.2m、深さ0.4m。SK23とSK32の切り合い関係は不明。SK32はSK29に切られる。

溝 SD60は調査区の西端に近いところで検出した。



第13図 近世初頭の遺構出土遺物実測図② (1 : 4) [74~81・86・87: S P76、82・85: S D17、84: S D13、83: S K21]

細長い形状であるため S D とした。幅は0.9m、深さ0.35m。北端部は幅が広くなりやや深くなる。遺構全体がわからず遺構の性格は不明だが、あるいは S D13・S P76と同様、排水溝と蒸発または浸透させるための水溜めであろうか。

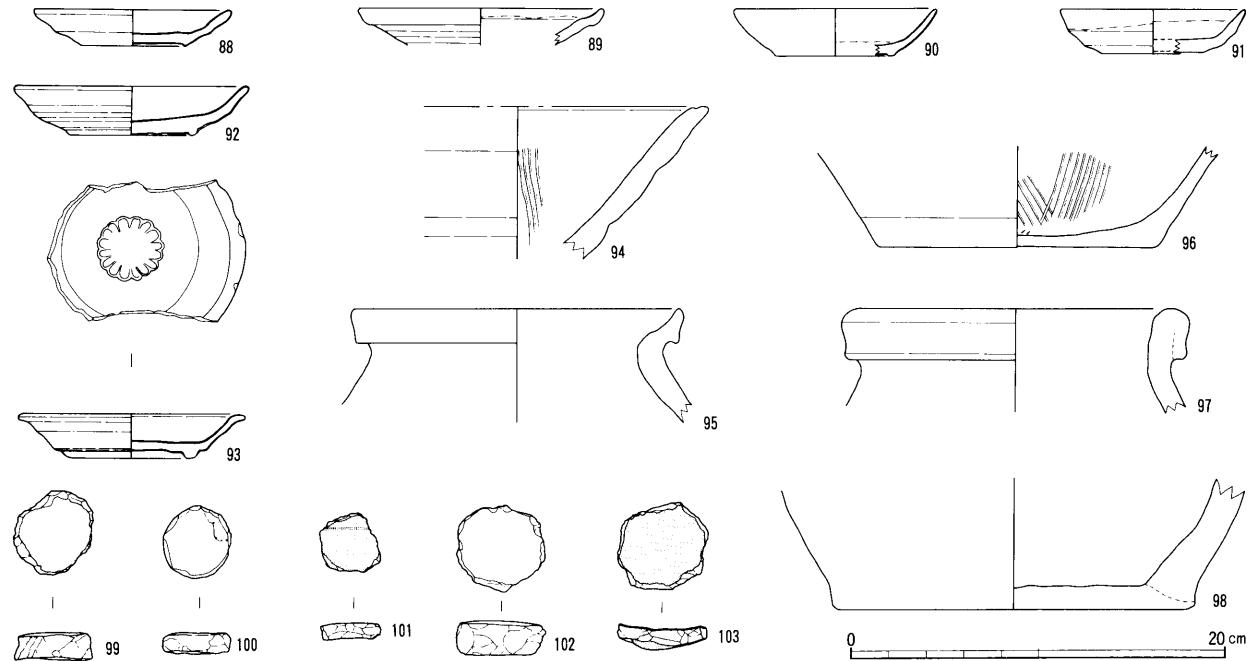
(7)江戸前期の遺構出土遺物

104~109・111は土師器皿。108は口径6cmと小さいが、他は10cm~13cmと中~大のものである。105・106・111は深いタイプである。105と106は口縁内面に面をもつが、111の口縁端部は丸くおさまる。なお、108のような浅く口径の小さな皿は江戸後期から幕末に多くみられ、これは混入の可能性もある。

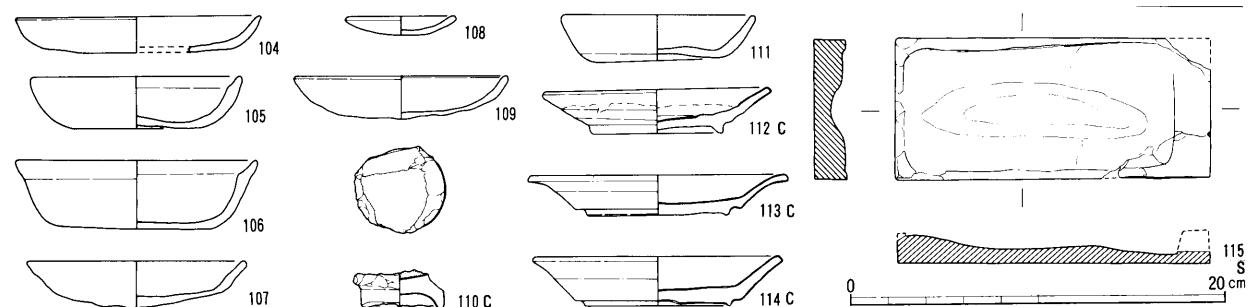
112~114は陶器皿でいずれも井上喜久男氏の編年¹⁷⁾で登窯II期のものである。

(8)江戸中期の遺構

井戸2基(S E 8・11)、溝3条(S D14~16)、



第14図 近世初頭の遺構出土遺物実測図③ (1 : 4) [88・89・94・95・97・98: S D13, 90・91・96・99・100: S P76, 92: S D17, 93・101~103: S K22]



第15図 江戸前期の遺構出土遺物実測図 (1 : 4) [104~106: S D60, 107: S K31, 108~110・112: S K23, 111: S K32, 113: S K24, 114: S K79, 115: S K62]

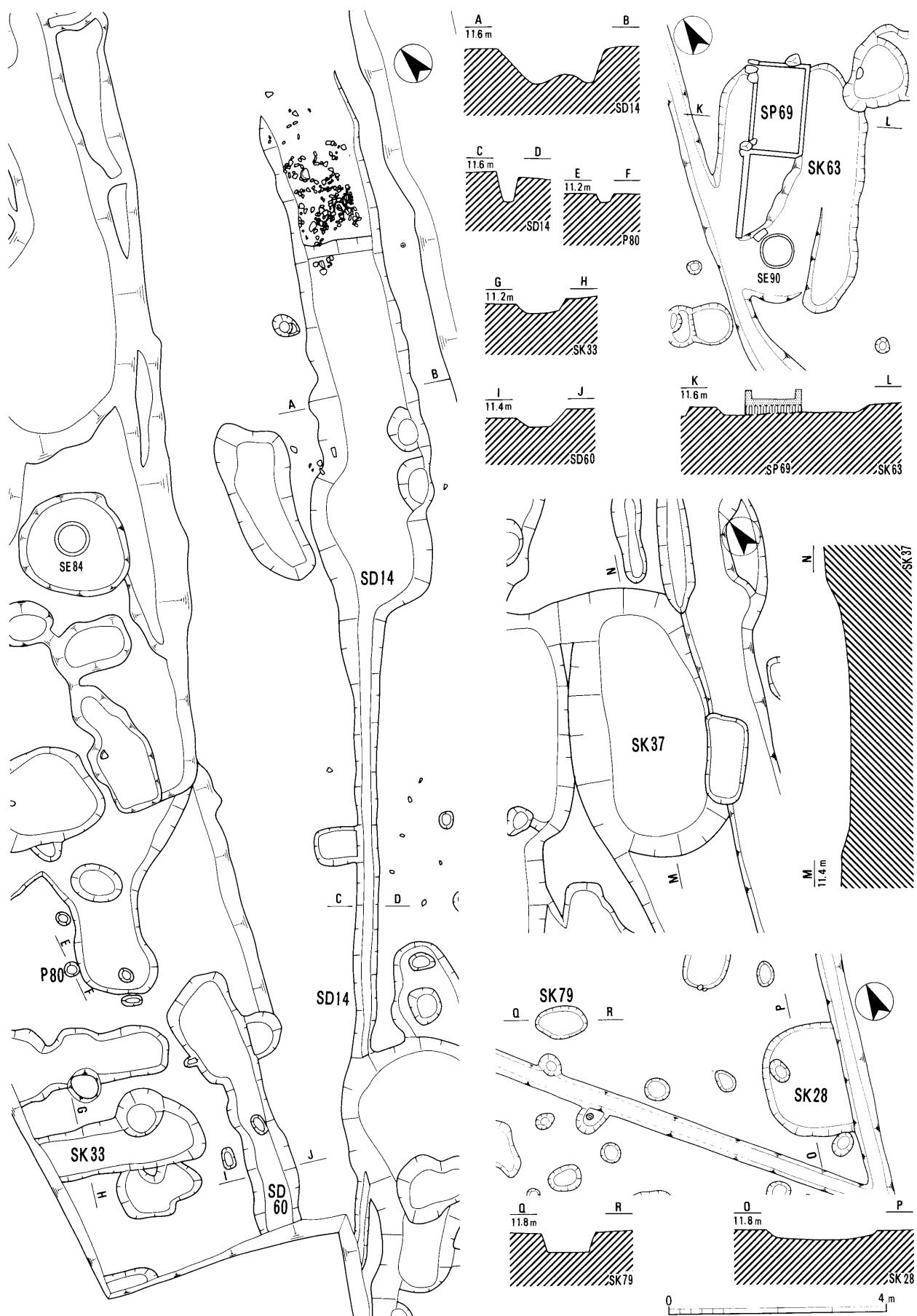
土坑2基(S K25・26)、近世埋甕遺構6基(S Z 58・65~68・72)がこの時期の遺構である。

井戸 S E 8・11ともほぼ円形で、直径はそれぞれ2.3m、2.15m。深さはそれぞれ1.8m、1.6mである。表面観察では S E 11は S K47に切られる。

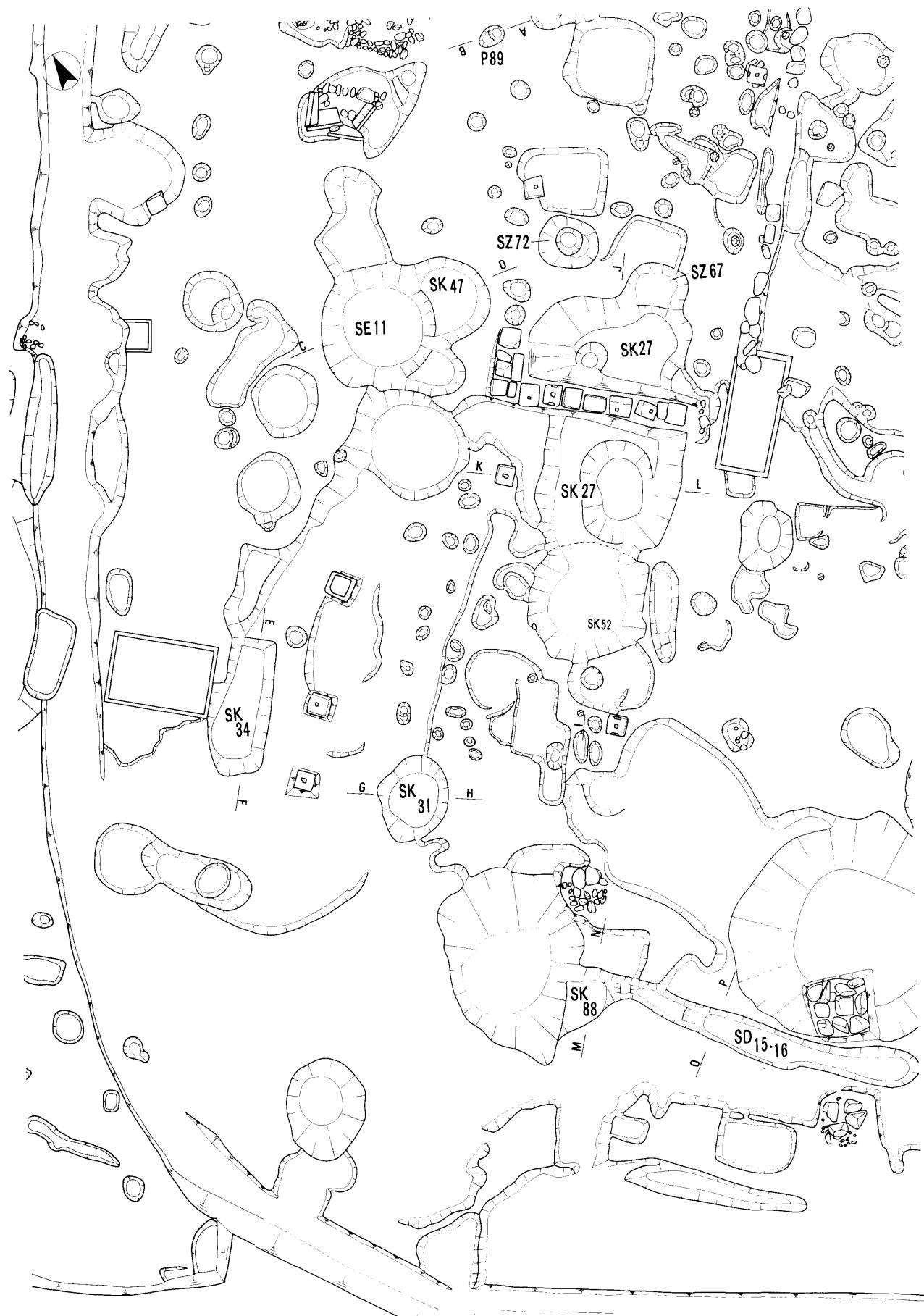
溝 S D14は幅0.3m、深さ0.6mと狭く深い。北半部分で幅が広がるようであるが、これは後世の溝が重複しているためで S D14は幅0.3m程度で続していく。北端部は別の遺構(石敷き)がかぶさってきており表面観察で明瞭に区別できなかった。

S D14の方向N40°Eは当時のこの地域の地割りの方向と思われ、S D14は屋敷地の境の溝と考えられる。

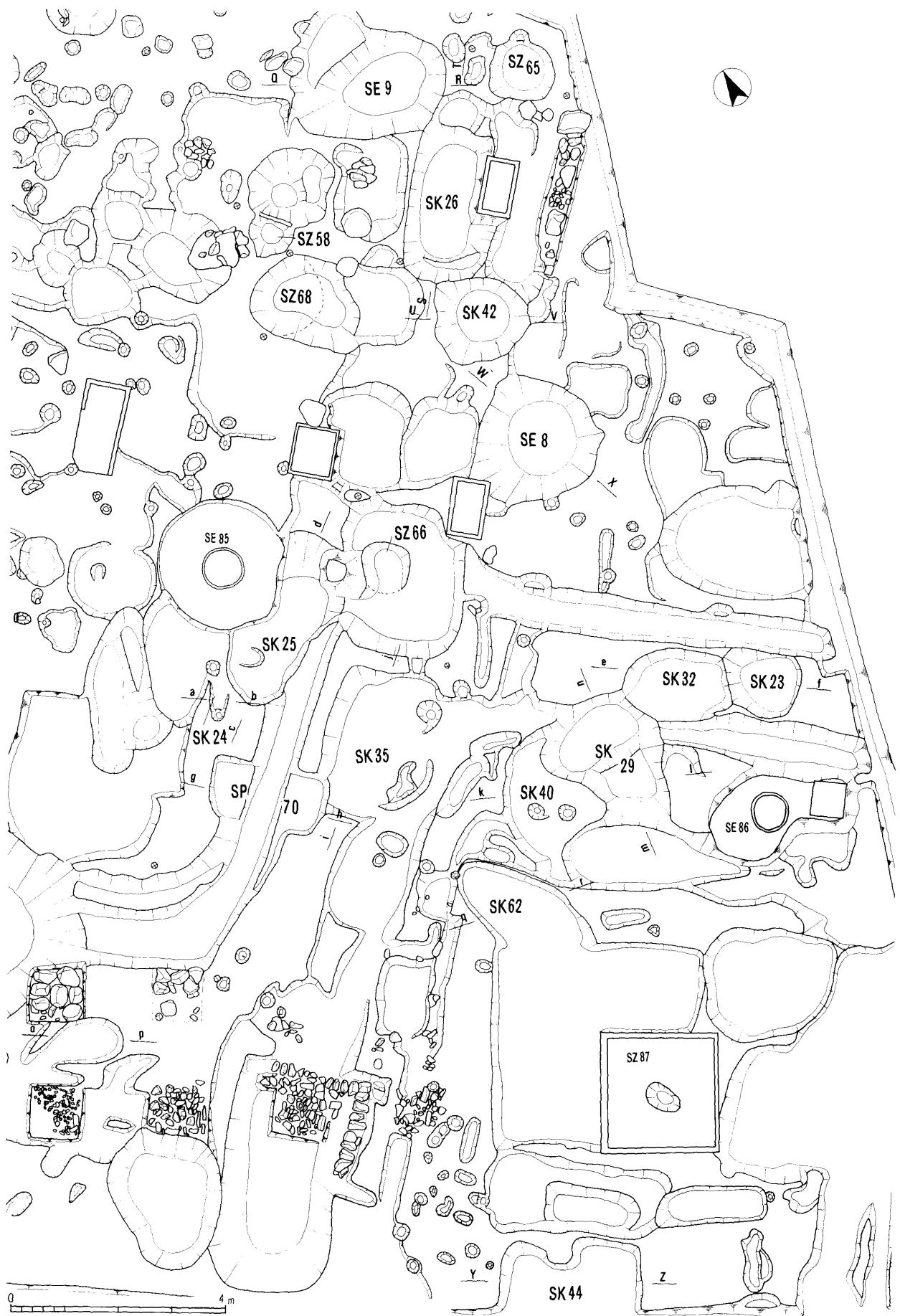
S D15・16は調査区の南端に近いところで重複して検出された。検出された長さは5.6m、深さは0.6m。二つの溝の前後関係は検出時の切り合い関係から S D16→S D15である。



第16図 江戸前期・中期・中期～後期の遺構平面図①・断面図① (1 : 100)



第17図 江戸前期・中期・中期～後期の遺構平面図② (1 : 100)

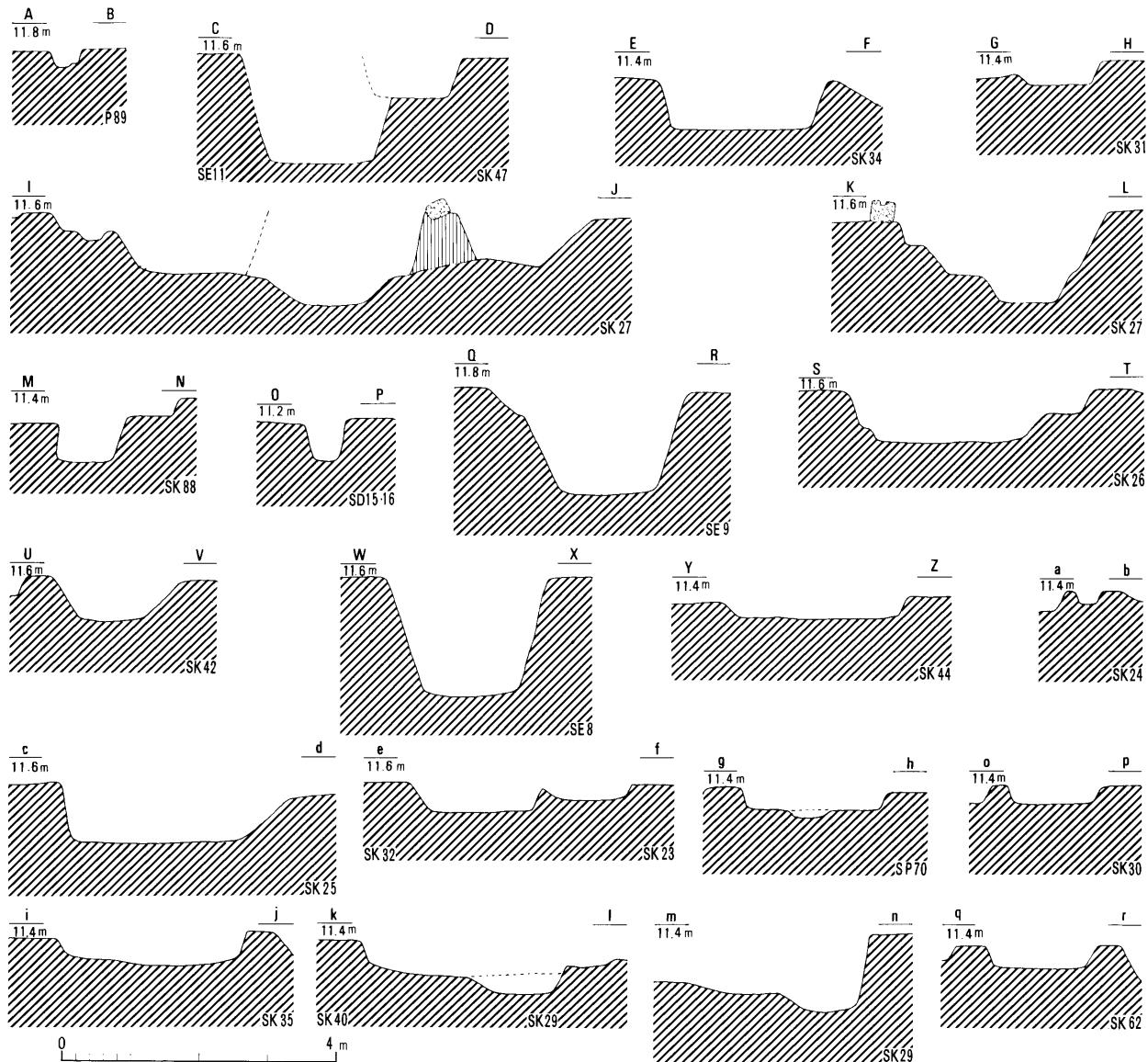


土坑 SK25は楕円形で長径3.4m×短径2.0m、深さ0.9m。SK26は長方形で長辺2.7m×短辺1.8m、深さ0.75m。SK25はSD13を切り、SE85に切られる。また、SK25の上にSB1の基礎石の1つがのる。SK26は整った形をしている。二段掘りのようであるが上にあった浅い土坑を切っている。SB1のちょうど「勝手」の位置にあり、SB1を建てる際前の時期の廃棄物を埋めたものであろうか。

近世埋甕遺構 SZ58・65～68・72は近世埋甕遺構である。(縄文時代の埋甕と区別するためにここでは「近世」を冠して記述する)常滑焼大甕の下半分～1/3を上中に埋めて安定させ、水などの液体や穀物等を貯蔵する施設である。使われていた甕はいず

れも「赤もの」と呼ばれるもので、中野晴久氏によれば18世紀に真焼けから分離した可能性がある。口縁の形態から6基とも18世紀前葉からせい中葉まででおさまる。SB1の中(SZ58・68)やSB2の中(SZ67・72)で検出されたものもあり建物に伴う可能性もあるが、建物の中に占める位置から考えると伴うか否かの断定はしがたい。同時存在については、甕の制作年代と使用年代の違いも考えられ、いちがいにはいえないが、前述の2組(SZ58と68、SZ67と72)はそれぞれが互いに近く、2個セットで用いられた可能性もある。

甕を廃棄する際にはじゃまになる地上部分を打ち割って中に入れ、整地していると考えられる。



第18図 江戸前期・中期・中期～後期の遺構断面図② (1 : 100)

(9)江戸中期の遺構出土遺物

116~137はS E 8出土の一括遺物である。

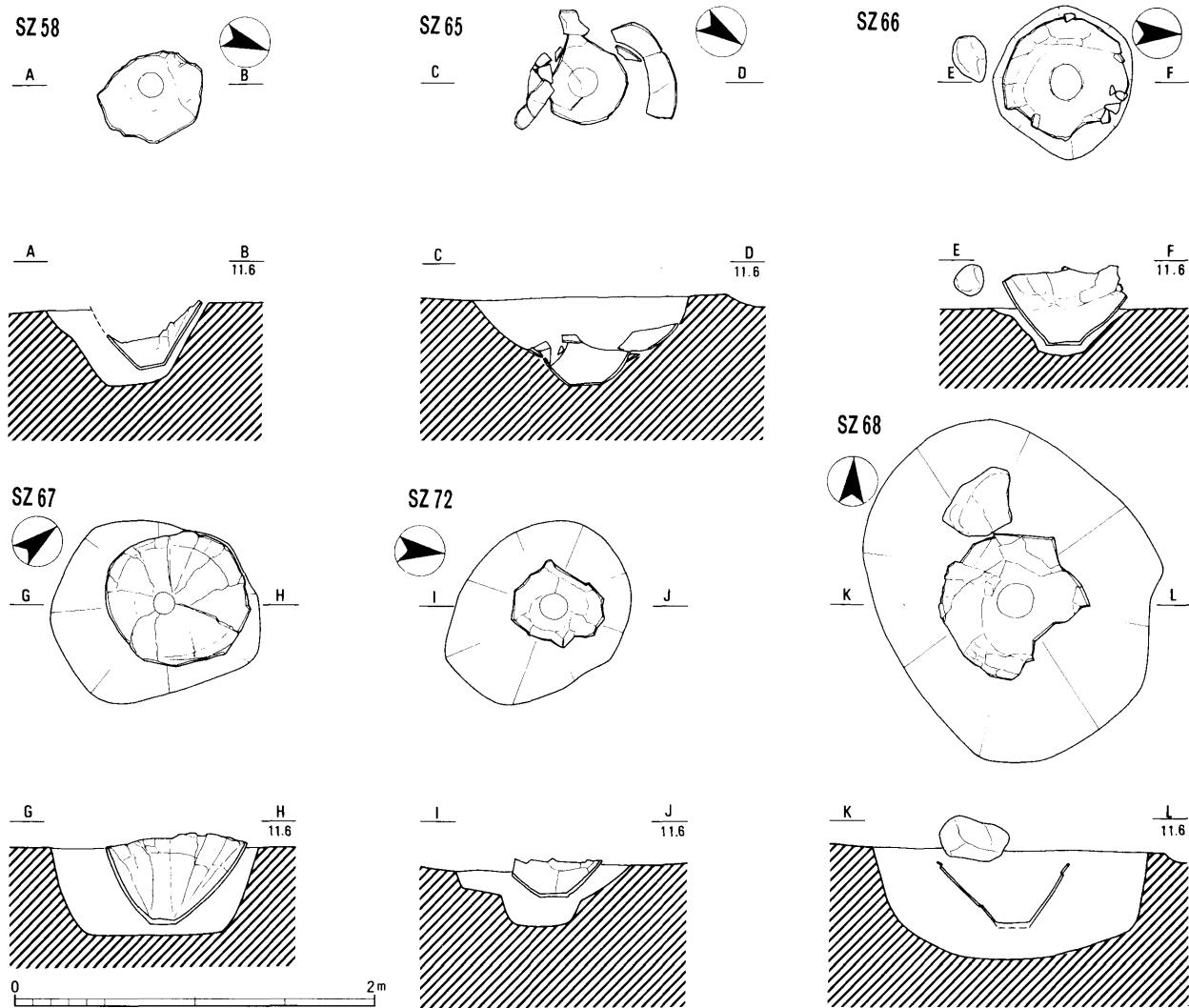
116~122は土師器である。皿(116~120)はやや湾曲した底部から体部がゆるやかにたち上がるもの(116・118・119)と、ほぼ平らな底部から屈曲して直線的に体部がたち上がるもの(117・120)とがある。前者は口径が7.2~8.4cmであるのに対し、後者は10.2~11.2cmとやや大きい。116と120の口縁にはすが付着する。122は壺で、丸い体部と垂直にたち上がる口縁部をもつ。口縁端部は外に折り曲げられる。

陶器(123~131)のうち、123~126は瀬戸製擂鉢である。底部のみの破片であり時期が決めがたいが、123は登窯II期のもの。124→125→126と次第に目が細かくなっており、だんだん新しくなる。127~131は仏飯具・碗・皿である。天目茶碗(128)は底部径

が大きく、内面は体部から見込みにかけてゆるやかに湾曲する登窯IV期のもの。129は鉄釉丸碗で大きくしっかりしたつくりである。やはり登窯II期のもの。130は木瓜形皿で登窯IV期のもの、131は菊皿で登窓III期のもので、ともに御深井釉である。

S D14~16、S K25・26、S Z66・67の出土遺物が、138~184及び、188~190である。土師器(138~158)と陶器及び無釉の焼締め陶で、磁器はみられない。

土師器皿は口径が10cm前後のものと12cm前後のものが多い。深さは2cm程度だが、152・153は深い。152は口縁内面に面を持つタイプである。153は平らな底部から垂直に体部がたちあがるもので、300と類似する形である。S Z67の甕内の出土である。158の鍋は半球形の体部と外反する口縁をもつもので、口縁端部は丸くおさまる。



第19図 近世埋甕遺構実測図 (1 : 40)

陶器皿には輪禪げ皿(159・161・163・164・173)や丸皿(160)などがある。いずれも18世紀中頃のもの。162は時期不明。165の灯明受皿は19世紀代のものの混入であろう。166はひし形の小皿で高台もひし形である。白色の胎土に透明釉がかけられる。口縁端部にはさび釉がかかる。大皿(167)は内面に灰釉系の釉がかけ分けられている。火舍(168)は焼締め陶で無釉である。陶器碗には、丸碗(169~172)や天目茶碗(177~180)などがある。丸碗には灰釉のものと鉄釉のものがある。高台径が大きくすわりのよいつくりで18世紀前~中葉でおさまるのもであろう。天目茶碗も登窯IV~VI期のものである。178はやや古い様相を示しⅢ期にのぼる可能性がある。このほかによろい茶碗(174)や刷毛目装飾の施された刷毛目碗(176)などがある。181・182は常滑焼甕の口縁部。¹⁹182は赤羽編年で14世紀初になるSK26への混

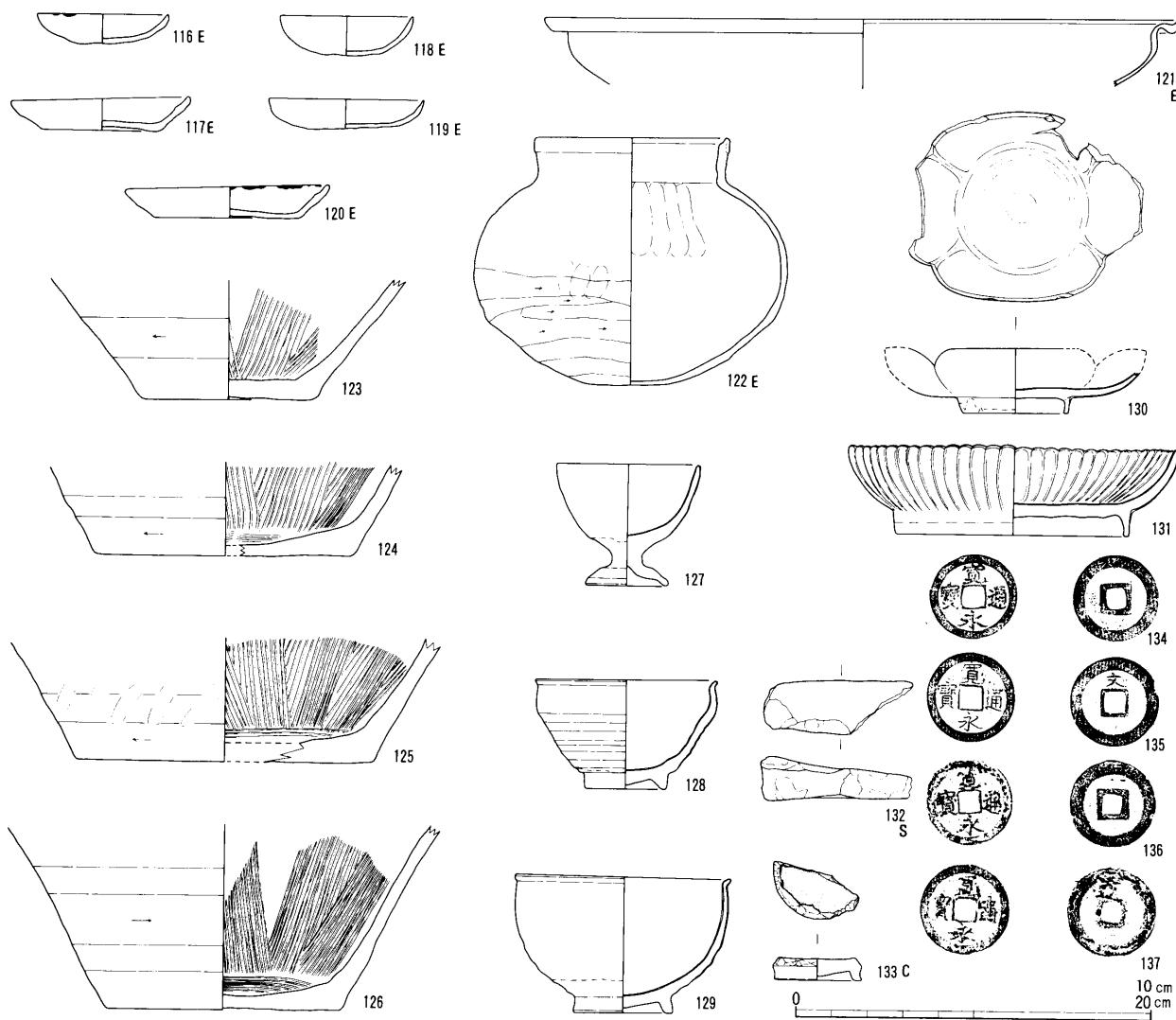
入品。184は無釉捏鉢である。産地は不明。183は京焼風陶器碗で18世紀中葉のもの。見込みには鉄釉による絵(山水か)が描かれる。残存部分に印は認められなかった。S Z66出土である。

185~187は近世埋甕遺構の甕でいずれも常滑焼の赤ものと呼ばれるもの。185=S Z65、186=S Z66、187=S Z68である。全体にナデ調整が主体である。187の体部のもっとも張る部分は内面にオサエによる凹凸が顕著である。また、187の内面下部には褐色の付着物がある。分析はしていないが鉄と思われる。

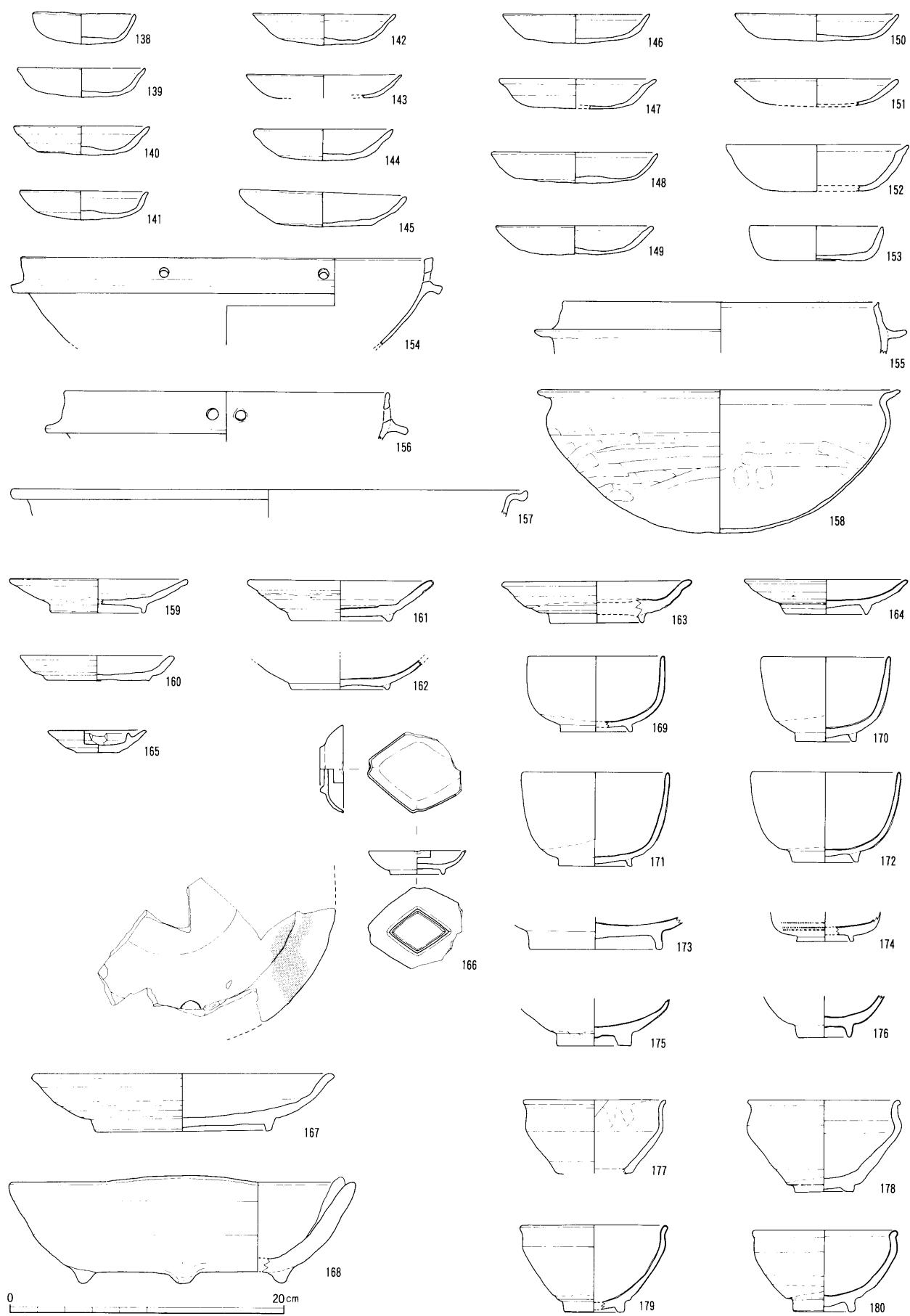
188~190は円形加工製品で、高台を利用したもの(188・190)と体部を使ったもの(189)がある。189は無釉で、凹線が入る。

(10)江戸中期~後期の遺構

井戸1基(S E 9)、土坑14基(S K27~30・33



第20図 SE 8 出土遺物実測図 (1 : 4、134~137は1 : 2)

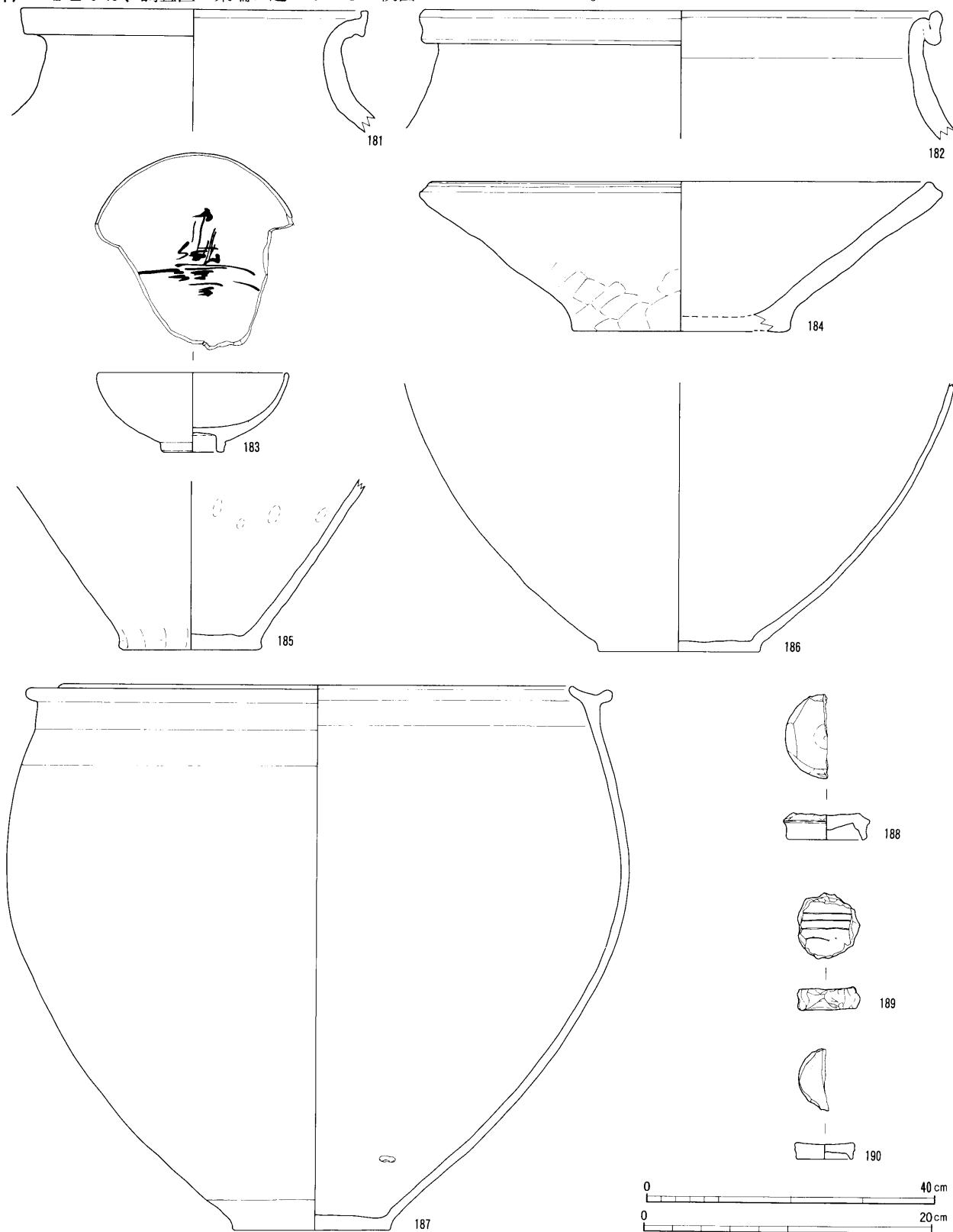


第21図 江戸中期の遺構出土遺物実測図① (1 : 4) [138~151・154・159・160・166~168・177・178: S D14、152・155~157・162・165・169~176: S D16、153: S Z67、158・161・163: S D15、164・180: S K26、179: S K25]

～35・37・40・42・44・47・63・88)、タタキ製マス(水槽)(S P 69・70)、ピット(P 80・89)がこの時期の遺構である。

井戸 S E 9は、調査区の東端に近いところで検出

された。掘り方は楕円形、規模は長径3.0m×短径2.0m、深さ1.55mである。S B 1の礎石の一つが埋土の上にのっているため、S B 1にともなう井戸ではない。



第22図 江戸中期の遺構出土遺物実測図②(1:4、185~187は1:8) [181・184: S D16、182: S K26、183・186: S Z66、185: S Z65、187: S Z68、188~190: S D14]

土坑 S K27は、長方形と考えられるプランをもつ、長辺約4m×短辺2.6~2.9m、深さ0.9~1.3mと比較的大きな土坑である。2段掘りであり、0.9mの深さからさらに、1.9m×1.4mの楕円形の範囲が深さ1.3mに掘り下げられている。S K27の中央部をS B2の基礎（布基礎）が横切っており、S B2を建てる前に不要物を廃棄するために掘られ、その後整地されたものであろう。S K27の北端部はS Z67を切り、南端部はS K52に切られる。

S K28は調査区の東端で検出された。S E9のすぐ北東にあたる。半分程度が調査区外になるため、隅丸の正方形ないし長方形と思われる。規模は1辺2.0m×X、深さ0.2m。

S K29・40は、表面観察では切り合い関係が判別できず、一連の遺構として検出された。プランは、円形か楕円形あるいは不定形である。S K29の規模は南北が推定2.5m、東西が推定2.0m、深さは2段で0.8~1.1m。S K40の規模は南北が推定2.5m、東西は不明、深さは0.5mである。S K35は、S K40のすぐ西で検出された。東辺が明瞭ではないが、2.1m×2.9mの長方形のプランをもつ、深さ0.5mの土坑である。

調査区南東部1/4のエリアは、江戸前期や中期～後期の土坑が集中するところであり、S K23・32・62とS K29・35・40がそれぞれ相前後して掘られたものであろう。この付近は、このころまで屋敷地内としてはとらえられず、廃棄のための土坑が相次いで掘られたものと考えられる。S B1の成立にともない、住宅の前庭として整備されていったものと思われる。

S K30は、調査区の南端に近いところで検出された楕円形のプランをもつ土坑である。長径推定1.4m×短径0.85m、深さ0.25mである。

S K33は調査区の西端で検出された細長い長方形のプランをもつと思われる土坑である。長辺は調査区外に出る。検出長は2.8m、短辺は1.0m、深さ0.2mである。

S K34も細長い長方形の土坑である。長辺2.55m×短辺1.2m、深さ0.75mである。

S K37は調査区の西端に近いところで検出された楕円形のプランをもつ土坑である。規模は長径5.0

m×短辺2.6m、深さ0.4mと広く浅い。付近は、江戸後期、幕末と時期を変えて比較的大きな土坑が隣り合っている。このあたりは現代の家も建ってなかつたところであり、当時から屋敷地外あるいは屋敷地内でも縁辺部で、廃棄のための土坑が次々に掘られたのである。

S K42のプランはやや崩れてはいるが円形の土坑と考えられる。直径1.6~1.7m、深さ0.7m。S B1の内部にあるが、S B1の東の基礎の一つがS K42の上にかかるため、S K42がS B1に先行すると考えた。

S K44は調査区の南東部で検出された。不定形をしており、長方形と楕円形の土坑が2つ連なったものとも考えられる。東西長2.7m、深さ0.3mである。

S K47は江戸中期の井戸S E11を切る形で検出された円形の土坑である。直径1.5~1.7m、深さ0.6mである。S K51に接するが、切り合いは明瞭でなく、時期判断は遺物によるのみ。

S K63は調査区の北方で検出された。水道管理設溝や近代の井戸S E90に切られるが、隅丸長方形のプランをもつ。長辺4.5m×短辺2.7m、深さ0.15mで底は平らである。タタキ製のマスS P69が上にのるが、いずれからも江戸中期～後期の遺物が出土している。マスはS P69の南に隣接してもう1基ある。この南のマスを作る際の整地としてS K63が掘られ、その後、S E90を掘ったためマスは北に移された（S P69）と考えられる。S E90は陶器の井戸側を持ち、その陶器の形状から近代のものと判断したが、井戸側だけ後世に作り替えられていると考えれば上記のように推測される。S P69とその南のマスはほぼ同じ規模で、1.7m×1.0m、深さ0.2mである。一見南のほうが頑丈にみえる。

S K88は一部近世初頭の井戸S E7にのっかるような形で検出された。一辺1.5~1.6mの方形であろうか。深さは0.6m。江戸中期の井戸（S D15・16）の西端にあたるが、関係は不明。

S P70はS D13の上にちょうどのっかる。タタキはすでに形がなくなり、マスを据えたときの掘り方のみが検出された。長辺2.3m×短辺1.2m、深さ0.3mの長方形である。

P80とP89の2つのピットはお互い離れている。また、それぞれのピット周辺にピットは散在するものの、建物としてはまとまらなかった。ただ、江戸中期～後期のピットが存在するということは、掘立柱建物がこの時期まで存続したことをうかがわせる。P80は径0.3mの円形、深さ0.15m。P89は0.5m×0.35mの楕円形。深さは0.2・0.25mの二段である。

(1) 江戸中期～後期の遺構出土遺物

山茶碗(191)は混入品である。底部のみの破片だが、藤澤編年5型式～6型式にあたる。

土師器皿(192～213)は、口径からみると10cm内外の中型が最も多く、次いで8cm前後の小型が多い。12cmある大型(204)はごく少なく、超小型ともいべき6cm以下のもの(195・200)が混じるようになる。形からみると底部から体部がゆるやかにたちあがり全体が湾曲するもの(192・196・198・199・201～203・208～210)と、平らな底部から体部が直線的にたちあがるもの(193・194・197・204～207・211～213)とに大別できる。超小型の2点は底部の周辺がわずかにたち上がるだけである。

土師器鍋(214～221)は口縁端部が上に摘まみ上げられさらに内側に折り曲げられる。体部はヘケズリ(220)またはハケ(221)調整が施される。器壁は非常に薄く体部の残りはよくない。

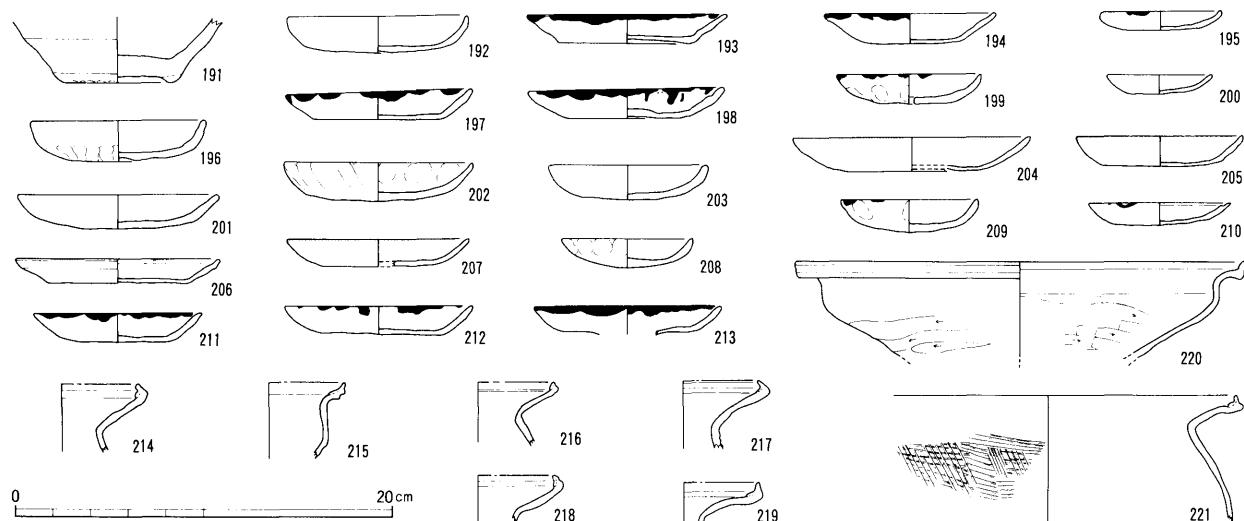
土錘(256)は比較的大きく穴も太い。土錘の出土はこれを含めて3点のみである。

陶器(222～255・257・258)には、皿・碗・灯明具・鉢などがある。

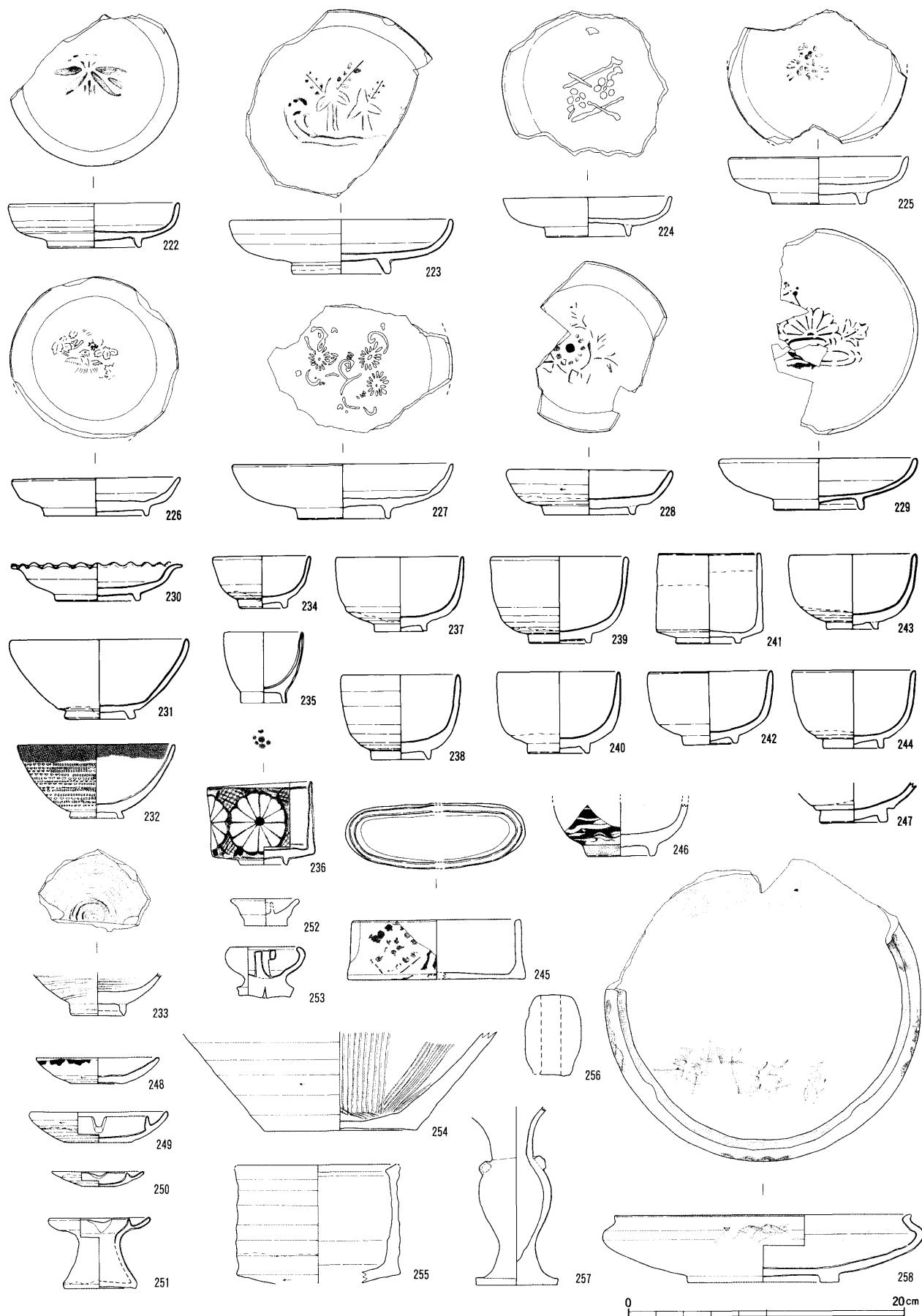
222～229は刷り絵皿で、見込みに型紙刷りによる絵が描かれる。絵は鉄釉によるものと呉須によるものとがある。呉付以外の全体に施釉される。いずれも瀬戸あるいは美濃の製品で登窯V～VI期のものである。230は外反した口縁を波打たせた輪花皿で、瀬戸製品。やはり登窯VI期のもの。

231は瀬戸の碗で登窯VII期のもの。底部と体部の境に稜をもち、体部はわずかに内湾しながら斜めにたちあがる。232はよろい茶碗で登窯VII期のもの。233と246は刷毛目碗で、18世紀中～後葉によくみられる。233は淡赤褐色の素地に白泥を刷毛で塗り、透明釉をかけたもの。246は濃緑褐色の素地にやはり白泥を刷毛で塗り付けて装飾している。234・235はともに小碗で、瀬戸製品登窯II期のもの(234: S K27出土)と信楽製品の青磁写(235)である。236は炻器質に焼き締まった箱形湯呑茶碗で登窯IX期のもの。237～240・242～244は瀬戸製品の丸碗で灰釉が施される。江戸中期よりやや小振りのものがみられる。登窯VI～VII期になる。241は箱形の碗である。びんだらい(245)は、高台はなく平らな底部と垂直にたちあがる体部とからなる。底部外面のみ無釉。側面には鉄釉による型紙刷り絵がある。247は天目茶碗の底部で登窯III期のもの。

248～251は灯明皿(248)と灯明受皿である。249は瀬戸製品で登窯VII期のもの。灰釉が施されている。



第23図 江戸中期～後期の遺構出土遺物実測図① (1 : 4) [191・208・209: S K40、192・193: S E 9、194～196: S P71、197～199・214～219: S K27、200～203・221: S K35、204～207・220: S K37、210～212: S K42、213: S K47]



第24図 江戸中期～後期の遺構出土遺物実測図② (1 : 4) [222・234・237～239・254・256・257; S K27、223・230・231・243; S K34、224～226・233・240・242・244～246・255; S K37、227; Pit80、228・249; S P70、229・232・235・236・248・250・251; S K44、241; S K33、247; S K47、252・253・258; S P71]

250は鉄釉でそれより新しい。台付きの受け皿(251)は、信楽製品で19世紀代のものである。252と253は秉燭(ひょうそく)で252は灰釉で盃形のもの、253は鉄釉で19世紀前半のものである。

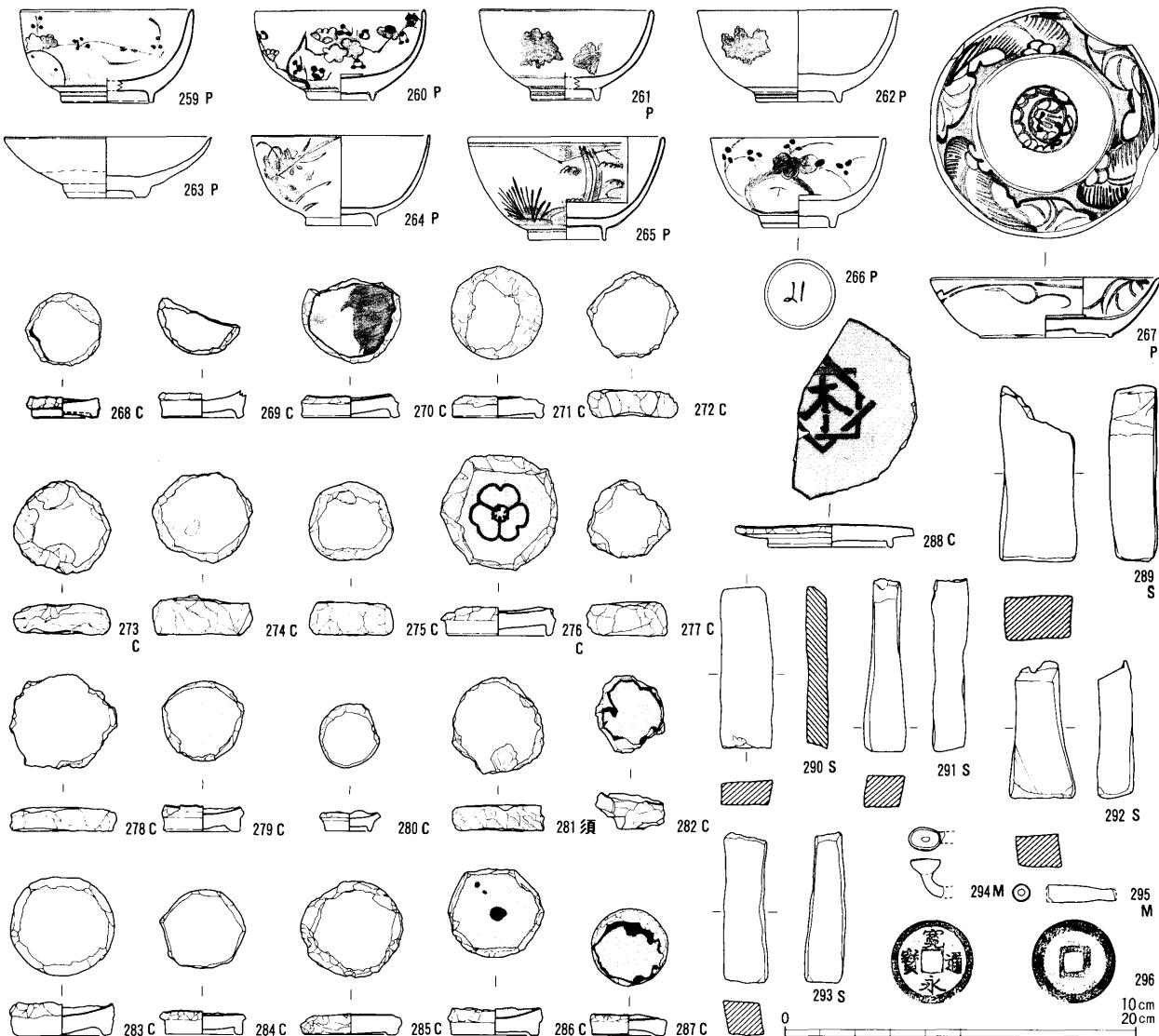
254は瀬戸製擂鉢で登窯Ⅱ期のもの。S K27出土である。255は香炉または火入で体部はロクロ目がよく残る。257は花瓶で灰釉と鉄釉のかけ分けである。258は織部写の鉢で瀬戸赤津窯の製品。登窯Ⅷ期のものである。

磁器には碗(259～262・264～266)と皿(263・267)がある。いずれも肥前製品である。碗の体部外面には呉須による絵が描かれる。259・266は梅花文、261・262は型紙刷りである。259・262・266は厚手で波佐見製品、他は有田製品であろう。いずれも18世紀後

葉から19世紀初のものである。263は銅緑釉の皿で見込み蛇の目釉はぎ。肥前で18世紀にみられる。267はコバルト釉の文様が描かれた皿で、高台幅が広く、19世紀のものであろう。

268～288は円形加工製品で、すべて陶器製である。丸碗などの高台部を利用したもの(268～271・276・279・280・282～288)と、甕などの体部を使ったもの(272～275・277・278・281)がある。S K28出土(271～278)が最も多く、ほかは1遺構から1～3点の出土である。

289～293は砥石、294・295は煙管の雁首と吸い口でともにS K27の出土。296の寛永通寶もS K27出土である。



第25図 江戸中期～後期の遺構出土遺物実測図③ (1 : 4、296は1 : 2) [259: S K33、260・293: S K34、261～263: S K37、264・284・290: S K42、265: S K47、266:Pit80、267: S K44、268～270・292・294～296: S K27、271～278: S K28、279: S K29、280: S K30、281: S K35、282・283: S K40、285・289: S K63、286: S K88、287:Pit89、288: S P70、291: S P71]

(12)江戸後期の遺構

礎石建物 S B 1は、桁行6間4尺5寸×梁行4間5寸、棟方向はN50°W。西の梁の一部と東の梁の一部には布基礎がみとめられる。西は全面、東は北半分がそうであったろう。北の桁と南の桁は柱位置のみに礎石を据えたようである。礎石はすべて自然石である。下に栗石を敷いたもの、礎石がなく栗石のみ残ったもの、抜き取り穴だけのもがある。

S B 2は桁行6間×梁行2間、棟方向N40°Eの細長い建物である。S B 1とはほぼ90°棟方向が違う。対になる建物である。基礎はおそらく4辺とも布基礎であろう。切石を使い、その多くには臍穴をあけるなど頑丈なつくりを思わせる。

S B 4は調査区の南端で検出された。検出されたのは1間×3間分である。一辺1m程の正方形の範囲に、北側の一列は人頭大の石を、南側のもう一列は栗石を敷きつめてある。この上に礎石がのるとすれば普通の家屋に比べて大きなものになる。おそらくは東と南にのびていたものが後世（幕末以後？）に破壊されたものであろう。

土坑 S K36は調査区の西端で検出された円形の土坑である。土坑の中央に近代の井戸（S E83）があるため完掘していないが、推定で直径2.5m、深さ0.6mである。

S K38はS B 1の中にある土坑で隅丸方形のプランをもつ。一辺1.6m、深さ0.5m。いわゆる南東隅ではないが、ほぼそれに近い位置にあり、S B 1に伴う土坑である。

S K39はほぼ楕円形のプランをもつ。長径1.6m、短径推定1.2m、深さ0.25m。S K52に接するが表面観察では切り合い関係は明確にできなかった。両土坑とも同じ時期の遺物が出土している。

S K41は長方形に近いプランをもつ。短辺0.5m×長辺1.3m、深さ0.2m。

S K43は方形の土坑が2つ重複したものである。切り合い関係が明確にできなかったことと、遺物の時期も同じであったことから、ほぼ同時期に相前後

して掘られたものであろう。S K43から南へは、S K49、S K61、S P71と遺構番号をつけなかった土坑1基を含め、計4基の土坑と1基の水槽がほぼ一直線に並ぶ。S P71がたたきの水槽を廃棄したものであることから、ほかの4基の土坑も同じようは水槽を設置してあった可能性がある。S K43とS K49・61は作り代えられたものであろう。両方とも切り合いか不明であるため作られた順序はわからない。

S K45は調査区の西端で検出された。方形と思われるが調査区外にのびるとS K55に切られるのとでプランと規模は不明。深さは0.3mである。付近は時期を異にした比較的大きな土坑が切り合うところである。住居敷地の端にあたり、廃棄のための土坑が次々に掘られたのである。

S K46は調査区の南端で検出された楕円形の土坑である。長径1.9m、短径1.45m、深さ0.6m。

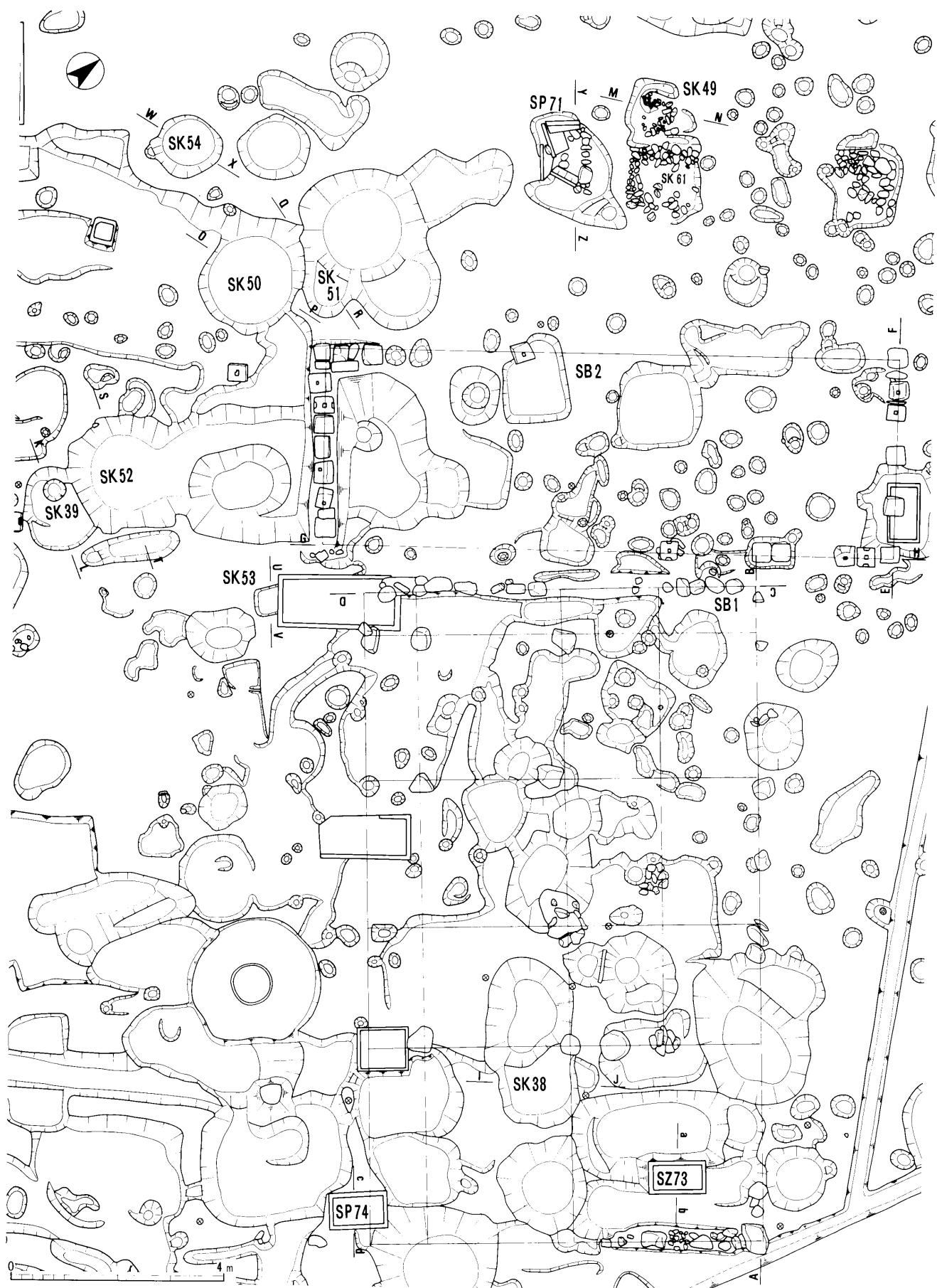
S K48は調査区の南西部で検出された長方形ないし楕円形の土坑である。短辺（幅）は1.2m、深さは0.3m。調査区外にのびるため溝の可能性もあるが断定できず一応土坑とした。

S K49はS K43の南にある正方形の土坑で、中からはこぶし大の石が検出された。一辺1.3m、深さ0.25m、である。石を敷いた上にはS P71にみられるようなタタキのマス（水槽）のようなものがあったと考えられる。S K61に接するが、S K61からは砥石が出土しているのみで時期を決められる遺物は出ていない。切り合いかから判断される前後関係はS K49→S K61である。上部にあった水槽（？）が作り代えられたものであろう。S K61は若干規模が大きくなり一辺1.5m、深さ0.25mになる。

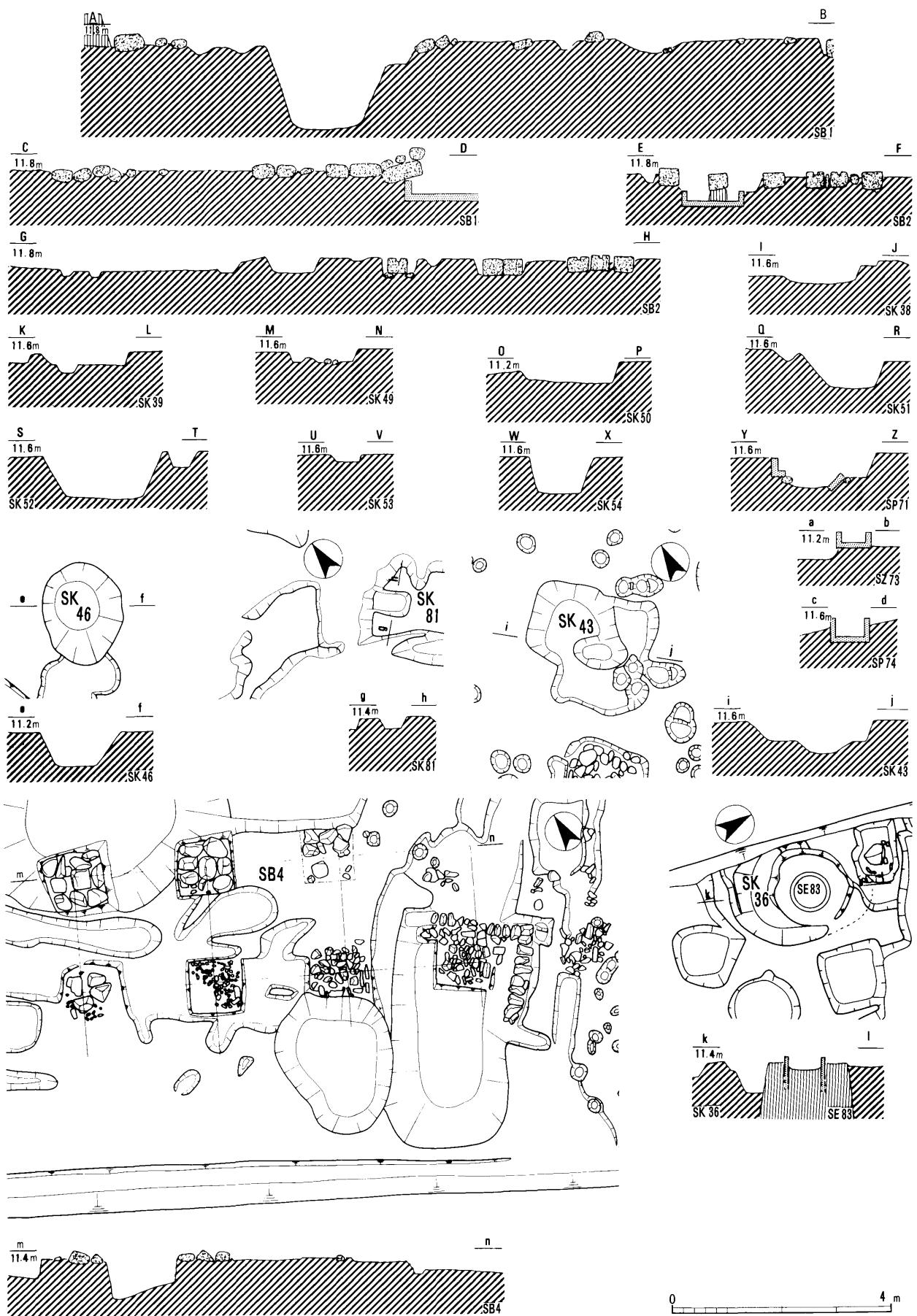
S K50はS B 2の西にある円形の土坑で、直径は2.1m、深さは0.4m。整った形をしているためなんらかの施設に伴うものとも考えられる。

S K51はS E11・S K47・S K50に接した楕円形の土坑である。短径は1.0m、長径は不明、深さは0.7m。切り合い関係ではS E11を切る。両隣の土坑との前後関係は出土遺物で判断した。

S K52はS K27とS K39に接した円形の土坑である。直径は2.2m、深さは0.9m。表面観察ではS K27を切る。S K39との切り合いは明確にできなかつたが、同じ時期の遺物が出土している。S B 3を建



第26図 江戸後期の遺構平面図① (1 : 100)



第27図 江戸後期の遺構平面図②・断面図 (1 : 100)

てるに前に不要なものを廃棄し整地したものであろう。

S K53は長方形のプランで短辺0.55m、深さ0.15m。江戸後期の遺物が出土しておりこの時期としたが、S B 1 の南西隅の基礎石の下にあるタタキ水槽のさらに下にもぐり込む形で検出されており、時期については遡る可能性がある。

S K54はS B 2 の西方で検出された円形の土坑である。直径1.2m、深さ0.7mで法面は垂直に近く叩き締められたようであった。隣に同じ形・規模の土坑があり、2つセットで例えば便槽のように、何らかの貯蔵施設として用いられたのではないだろうか。

S K81は調査区南部で検出された長方形の土坑である。西側を溝状の遺構（番号なし）に切られる。短辺0.45m、深さ0.2m。

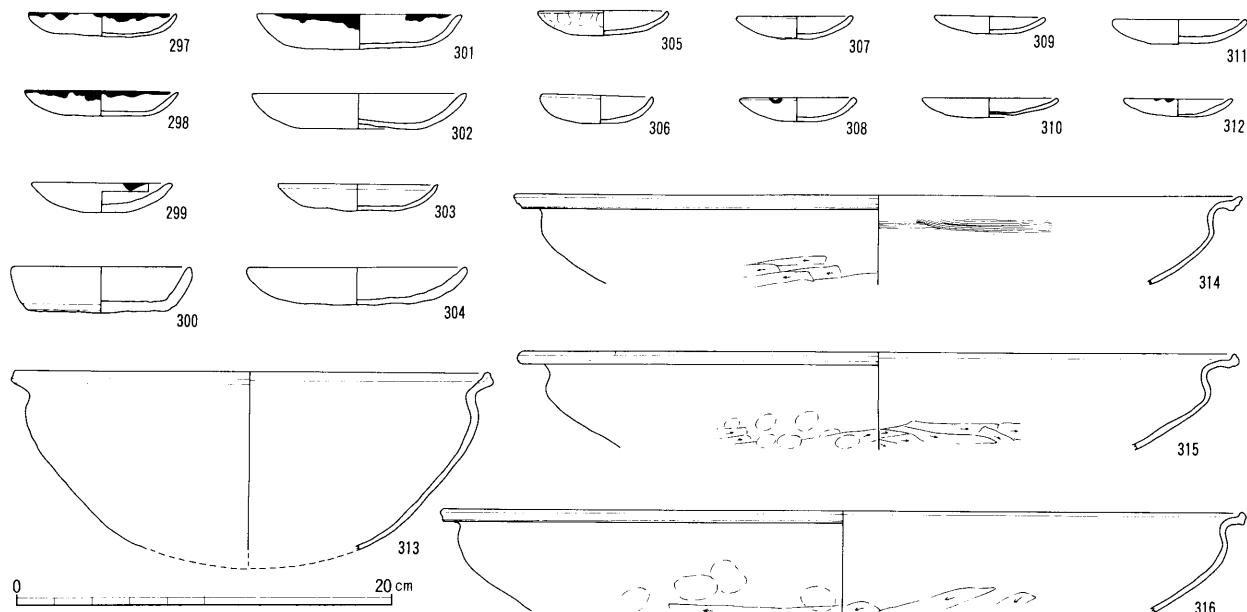
タタキ製マス S P71はS K49の南に位置するタタキの水槽である。すでに破壊されており正確な規模は不明だが、残ったタタキの断片から推測すると、0.7m×1.5m、深さ2.5m程度であったと思われる。下にはこぶし大の石がおかれていたが、敷きつめられたというわけではなく周辺部分にならべられている。

S Z73・S P74はともにS B 1 にともなうと考えられる。S Z73は内法0.45m（1尺5寸）×0.9m（3尺）、深さ0.21m（7寸）である。S B 1 の土間

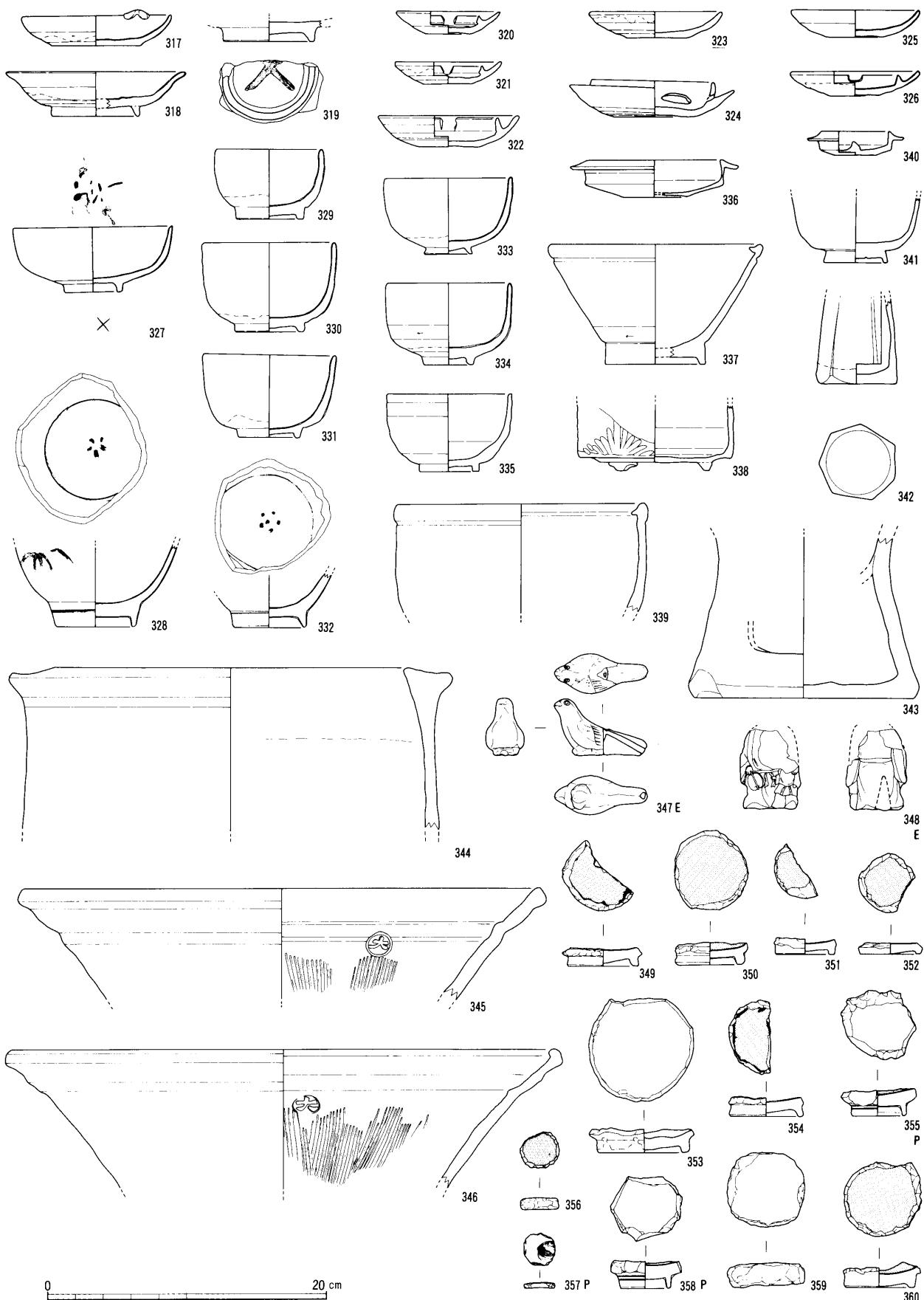
の位置にあり、地山上に直接置かれた状態である。低い位置にあり上流しとは考えられない。上部にはかまどが造られ、その下にあって焚きつけ（芝等）を入れておく施設と考えられる。S P74は内法0.51m（1尺7寸）×0.96m（3尺2寸）、深さ0.42m（1尺4寸）である。地山を掘りくぼめて設置されている。S B 1 の南東部分を牛小屋とすれば、それに伴うものであったのであろう。

(13)江戸後期の遺構出土遺物

土師器には皿(297～312)、鍋(313)、焙烙形(314～316)がある。皿は口径によって大型（11～12cm：301・302・304）、中型(10cm前後:300)、小型（8cm前後：297～299）、超小型（6cm～7cm：305～312）に分けられる。中期までに比べて超小型の数が増加している。形は、300を除けば、底部から体部へゆるやかに湾曲する。超小型は底部の周辺をわずかに持ち上げただけのものがほとんどである。口縁にすが付着したものがあり、灯明皿に使用された。300は厚手でタイプの異なるものである。153に類似する。鍋は半球状の体部に外反する口縁をもつ。口縁端部は摘まみ上げられた後内側に折り曲げられる。口縁端部については焙烙形も同様である。調整は、体部下半がヘラケズリ、体部上半と口縁がナデ、314内面の一部にハケがみられる。



第28図 江戸後期の遺構出土遺物実測図① (1 : 4) [297～301・314～316: S K38、302・303: S K45、304: S K46、305: S K49、306～308: S K50、309: S K52、310・311: S K53、312: S Z73、313: S B 1]



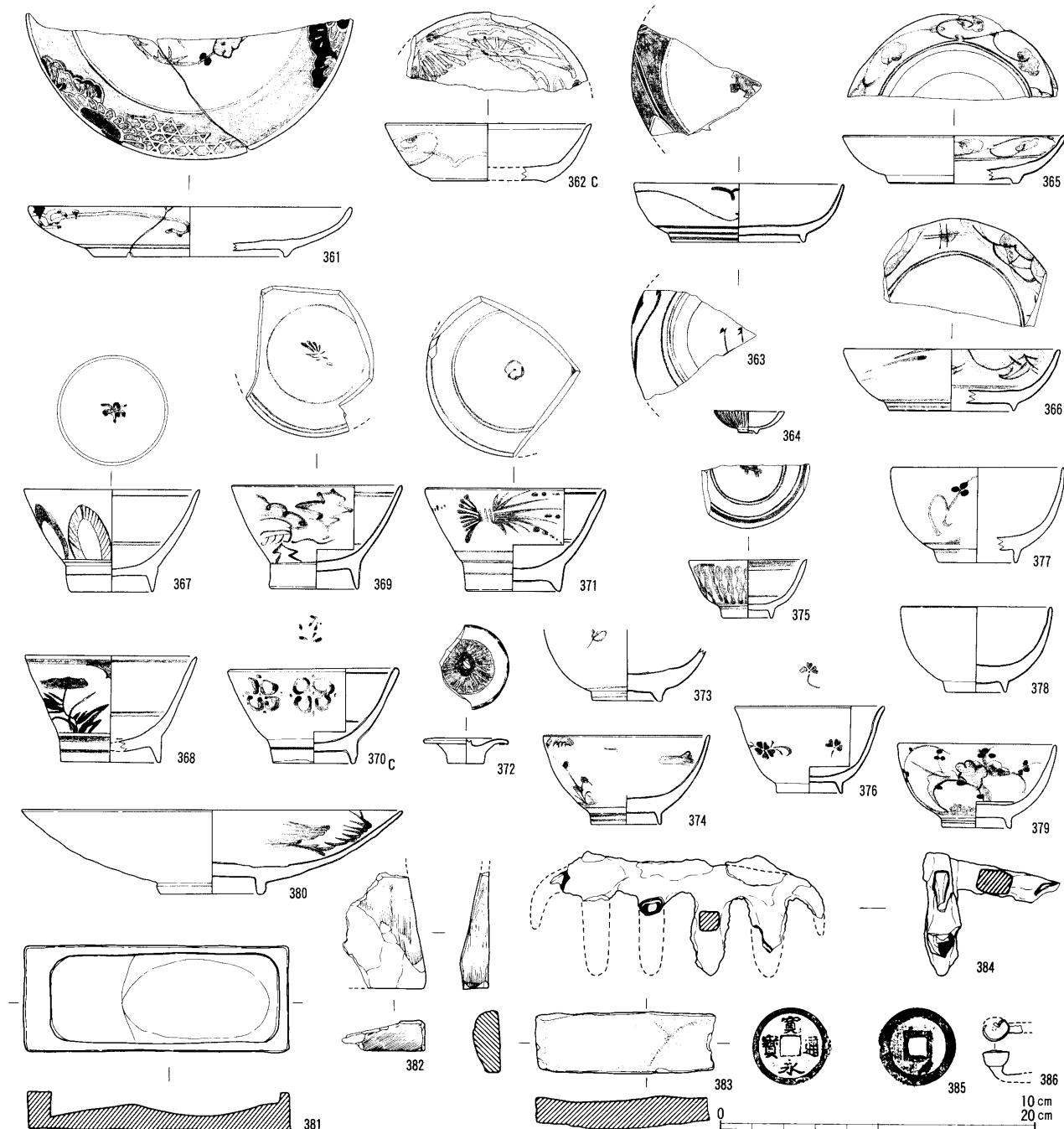
第29図 江戸後期の遺構出土遺物実測図② (1 : 4) [317・318・329～331: S K38、319～322・335～339・341・342: S K45、323・343・344: S K48、324: S K51、325: S K52、326: S K54、327・349～352: S B 1、328: S P74、332・340・356: S K73、333: S K39、334: S K41、345・346・357～360: S B 4、347: S K43、348: S K50、353～355: S B 2]

陶器には、皿(317～319)、灯明皿・灯明受皿(320～326)、碗(327～335・337)、土瓶の蓋(336・340)香炉(338)、甕(339・344)、擂鉢(345・346)などがあり、器種豊富である。

皿のうち、317にはつまみ状のものが口縁部に付く。318は輪禿げ皿、319には内面に重ね焼の痕がみられる。灯明皿(323・325)はともに鉄釉である。灯明受皿は口径によって大中小に分けられそうである。324には焼成前に油の通り道として3カ所穿孔され

ている。

327はやや偏平な碗で、見込みに鉄釉による型紙刷り絵に一部呉須が入る、登窯V期のもの。328・332・370は広東碗で内外面に呉須による圈線や文が描かれる。登窯IX期のもの。丸碗(329～331・333～335)のうち329～331は登窯VI期、高台がだいに小さくなる333～335はVII期のものである。337は瀬戸製品で灰釉系のオリーブ色の釉が内面全体と外面高台やや上までかかる。高台周辺は広東碗と同じ形



第30図 江戸後期の遺構出土遺物実測図③ (1 : 4、385は1 : 2) [361・362・364・371・375・377・384: S K45、363・368・372・381: S K48、365・366・370・376: S K54、367・373・383・385: S B 1、369: S K36、374: S K46、378・379: S K39、380: S K81、382: S K43、386: S K50]

だが、口縁外面に凹線が巡り端部が内側に折り曲げられる。341は信楽製品で京焼風陶器である。

土瓶の蓋(336)は薄手のつくりで信楽の製品であろう。340は小振りのもので上面に鉄釉がかかる。

香炉(338)は底部の内寄りに脚が3カ所付く。底部外面以外の全体に灰釉がかけられる。文は彫り込まれている。342は断面が外側7角形・内側円形の筒である。墓用の花筒であろうか。外面に鉄釉がかかる。339は鉄釉捏鉢であろう。344は無釉の焼締め陶甕である。345・346は瀬戸製擂鉢で大の文が入る18世紀末～19世紀前葉のもの。2点ともSB4床面出土である。

347・348は土人形で、鳩笛(347)と頭部を欠くが軍配を持った布袋(348)である。

349～360は円形加工製品で、355・357・358が磁器、他は陶器である。高台部を使ったもの(349～355・358・360)の内、351と352は天目茶碗の高台である。352は大窯I期の製品。磁器はいずれも肥前産で、358は波佐見窯ものもある。出土位置は349～352がSB1床面、353～355がSB2床面、356がSP73、357～360がSB4床面である。

磁器には、皿(361～366)、碗(367～369・371・373～379)のほか、蓋(372)、鉢(380)がある。肥前産を中心とする瀬戸美濃製品が混じる。いずれも染め付けあるいはコバルト釉による文様が描かれる。361は焼き接ぎされている。365の文様は梅花であろうか。見込み蛇の目釉はぎされる。364は紅皿でやや小ぶりのものである。広東碗(367～369・371)は瀬戸美濃製で瀬戸の陶器製(370)と同時期である。373・374・377～379は波佐見窯のいわゆるくらわんか手の碗である。登窯VII期に併行する時期のものである。碗には端反りが1点(376)ある。380は瀬戸製鉢であろう。見込みはドーナツ状に釉はぎされる。

石製品には硯(381)と砥石(382・383)がある。硯はよく使い込まれている。382はきめの細かい仕上げ砥、383は砂岩製の粗砥である。

384は鉄製の又ぐわで、刃と柄の断面は四角である。ほかに金属製品では寛永通寶(385)と煙管の雁首(386)がある。

(14)幕末の遺構

礎石建物1棟(SB3)、溝1条(SD18)、井戸1基(SE10)、土坑4基(SK55～57・59)、タタキ製マス1基(SP75)がこの時期の遺構である。

礎石建物 SB3はSB2の南に隣接するように建てられており、棟方向と同じくする(N40°E)南北棟である。礎石は1辺0.3mの立方体を偏平にした(高さ0.2m)切石で、ほとんどに臍穴が穿ってある。それなりに精巧な形で柱をしっかり固定したことがうかがえるが、SB2のように布基礎ではない。規模は梁行7.2m(4間)×桁行5.55m(3間5寸)である。

溝 SD18は、調査区南東部で検出された。幅1.4～1.8mと広く、深さは0.3mである。一部しか検出されていないため、性格は不明だが、幕末の遺物が多く出土した。

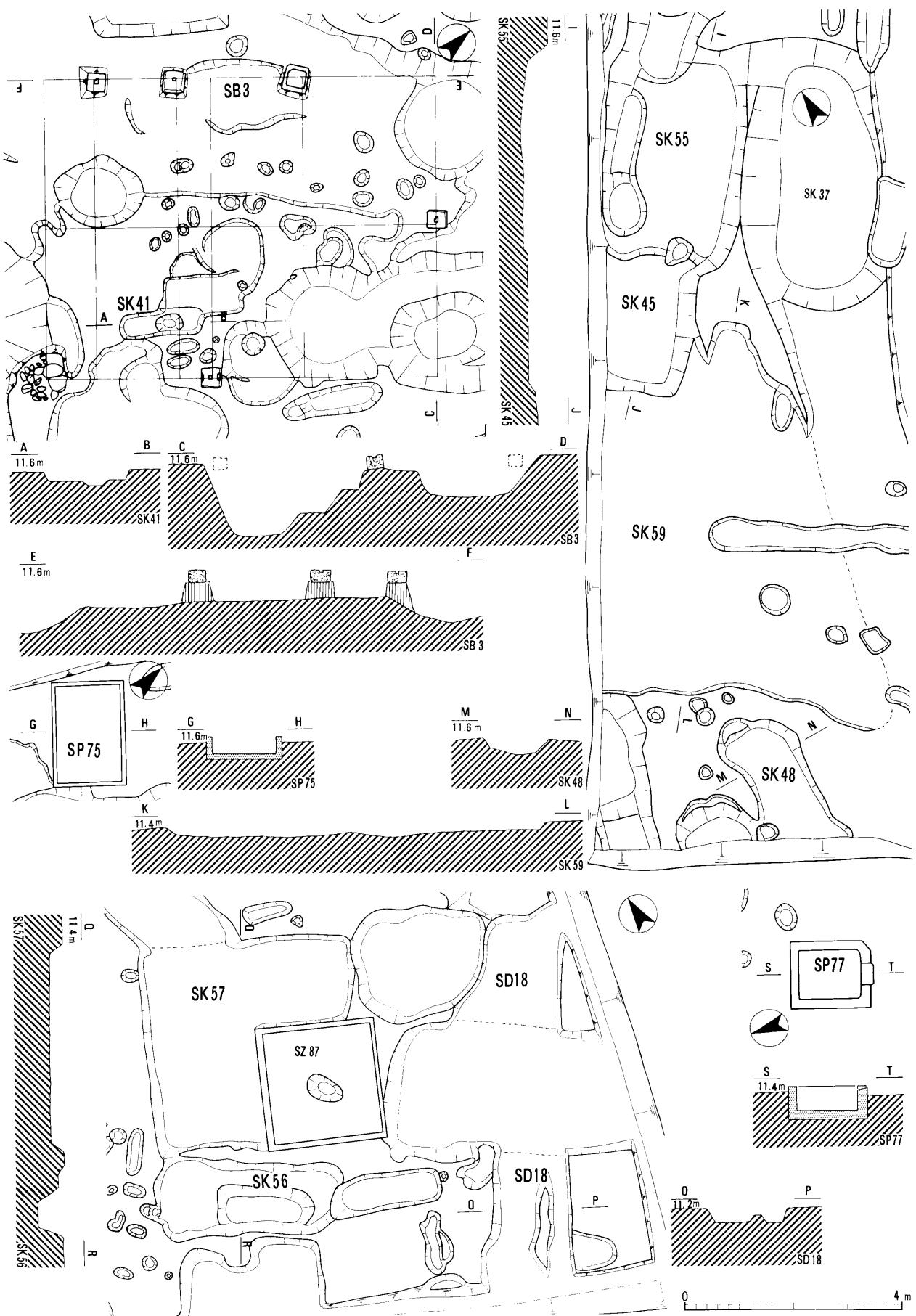
井戸 SE10は唯一石組みの井戸である。直径(石組みの内径)0.5m、深さ3.3m。地山を1.3m抉って水溜めにし、その上に石を2mの高さに組み上げている。石の中には五輪塔の地輪もみられる。土器、陶磁器のほか、漆椀なども出土した。伊勢別街道に面した家屋にともなう井戸であったろう。

土坑 SK55は調査区の西端で検出された隅丸長方形の土坑である。長辺3.9m×短辺2.7m、深さ0.5mと大きい。SK37・45と同様、廃棄物を埋めるために順次掘られたものであろう。

SK56は調査区の南東部で検出された。ほぼ長方形のプランであり、長辺3.6m×短辺1.3m。2段に掘られており、深さは0.1～0.5m。

SK57はSK56のすぐ北に位置する正方形プランの土坑である。1辺3.9m、深さ0.3m。整った形をしており、底も平らであることから何らかの施設を想定できる。ただ、近現代のタタキ製マス(SZ87)はSK57の一部を埋めて作られており、関連はないと考えられる。円形加工製品が多数出土したことは特徴的である。

SK59は調査区の南西部で検出された。形が不定形で、南北7m、東西4.5m以上、深さ0.1～0.15mと大きく浅いことから、低い部分を埋めた整地層であろうと考えられる。



第31図 江戸後期・幕末・近代の遺構平面図・断面図 (1 : 100)

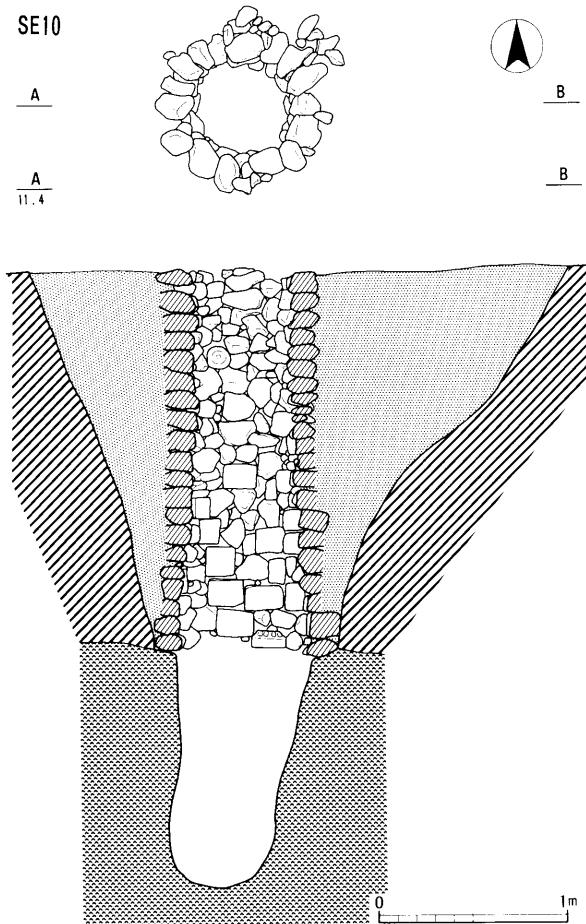
タタキ製マス S P 75は、内法2.25m×2.85m、深さ0.3mと比較的大きい。おそらく水槽であろう。地山を掘りくぼめ、直接土の上に作られている。S P 74もそうであるが、掘形は広くなくほとんどタタキの外刃に接している。

(15)幕末の遺構出土遺物

387・388は山茶椀で藤澤編年の5型式の時期のものである。S B 3の出土だが、整地の際に混入したものであろう。

土師器皿(389～395)はやはり大型(口径12cm:389)・中型(口径10cm前後:390・391)・小型(口径8cm前後:395)・超小型(口径7cm以下:392～394)がある。超小型の皿は非常に浅い。395には口縁にすすが付着する。400は茶釜で非常に精良な明赤褐色の胎土である。球状の体部の最も張ったところに鍔が付きそのまま上に釣輪部が付く。外面はハケによる調整がなされる。

396～399は瓦質の焙烙である。素地は灰白色、表面が銀灰色に焼される。口径36cm～39cm、深さは底



第32図 S E10実測図 (1 : 40)

部まで復元できる個体がなく推定だが8cm～8.5cmを測る。ゆるやかな弧を描く体部の上方に厚く短い鍔が付く。鍔の断面は角張り、端部は1本の稜で2つの面に分けられる。口縁も短いが、端部は丸くおさまる。鍔のすぐ上に穿孔される。ユビオサエ後ナデによる調整がなされる。体部外面にはすすが付着している。401も瓦質の製品である。火鉢とも考えられるが、全体の形がわからず用途はわからない。表面は黒色に焼される。396～399に比べ軟質である。

402～413は漆器で椀(402・404～413)と杯(403)である。すべてS E10の出土。体部外面に赤漆で扇(402)や銀(金?)で家紋(412・413)を描いたものもある。高台内には文字(402・403・408)が書かれる。高台は高くしっかりしたのもと、小さく低いものがある。全体の形は腰部が張った箱型に近いものと、底部からゆるやかに体部がたちあがるものがある。器壁も厚いものと薄いものがある。

414・415は木製の紡錘車、416は用途不明の板材である。ともにS E10の出土。

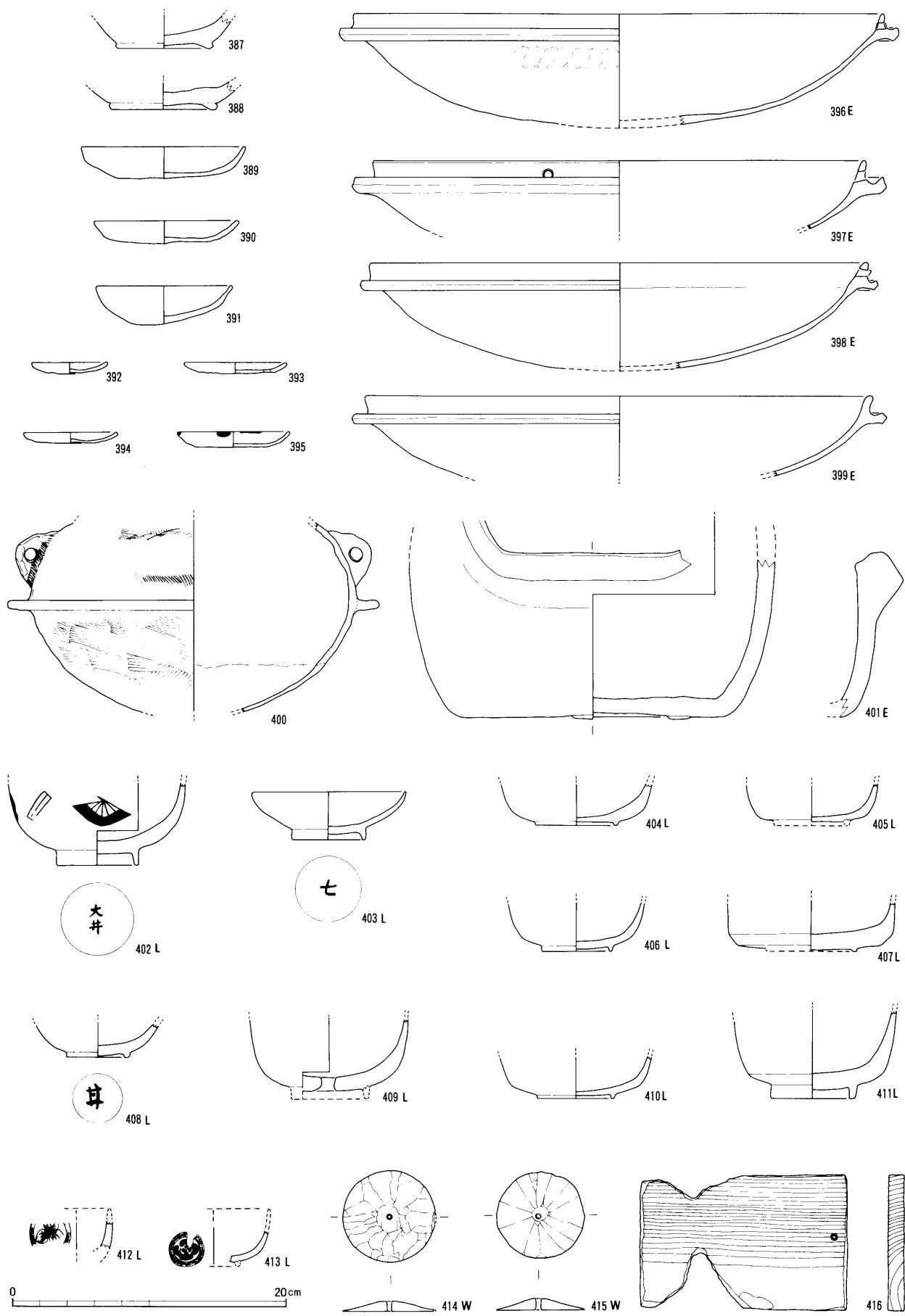
陶器には、皿、灯明皿、灯明受皿、碗、鉢、土瓶などがある。

417・418は高台を有する皿で、417の口縁端部は端反り状となる。418は丸皿の系統である。419は灯明皿で鉄釉がかかる。420～424は灯明受皿、420～422は鉄釉・423・424は灰釉である。

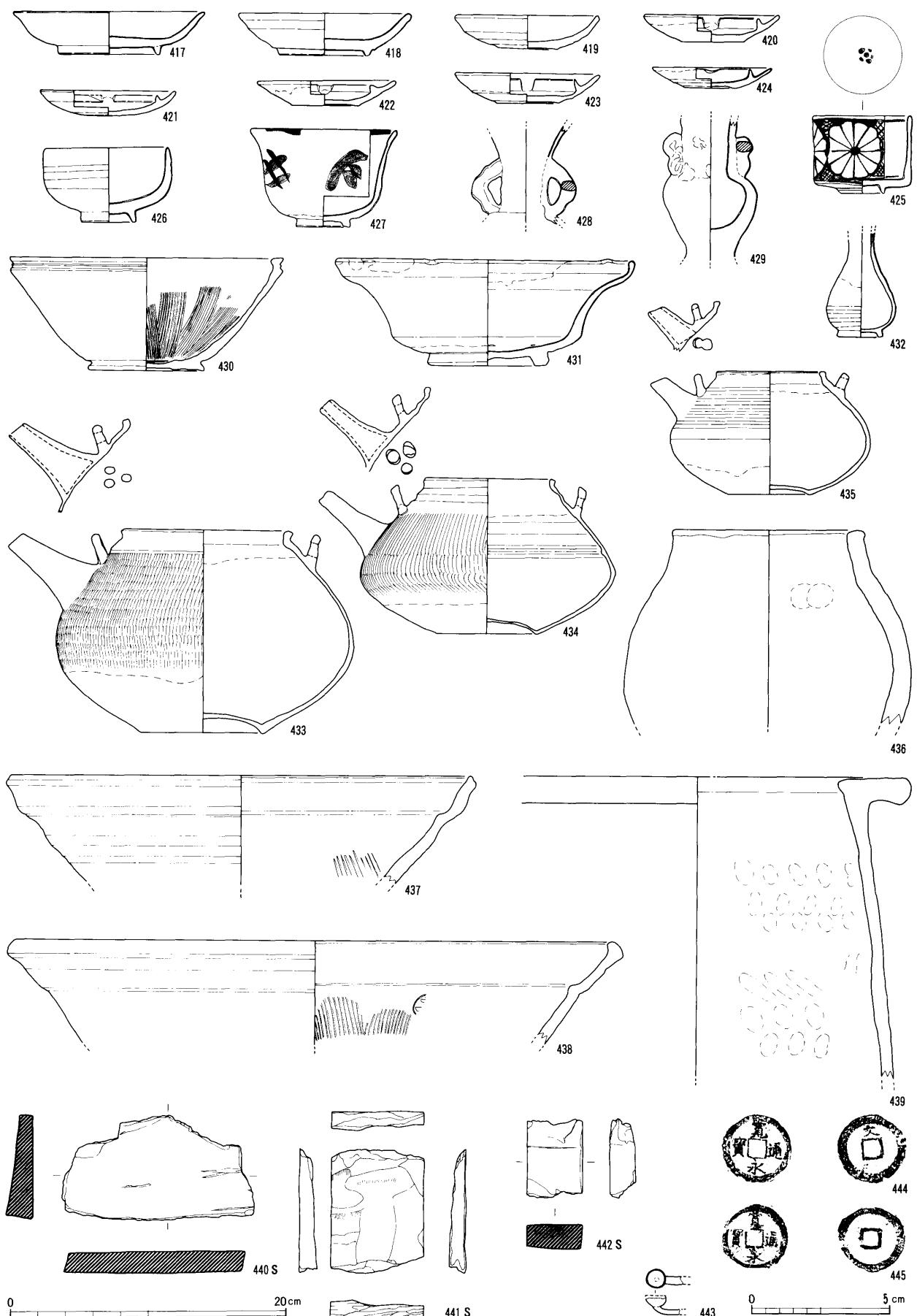
425～427は碗である。425は箱形湯呑茶碗で、体部にはコバルト釉による菊の文が描かれる。炻器質によく焼締まったもので19世紀末、美濃の製品である。426は瀬戸産の丸碗で、登窯IX期のもの。灰釉がかかる。427は信楽産で幕末のもの。鉄釉で文字状の文が描かれる。

428・429は花瓶で、ともに鉄釉がかかる。429は登窯V期のもの。

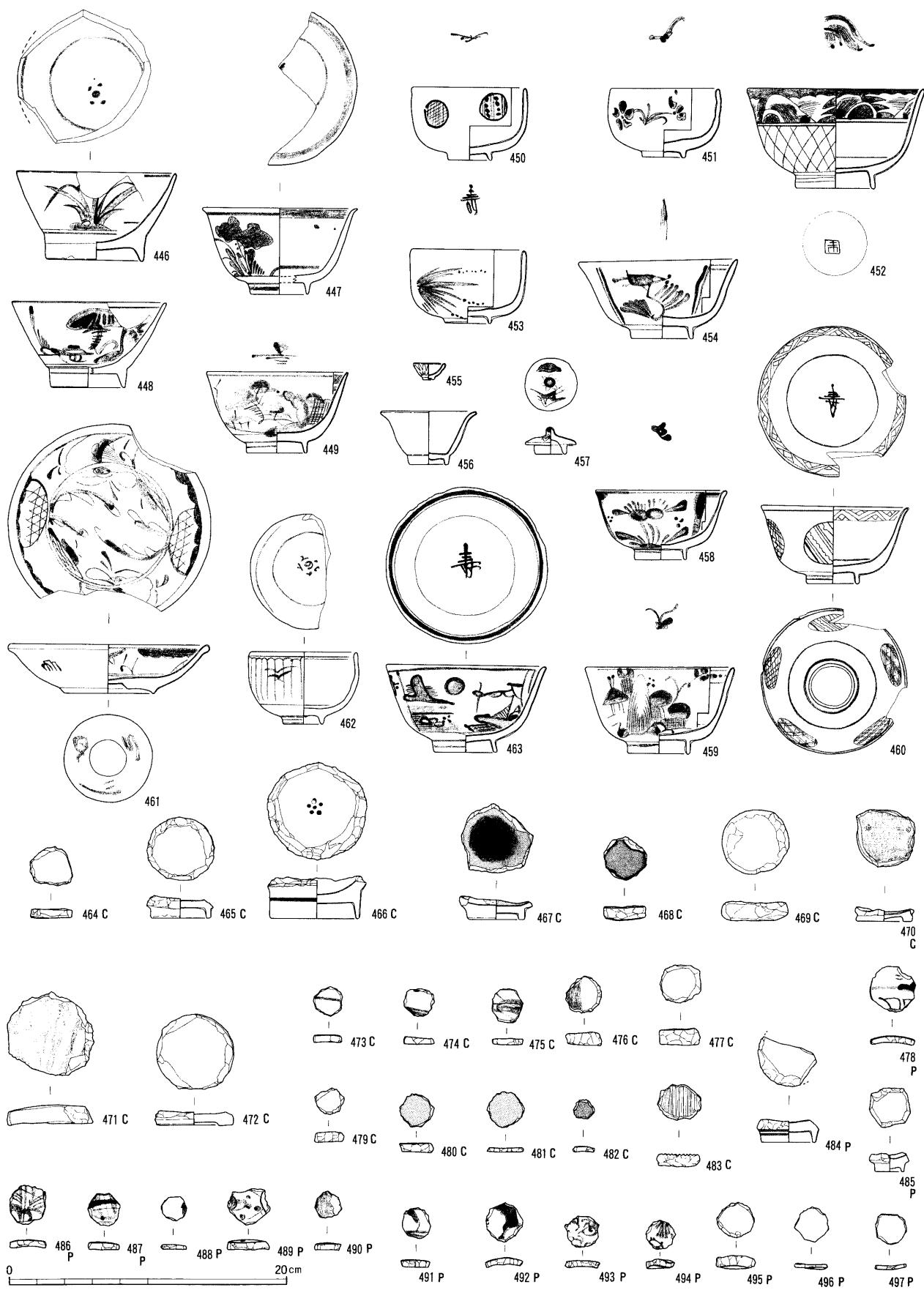
擂鉢(430・437・438)は瀬戸産で430・438は登窯IX期のもの。437はV～VI期(18世紀中期)の混入品である。431の鉢は信楽系19世紀のもので鉄釉系の黄土色の釉がかかる。432～435も信楽の製品で432は御神酒徳利、433～435は土瓶である。やはり19世紀のもの。433・434の体部外面にはトビガンナによる装飾がある。436は無釉の焼締め陶の壺である。



第33図 幕末の遺構出土遺物実測図① (1 : 4) [387~391・396~400・401: S B 3、392~394・402~416: S E 10、395・397: S K 55、398: S K 57、399: S K 59]



第34図 幕末の遺構出土遺物実測図② (1 : 4、444・445は1 : 2) [417・440: S P69、418・436・441: S K59、419～423・437: S K55、424・432・444・445: S K57、425～429・438・439: S E10、430・431・433～435: S D18、442・443: S B3]



第35図 幕末の遺構出土遺物実測図③ (1 : 4) [446~448: S K55、449: S P75、450~454・468~470: S D18、455~456・464~467: S E10、457~460・471~497: S K57、461: S P69、462: S K59、463: S K56]

産地は不明。439はやはり焼締め陶の口縁部である。大甕か、あるいは、S E10から出土しているので井戸側の可能性もある。口縁端部の断面が逆L字状になり、上面に面をなす19世紀のもの。常滑の赤ものである。

440・442は砥石で、442はキメが細かく仕上げ砥である。441は硯と思われる。金属製品には、煙管の雁首と銭（寛永通寶）2点がある。

磁器には皿・碗・蓋等がある。446・448は広東碗、447・449・452・454・458～460・463は端反碗、450・451・453・462は丸碗である。体部外面や見込みにコバルト釉による絵・文が描かれる。452は九州産で19世紀中葉、ほかは瀬戸産と思われる。455は紅皿のミニチュアで、たとえば雛飾りなどの玩具であろう。456は端反りの小杯で九州産。457は水注の蓋である。461はコバルト釉で絵の描かれた皿で明治にはいってからのもの。高台部に「もり川」と墨書きされている。森川姓が近くの一身田付近に多いこと、当地が窪田宿の一角にあたることを考えると興味深い。

464～497は円形加工製品である。最も大きい466は瀬戸製陶器広東碗の高台部を使ったものだが、全体としては直径2cm程度の小型品が多くなる。464

～477・479～483が陶器で、472・481・482が信楽産。478・484～497が磁器を使ったもの。出土遺構は464～467がS E10、468～470がS D18、471～497がS K57からである。S K57から27個もまとめて出土しているのが注目される。

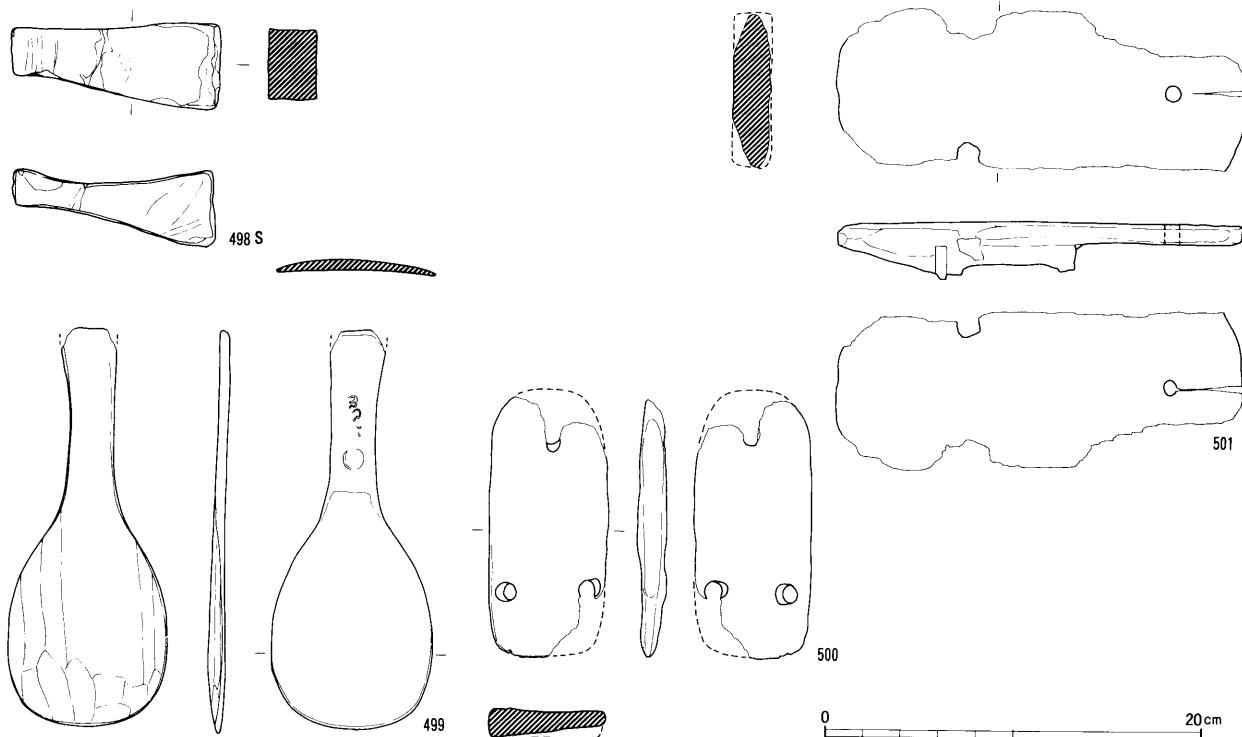
(16) 近代の遺構・時期不明の遺構

近代と考えられる遺構で番号を付したものは、井戸5基（S E83～86・90）、タタキ製のマス2基（S P77・S Z87）である。

井戸 5基のうち、S E83～86は円形のタタキ製井戸側をもつ。S E83・84は表土除去後に検出されたが、S E85・86は地表に井戸側が立ち上がり、コンクリート製のふたがしてあった。

S E90は陶器の井戸側をもつ。甕の転用ではなく井戸側専用に焼かれたものであった。常滑焼（真焼け）であろう。S K63・S P69に伴うと考え、井戸側のみ近代に作り代えられたとすると、井戸（S E90）、洗い場（S P69）、上屋に伴う遺構（S K63）がセットになった例とすることができる。

タタキ製マス S P77は、地山を掘くぼめて設置してある、内法0.9m×1.15m、深さ0.45mのがっしりとした水槽である。タタキの厚さが150mmとほかのタタキ製マスより厚い。側の一部がやや幅広となり



第36図 近代の遺構・時期不明の遺構出土遺物実測図（1：4）〔498: S K61、499: S K64、500・501: S P77〕

傾斜がつけてある。形状と大小の下駄が出土していることから便槽と考えられる。なお、便槽と考えられるタタキ製マスは調査区北東部にも2~3基みられる。伊勢別街道沿いの家屋に伴うものであろう。

S Z 87は正方形のもので、S K 57の埋土上に直接置かれていた。1辺は2.0m、深さ0.15mの大きさだが、厚さは薄い。「蚕の餌の桑の葉をかこっておくところだ」という地元の人の話があり、S Z（その他の遺構）とした。上屋などの施設は確認できなかった。

時期不明の遺構としては土坑2基（SK 61・64）がある。このうちSK 61はSK 49とのかかわりが考えられる。SK 64は、SK 62のすぐ西に位置する土坑である。石製品が出土しているが、時期のわかる出土遺物はない。時代の特定できるほかの遺構との切り合い関係もない。プランは長方形で、0.7m×0.9m、深さ0.2m。

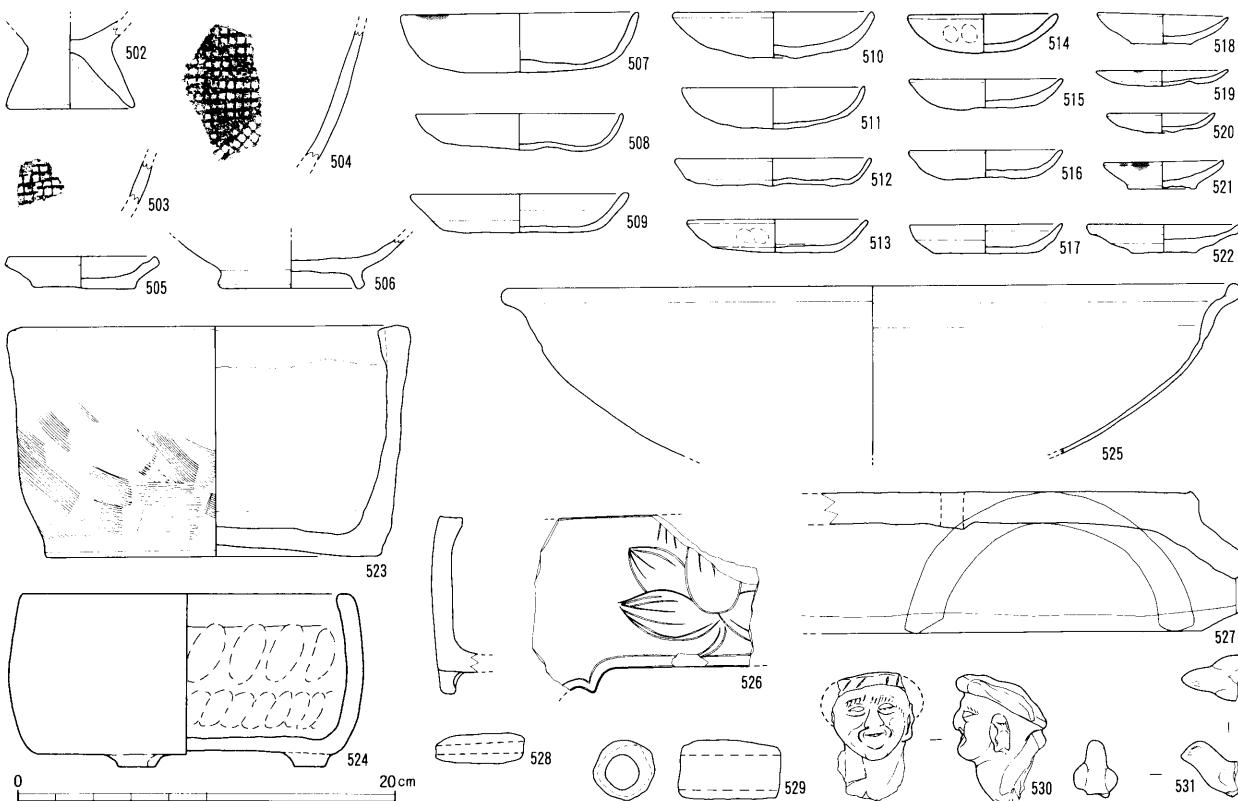
(17)近代の遺構・時期不明の遺構出土遺物

498は砥石でSK 61出土。途中で折れているが、よく使い込まれている。六大B遺跡の当地区から砥石は多数出土しており498も江戸時代（以降）のものと思われるが時期決定のできる伴出遺物はなかっ

た。しゃもじ(499)はSK 64出土。やはり時期決定のできる伴出遺物はなかった。素木の平らなもので飯盛りに使われたものである。500・501は下駄である。出土地のSP 77を便槽と考えれば便所で使われたものであろう。500は子ども用、501は大人用で双方とも片方ずつしか出土していない。

(18)包含層出土の遺物

502は台付甕の底部、503・504は韓式系土器片である。当地区南の六大B遺跡B~I地区や六大A遺跡では、弥生・古墳時代の遺構・遺物が検出されており、当地区でも弥生・古墳時代の遺構が存在していた可能性はある。それが室町時代中期以降街道沿いになったために新しく家屋等が造られ破壊されたものであろう。505・506は山皿・山茶碗である。平安末～鎌倉時代の遺構も街道をへだてた北側の六大A遺跡A地区で検出されているが、当地区で検出された遺構は井戸を中心として数は少ない。507~522は土師器皿である。口径によって大型・中型・小型・超小型に分けられる。超小型のうち521・522はロクロ成形である。おそらく江戸時代末のものであろう。表面が磨耗しているが518もロクロ成形の可能性がある。523は土師質の鉢である。平な底部と垂直に



第37図 包含層出土遺物実測図① (1 : 4)

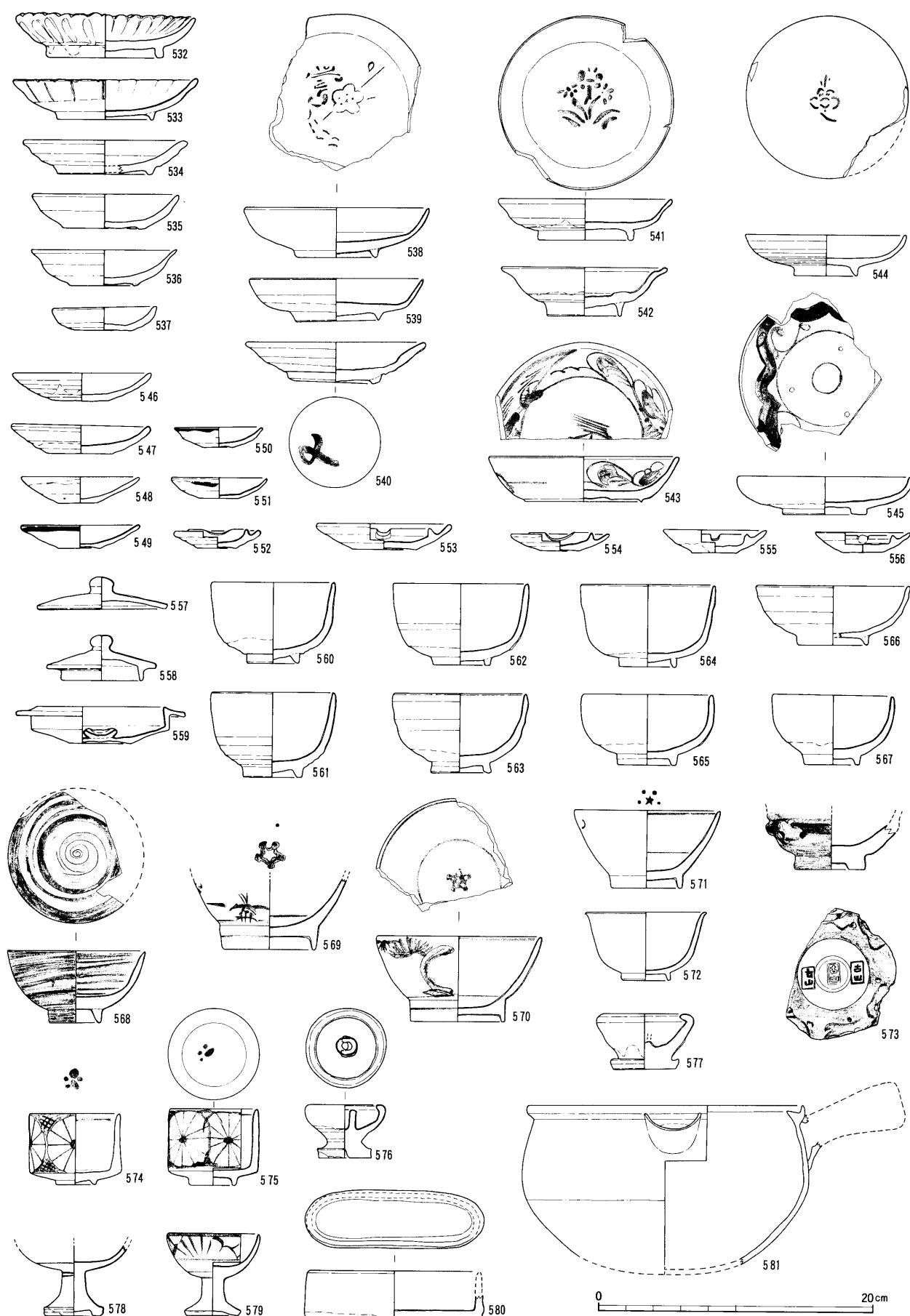
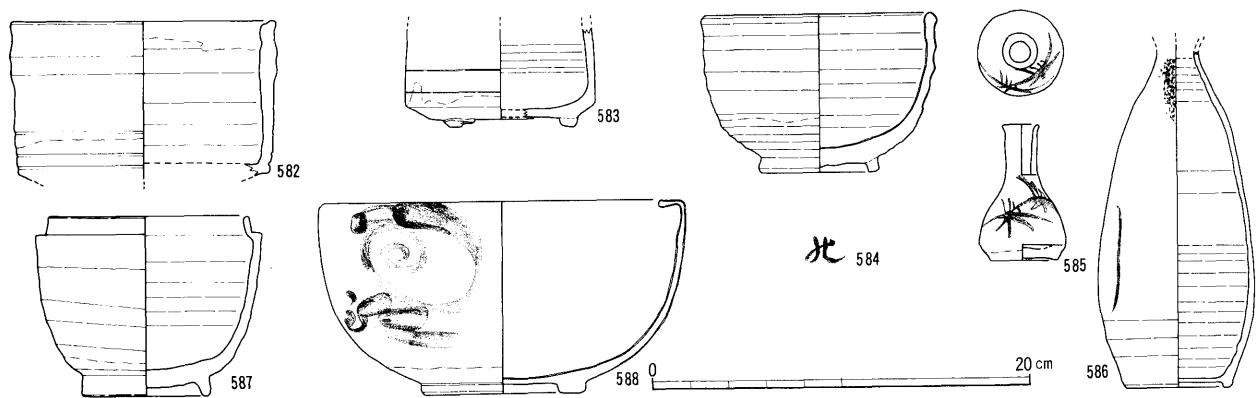


図38図 包含層出土遺物実測図② (1 : 4)



第39図 包含層出土遺物実測図③ (1 : 4)



第40図 包含層出土遺物実測図④ (1 : 4)

たちあがる体部とからなる。口縁部は内側に折り曲げられる。外面下半はハケ、ほかはナデによる調整がなされる。524は瓦質の火鉢で、平らな底部とやや内湾する体部とからなる。3カ所に脚が付く。525は土師器鍋である。ゆるやかに湾曲する体部、わずかに屈曲し肥厚する頸部、短い口縁、及び折り曲げられた口縁端部とからなる。526は軟質の焼物で瓦質の範疇に入るものであろう。側面に線刻によって蓮の花が描かれる。全体の形がわからないが仏具の一種であろう。527は丸瓦である。上面に1カ所釘穴があけられている。当地区からの瓦の出土は少なく、図化したものはこの1点のみである。528は土師質、529は焼締め陶の土錘である。530・531は土人形。530は大黒であろうか。531鳥（鳩か）だが、前半分であり笛かどうか不明。

陶器は皿・碗など多種多様である。菊皿には、大窯Vと思われるもの(532)と登窯III期のもの(533)がある。536は端反り皿で鉄釉が施される。538・541・544は刷絵皿である。登窯VI期のもの。内面に呉須による型紙刷り絵が描かれる。540・542は重ね焼のために内面をリング状に釉剥ぎした輪禿げ皿。539の皿の高台は重ね焼のために断面逆三角形を呈する。543は炻器質に焼き締まった皿でコバルト釉で絵が描かれる。高台幅が広くその部分のみ釉がかけられていない。545は信楽産と思われるもので、鉄釉による文が描かれる。546～551は灯明皿、552～556は灯明受皿である。鉄釉のもの(546・553)と灰釉のものとがある。大きさも大・小に分けられそうである。548は信楽産と思われる。蓋には返りのないもの(557)、返りのあるもの(558)、それに信楽産土瓶の蓋(559)がある。560～565・567は瀬戸産丸碗で18世紀後半から19世紀のもの。568は刷毛目装飾の碗で、九州産と思われる。長崎の現川焼に代表されるが18世紀に流行したものである。広東碗(569～571)は登窯VII期(569)、IX期(570)X期(571)のものである。572は信楽産の端反小碗で19世紀のもの。573は産地、時期とも不明だが幅のある高台の畳付部に2カ所、高台内に1カ所「古山」の銘がおされる。体部下半は凸凹である。箱型湯呑茶碗(574・575)は美濃産とおもわれる。素地は炻器質に焼き締まる。576・577は秉燭（ひょうそく）、578・579は仏

飯具である。びんだらい(580)はやや小ぶりである。行平鍋(581)は信楽産であろう。体部外面にはすすが付着する。582は窯道具とすればサヤであるが、香炉として使われたのであろうか。登窯II期のものである。筒型香炉(583)は登窯III期である。584・587はロクロ目の明瞭に残る大形の碗で587には蓋が付く。585は御神酒徳利で瀬戸産。586の徳利は美濃産と思われ、体部にへこみのある「ペコカン」である。588は信楽産と思われる鉢で口縁部が内側に90°折れ曲がる。体部には鉄釉による文が描かれる。

磁器には皿・碗・蓋・小瓶・花瓶がある。皿のうち、590は銅板刷り絵のある大正期のものである。591は高台幅が広く、コバルト釉で文の描かれる幕末から明治初のもので、補修の痕がみられる。592～595の碗と596の小瓶は肥前産である。いずれも18世紀代のもの。597・598は広東碗の蓋である。603の蓋には返りと上面の中心からややすれたところにつまみが付く。611は端反り碗の蓋である。上面にコバルト釉で文が描かれる。599は小ぶりの紅皿である。600と602は小碗だが、602は端反りである。601は花瓶で口縁部を欠く。全面に青磁釉が施される。605・606は広東碗でどちらも瀬戸産である。端反り碗(607～614)は、609が肥前産。ずっしりとして安定感がある。他は瀬戸産で、613は色絵、他はコバルト釉による文が描かれる。

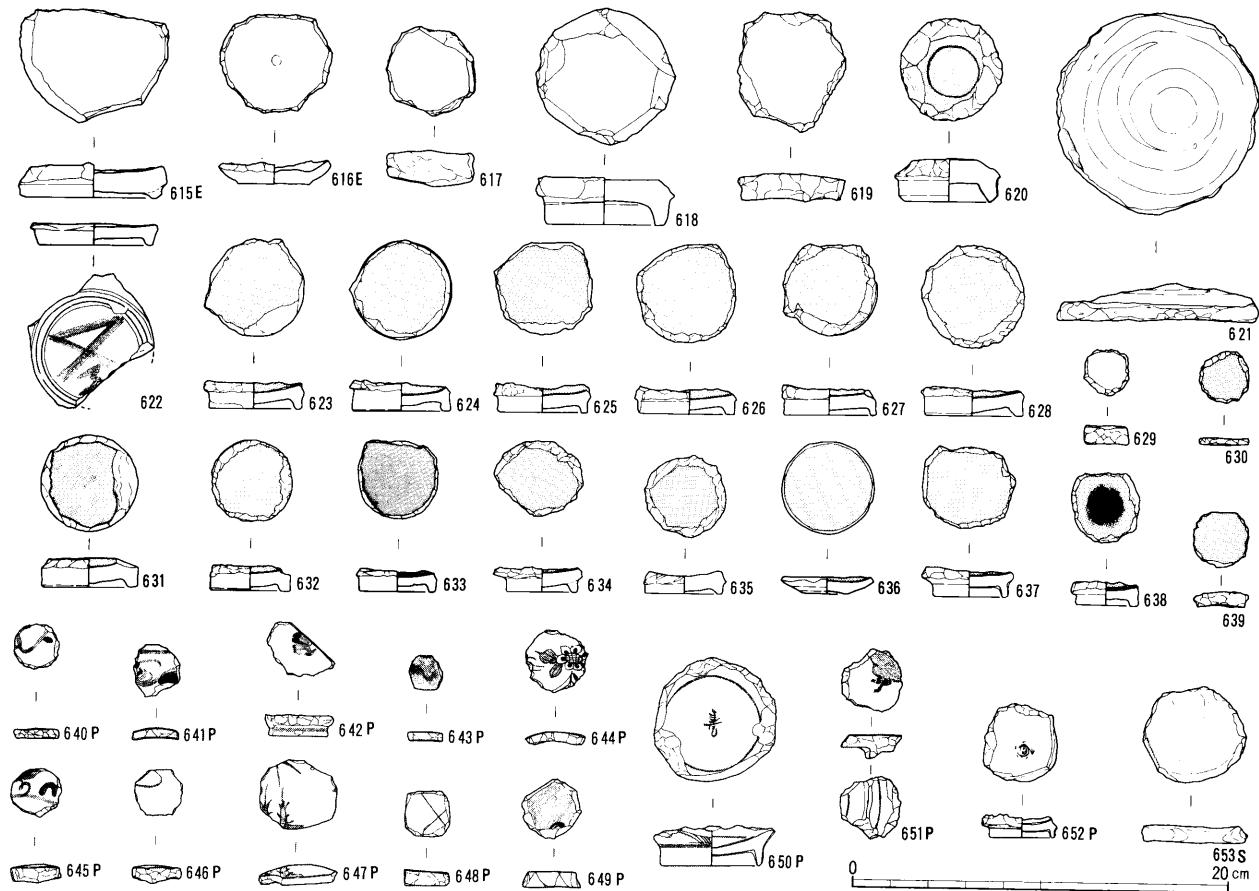
円形加工製品は、包含層からも多量に出土している。615・616は山茶椀・山皿を使ったもの。617と619は常滑産の無釉焼き締め陶。618・620～639は陶器製で、高台を利用したものが圧倒的に多い。最も大きい621も底部を使ったものである。636は鉄釉の灯明皿を使ったもので周辺部はけずられきれいに面取りされている。640～652は磁器製である。陶器製に比べて高台を使ったものは4点(642・650～652)と少なく、体部を使った小さなものが多い。653は唯一石製である。

654～659は石製品である。ナイフ形石器(654)はチャート製と思われる。他に砥石(655・656・658・659)、硯(657)がある。

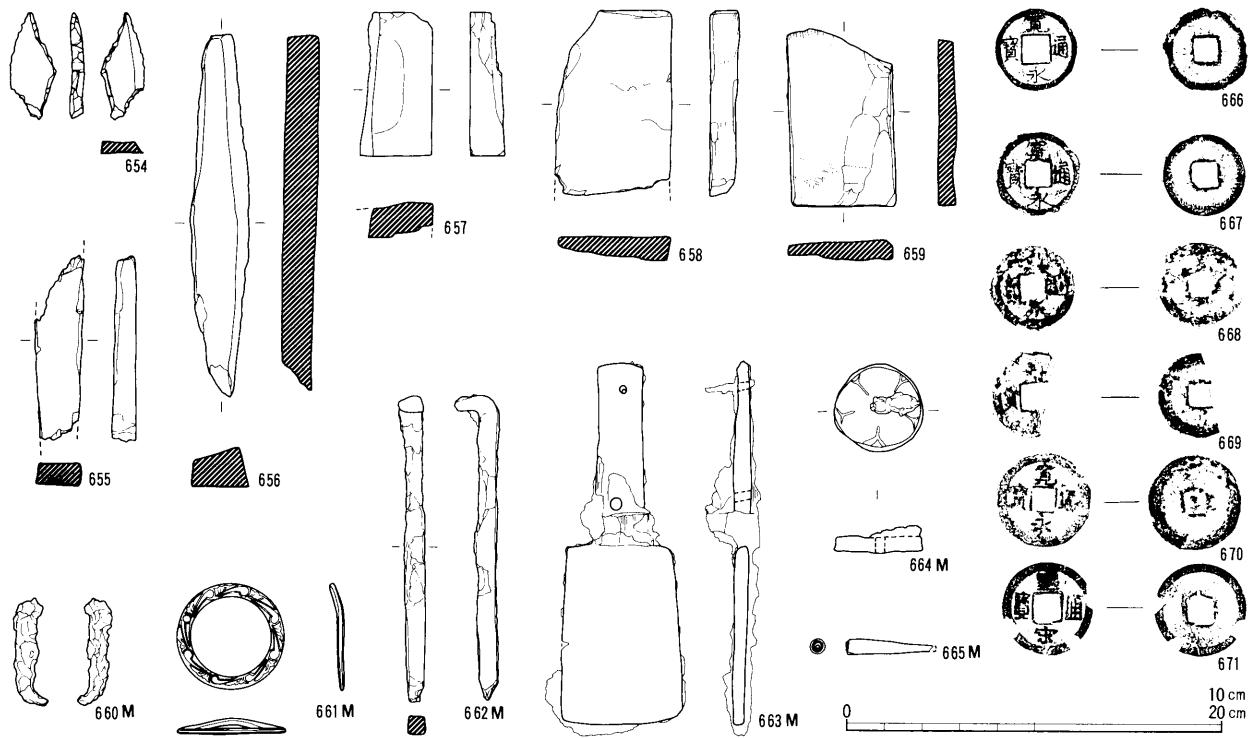
660～671は金属製品である。660と662は鉄釘、661は襷の引手状の円形のものであるが、用途は不明。

663はへら状工具で目釘穴が2カ所確認できる。柄の木質が一部付着して残っている。664は紡錘車で

あろうか。他に煙管の吸い口(665)と寛永通寶(666～671)がある。



第41図 包含層出土遺物実測図⑤ (1 : 4)



第42図 包含層出土遺物実測図⑥ (655～665 1 : 4、664・666～671 1 : 2)

IV. 結語

1. 磁石建物について

磁石建物4棟（SB1～4）がこの地区で検出された建物のすべてである。この他にも、調査区北西部で栗石が間隔をおいて見つかっていたり、北東部でも石列があったりし、建物の建っていた可能性を示唆する。

SB1の残った磁石はすべて自然石である。下に栗石を敷いたもの、磁石がなくなり栗石のみ残ったもの、抜き取り穴だけのもがある。南側3尺5寸は縁と玄関であったろうか、南辺の磁石の残りが悪く東柱が何本かあつただろうことを思わせる。西から3間3尺、北から2間の位置には大黒柱があったと考えられ、深さ55cmまで栗石がつめられその上にやや大きめの磁石がのっていた。大黒柱のラインより西は「田」の字形の間取り、東は土間であると考えられ、このあたりの農家の基本的な間取りの「四間取り」（整形四間型）が想定できる。（第43図）

17世紀の後期は民家建築における大きな転換期であり、上層農民達は大きな経済力を背景により高度な技術と材料とを使って掘立柱建物から磁石建物に建て替えることが可能になった。SB1は、約6.5間×4.5間の規模で建坪約30坪、上層農家層にあたる。^②一方、田の字型の間取りが近畿地方で普及するのは17世紀中頃まで遡る可能性がある。^③その原形は前座敷型三間取である。SB1もこうした状況を背景に18世紀後葉から19世紀中葉に建て替えられたものと思われる。

SZ73は「かまど」（クド）に伴う遺構で、かまどの近くにあって芝等を保管しておくところであったと考えられる。この周辺の空間は「土間」でありかまどや流しがしつらえられていたところである。

南東隅は約10cm低くなっている「南東隅土坑」を想定させる。この地方は牛耕であるため通常家屋のこの位置を牛小屋にしていた。SK38等の土坑やSP74は牛小屋にかかる遺構であろう。

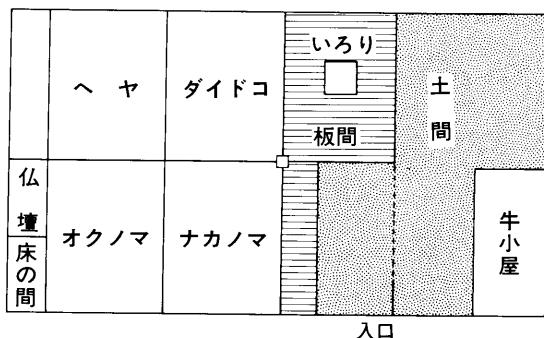
SB2はSB1とは90°棟方向が違う、対になる建物である。4辺とも布基礎で切石を使い、その多

くには臍穴をあけるなど頑丈なつくりであるところから、SB1にともなう倉を想定できる。しかし、土蔵であれば防火の観点から瓦葺きになるが、当地区からの瓦の出土はごく少量である。瓦葺きであり取り壊しの際瓦を再利用したか調査区外に廃棄した、あるいは、板葺きないしは草葺きの納屋であったかの二つが考えられる。出入り口は、妻入であれば南側、平入りであったとすれば西側に想定してもよいと思われる。

SB3は、SB1・2に伴う建物と思われる。磁石が切石で臍が穿ってあるところから建てられた時期はSB1・2より一時期後になると想定される。SB3は住居でありSB1の建増しと考える。建増した理由は、家族員の増加によりはなれ（隠居屋等）が必要になったためであろう。規模はSB1よりも小さく、間取りは田の字を基本としているようであるが確実には想定したい。

SB4は、SB1～3とは棟方向や規模等の点で異なった建物である。基礎は栗石のみが残っている。栗石の範囲は一辺約1mと大がかりであるところから、上部構造は一般の家屋とは異なりより規模の大きなもの、つまり寺院等を想定することができる。「伊勢路見取絵図」（東京国立博物館蔵）には「西念寺」、「安政元年 奎田村地図」（個人蔵）には「空也堂」の名でこの付近に寺が記載されており、これらに比定することも可能である。また、この付近の屋号を「念佛屋」ということもSB4を寺院とする補強材料になろう。

六大B遺跡A地区の北東150mにある真楽寺境内



第43図 整形四間型模式図

には、元の位置は不明だが、「向 空也上人堂」の道標があり、裏には「延享2年丑8月」の年号がある。西念寺については、天保4年に成立した「勢陽五鈴遺響」には、「空也堂冷井山西念寺 同処東ノ田圃ノ中ニアリ鉢敲ノ三五戸此処ニアリ（中略）毎歳十一月十二日上人ノ忌日法会ヲ修ス窪田村ヨリ点横シテ諸人詣ス（後略）」とあり、また、大正7年につくられた「河藝郡史」には「正念寺址 同上字不詳にあり、天臺宗に屬し冷井山と號す、空也上人の開創なりと傳ふ、（中略）明治初年寺號を廢せられたるか寺院明細帳になし、今菴室を遺す、一に西念寺に作る」と記述されている。詳細な位置は「字不詳」であるが、寺があったことは明らかである。寺は「明治初年」までに廃されたようである。

2. 窪田宿における遺跡の位置づけ

前述の「絵図」をみると六大B遺跡A地区の街道沿いに家屋は描かれておらず、小川（溝川？）が街道を横切って流れている。つまりこのあたりは北からきりこんできた谷の南端部にあたり一種の鞍部になっていたのではないだろうか。実際当地区から県道を隔てた北側には東西100mほどの間家並みの途切れ区間がある。さらにその北には六大A遺跡の大溝が北を向いて流れている。

こうした地形の中で街道から南に20～30mはなれたところが最も高い部分である。そこにまずSB1・2、次いでSB3が建てられたのである。SB

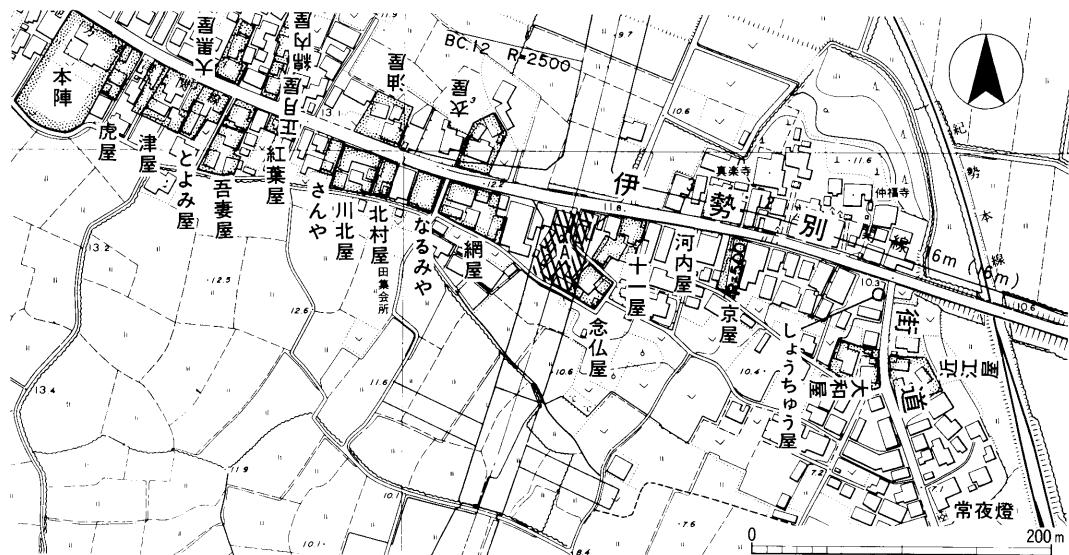
1は生計を街道に依存しないだけでなく、方向もN40°Eであり街道に沿った方向ではない。六大B遺跡や六大A遺跡で見つかっている前時代の掘立柱建物には定まった方向性は見出せなく、N40°Eがどのような理由で定まってきたのかはわからない。しているれば建物の北沿いの道（水道管理設備と同方向）を意識しているようである。この道は街道から空也堂へ行くための道であったと思われる。SD14もSB1～3と同方向であり、屋敷地の西端はここまでと考えられる。

一方、SB1～3より北（街道寄り）に想定される建物は、幕末以降に建てられたものと思われるが、タタキ製マスの方向から街道に沿って建てられていたと考えられる。SE10やSP77などが伴う遺構である。

六大B遺跡A地区の場所は窪田宿の中では中心よりやや東にあるが、かなりの間街道沿いに家屋はなく、江戸後期になって南に離れたところに建ち始める。街道沿いに家が建つのは幕末まで待たなくてはならなかったようである。「もり川」の墨書のある磁器皿や、SE10から出土した漆椀にも苗字など所属を表すと考えられる記述があることは宿場と結びつけられなくもない。従って、当地区は窪田宿の一角にありながら、出土した遺構と宿場とのかかわりは幕末以降であると考えられる。

3. タタキ製マスについて

タタキとは、花崗岩・安山岩質の風化土に重量比



第44図 窪田宿にのこる屋号（一部）（1：5,000）『伊勢別街道』より

で30%ほどの消石灰を加えて水でかたく練り、砂利を加えて練りあげたものをつき棒・しめ木等を用いて叩き締めたもので、三種類の「土」を混ぜるところから「三和土」と呼ばれる。コンクリートが普及するまで一般に用いられた建材で、「日本永代蔵」(貞享五年 1688年刊)に「久七に明け暮れたたき土をさせて……」とあるので、江戸前期にはすでに使われていたことがわかる。耐久性もありマスや水槽・井戸側・石壠・土間打ち等に使われた。²⁴⁾

六大B遺跡A地区のタタキ製マスは、その設置状態から3つに分類できる。一つ目は、地面を掘りくぼめ、石を敷いた上に造られたもの、二つ目は、地面を掘りくぼめただけで、土の上にじかに造られたもの、三つ目は、整地された地面の上に直接造られたものである。地面を掘りくぼめて造られたものは壁面が丈夫で、水等の液体を入れるのに適していたと思われる。下に石を敷くのは不等沈下を防ぐ基礎の役割をもたせるためであろう。石の有無は時期的な差と考えられる。出土遺物が少ないため明確ではないが、新しいものには石を敷くことが少ないような印象を受ける。整地した地面の上に直接造られたものは、桑の葉や芝など比較的軽く、壁面の負担にならないものを一時的に用いておくのに使われたのであろう。地面の上に置くのでは湿気をよんだり、新鮮さを保てなかったりして不都合だったと思われる。

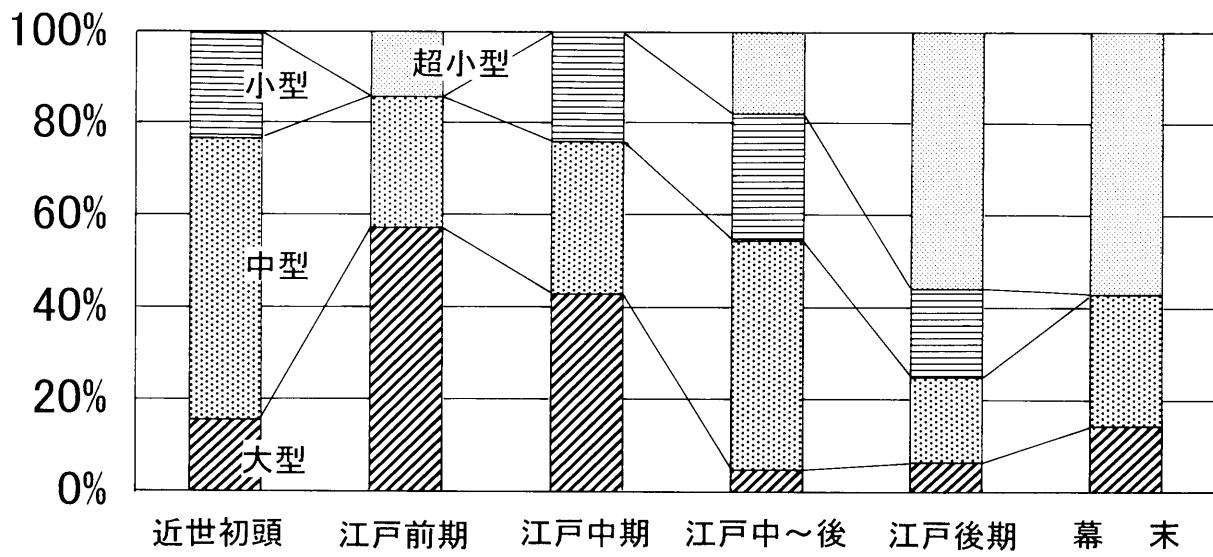
ところで、六大B遺跡A地区では、相当数のタタ

キ製マスが検出されている。SB1・2と方向をほぼ同じにするものだけでも10基以上を数える。造り替えがありこれらが同時存在していたわけではないが、常に複数の水槽と考えられるタタキ製マスがSB1の周辺にはあった。一般農家としては多過ぎる数である。農業と同時に、これらの水槽を使った職業を想定できるのではないだろうか。砥石も数多く見つかっているところから、例えば農具やそのほかの刃物を研ぐ「研ぎ屋」を一例として考えることができよう。初めはSB2の西側のSK49・61・SP71・75などとSD14の間が作業場所で、次いでSB1の南側のタタキ製マス群とその南の前庭が作業場所になっていたのであろうか。

4. 土師器皿と円形加工製品について

図化した土師器皿は、近世初頭26点、江戸前期7点、江戸中期21点、江戸中期～後期22点、江戸後期16点、幕末7点である。この他に包含層出土16点がある。これらは、その口径から大型（口径12cm）、中型（口径10cm）、小型（口径8cm）、超小型（口径6cm）に分けたが、時代別の比率は第45図のとおりである。この図から、土師器皿の大きさは大型・中型からしだいに小型へ、さらに超小型へと移ってくことがわかる。

土師器皿の用途を灯明皿とすると、この変化は、陶器の灯明皿や秉燭などの出現によって灯明皿を土師器に依存する割合が変化したものであると考えら



第45図 土師器皿の口径の変化

れよう。土師器の灯明皿はしだいに一時的に使用する補助的は灯として使われるようになり、従って大きさも小さくてすむようになっていったのではないだろうか。

一方、円形加工製品は、近世初頭に5点、江戸前期に1点、中期に4点、中期～後期には21点と爆発的に増加する。ここまでは、陶器製で直径4～5cm

程度のものが多い。後期にはいると12点あるが、内3点は磁器製で直径2～3cmである。幕末になると34点中、磁器製のものは15点とさらに増える。²⁵円形加工製品の用途の一つに「灯明芯のおさえ」があるが、後期～幕末に直径の小さなものが増加することは土師器灯明皿の小型化と無関係ではないと思われる。

註

(III 調査の成果)

- ⑭ 江戸時代の区分は、井上喜久男『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社 1992年 による。
- ⑮ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』瀬戸市歴史民俗資料館 1982年
- ⑯ 井上喜久男『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社 1992年
- ⑰ ⑯と同じ
- ⑱ 中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要II』常滑市教育委員会 1986年
- ⑲ 赤羽一郎『常滑焼－中世窯の様相』考古学ライブラリー23 ニュー・サイエンス社 1984年

(IV 結語)

- ⑳ 若林英郎「第六章 住居」『津市の民俗』伊勢民俗学会 1983年
- ㉑ 清水 擧『日本の美術287 民家と町並み 関東・中部』至文堂 1990年
- ㉒ 宮本長二郎『日本の美術288 民家と町並み 近畿』至文堂 1990年
- ㉓ ㉑と同じ
- ㉔ 飯塚一雄『技術文化の博物誌』柏書房株式会社 1982年
- ㉕ 山口 格 他『四ツ野C遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1997年

図版番号	登録器号	遺構	区分	器種	種類	口径 (cm)	法量 (ml)	胎土	素地	調色	釉	残存度 (%)		产地	年代	備考	
												底部30°	底部100°				
001 058-01 SK19		山奈 塙		山奈 塙	やや笠(～1.5mm砂粒含)	5.0	5.2	灰白2YY7.1	灰白2YY7.1			12C後	知多か瀬戸				
002 001-01 SE5		山奈 塙	(15.2)	山奈 塙	やや笠(～3mm砂粒含)	4.8	4.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部20°	底部100°	13C前	瀬戸窯 尾張	尾張			
003 002-02 SE6		山奈 塙	(14.4)	山奈 塙	やや笠(～2mm砂粒含)	5.2	5.2	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部25°	底部100°	13C前	瀬戸窯 尾張	尾張			
004 002-05 SE6		山奈 塙	(13.9)	山奈 塙	やや笠(～2mm砂粒含)	6.1	6.6	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部40°	底部100°	13C前	瀬戸窯 尾張	尾張			
005 002-03 SE6		山奈 塙	(6.3)	山奈 塙	やや笠(～5mm砂粒含)	6.1	6.1	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	底部100°	高台部70°	13C前	瀬戸窯 尾張	尾張			
007 002-04 SE6		山奈 塙	(6.4)	山奈 塙	やや笠(～2mm砂粒含)	5.6	5.6	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	休脚部20°～底脚100°		13C前	瀬戸窯 尾張	尾張			
008 094-01 SE5		山奈 塙	(19.2)	山奈 塙	やや笠(～4mm砂粒含)	8.2	8.2	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片		14C後	墨有				
010 172-01 SK20		工具器	(33.3)	工具器	やや笠(～2mm砂粒含)	8.4	8.4	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			入付有	口縁部有			
011 171-01 SK20		工具器		工具器	やや笠(～2mm砂粒含)	9.0	9.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			内外面黒化	口縁部(～油煙部)～油煙部(～油煙部)			
012 073-02 SD12		陶器		陶器	粗(～3mm砂粒含)	10.0	10.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			墨有	口縁部有			
013 073-01 SD12		陶器		陶器	粗(～3.5mm砂粒含)	16.4	9.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
014 172-01 SK20		陶器		陶器	粗(～3mm砂粒含)	8.2	8.2	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
015 025-03 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	8.4	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
016 030-06 SE7		土師器		土師器	粗(～1mm砂粒含)	9.9	2.1	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
017 030-05 SE7		土師器		土師器	粗(～1mm砂粒含)	1.8	1.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
018 030-02 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	10.0	1.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
019 030-01 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	10.0	2.4	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
020 025-01 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	9.7	2.3	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
021 030-03 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	10.2	1.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
022 030-01 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	10.8	2.1	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
023 030-01 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	11.9	1.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
024 030-01 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	12.8	2.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
025 025-02 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	9.8	5.6	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
026 031-01 SE7		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	10.3	5.5	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
027 027-05 SE7		折縁皿		折縁皿	粗(～2mm砂粒含)	10.9	6.2	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
028 027-06 SE7		折縁皿		折縁皿	粗(～2mm砂粒含)	10.8	6.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
029 027-02 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	13.2	7.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
030 031-04 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	11.6	4.2	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
031 027-03 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	11.3	3.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
032 027-03 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	10.3	4.3	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
034 027-04 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	9.7	5.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
035 031-05 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	9.6	5.5	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
036 029-01 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	12.5	5.5	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
037 027-01 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	23.7	10.4	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
039 026-01 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	30.3	16.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
040 025-04 SE7		工具器		工具器	粗(～2mm砂粒含)	12.8	10.3	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
042 028-01 SE7		瓦		瓦	粗(～4mm砂粒含)	24.7	2.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
043 029-02 SE7		瓦		瓦	粗(～4mm砂粒含)	24.4	9.8	(2.5)	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
044 004-04 SD13		古式土師器		古式土師器	粗(～2mm砂粒含)	10.2	2.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
045 017-01 SD13		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	7.4	2.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
046 017-02 SD13		土師器		土師器	粗(～2mm砂粒含)	5.9	2.4	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
047 004-07 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	7.8	1.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
048 024-01 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	10.7	8.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
049 017-03 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	8.2	1.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
050 015-01 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	9.4	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
051 015-02 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	9.5	1.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
052 015-02 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	10.4	2.8	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
053 004-04 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	9.4	2.1	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
054 029-01 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	10.8	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
055 014-02 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.8	2.3	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
056 004-04 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.1	1.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
057 014-02 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	9.0	1.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
058 014-03 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.6	1.7	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
059 014-04 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	10.0	2.1	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
060 006-01 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.4	2.3	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
061 006-02 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.1	1.9	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
062 006-03 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	13.5	3.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
063 010-02 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.1	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
064 007-03 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	13.5	3.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
065 006-04 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.7	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
066 006-05 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.6	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
067 012-01 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.9	2.1	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
068 010-03 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.3	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			
069 006-06 SD13		土師器		土師器	粗(～5mm砂粒含)	12.3	2.0	灰白5YY7.1	灰白5YY7.1	口縁部小片			常滑	口縁部小片			

第4表 遺物類表(1)

第5表 遺物観察表(2)

図版 番号	登錄番号	遺構 区分	器 種	口径 (cm)	法量 (cm)	胎 土	器 高	素 地	色 調	釉	残存度(%)	产地	年代
070-009-0-1	SD13	土師器	羽釜	(26.2)	並(~3mm砂粒含)	[二]小[い]青[金]5YR7/4	25	口縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	20	口縁部～体部20	
071-009-0-2	SD13	土師器	羽釜	(28.5)	並(~3mm砂粒含)	[二]小[い]青[金]5YR7/4		口縁部～体部40	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
072-015-0-3	SD13	土師器	羽釜	(22.8)	並(~2mm砂粒含)	橙5YR6/6	30	口縁部～体部40	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
073-008-0-2	SD13	土師器	羽釜	(28.0)	並(~3mm砂粒含)	[二]小[い]青[金]5YR7/4		口縁部～體部25	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
074-008-0-3	SP16	土師器	羽釜	(23.7)	並(~3mm砂粒含)	[二]小[い]青[金]5YR7/4		口縁部～體部15	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
075-008-0-1	SP16	土師器	羽釜	(29.8)	並(~3mm砂粒含)	淡黄5YR8/3		口縁部～体部15	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
076-005-0-0	SP16	土師器	羽釜	(25.8)	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/3		口縁部～体部15	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
078-005-0-1	SP16	土師器	羽釜	(26.0)	並(~3mm砂粒含)	橙5YR7/6		口縁部～体部15	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
079-011-0-2	SP16	土師器	羽釜	(22.0)	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/4		口縁部～体部50	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
080-012-0-2	SP16	土師器	羽釜	(24.9)	並(~3mm砂粒含)	[二]小[い]青[金]5YR4/3	30	口縁部～体部50	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
081-011-0-1	SP16	土師器	羽釜	(22.6)	並(~3mm砂粒含)	[二]小[い]青[金]5YR4/3	50	口縁部～体部50	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
082-017-0-5	SD17	土師器	羽釜	(23.2)	並(~3mm砂粒含)	淡黄5YR8/4		口縁部～体部50	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対	外面縁部以下スズ付着 鉗手孔は対面2孔1対			
083-087-0-1	SK21	土師器	羽釜	(22.9)	密	内底部灰褐色7.5YR5/2		口縁部～体部100	口縁部～体部100	口縁部～体部100			
084-004-0-8	SD13	土師器	糸釜	(16.4)	やや粗(~5mm砂粒含)	棕5YR7/6		口縁部～体部上半50	口縁部～体部上半50	口縁部～体部上半50			
085-017-0-4	SD17	土師器	糸釜	(23.5)	鈍部最大径	棕5YR7/6		口縁部～体部20	口縁部～体部20	口縁部～体部20			
086-005-0-3	SP16	土師器	糸釜	(27.6)	並(~3mm砂粒含)	淡黄5YR8/3		外面部以下スズ付着	外面部以下スズ付着	外面部以下スズ付着			
087-016-0-5	SP16	土師器	糸釜	(28.8)	並(~3mm砂粒含)	淡黄5YR8/3		外面部以下スズ付着	外面部以下スズ付着	外面部以下スズ付着			
088-013-0-3	SD13	陶器	内耳鉢	(10.4)	1.9	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR6/6	口縁部～底部50	口縁部～底部50	口縁部～底部50	16C後	大窓製品	
089-007-0-2	SD13	陶器	内耳鉢	(12.9)	1.0	並(~2mm砂粒含)	黃灰5YR6/1	口縁部～底部50	口縁部～底部50	口縁部～底部50			
090-013-0-3	SP26	陶器	内耳鉢	(10.7)	2.5	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR7/3	口縁部～底部50	口縁部～底部50	口縁部～底部50			
091-013-0-4	SP26	陶器	内耳鉢	(9.8)	2.3	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR7/1	口縁部～底部50	口縁部～底部50	口縁部～底部50			
092-017-0-6	SD17	陶器	内耳鉢	(12.2)	6.5	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR7/3	口縁部～底部50	口縁部～底部50	口縁部～底部50			
093-079-0-1	SK22	陶器	内耳鉢	(11.5)	6.0	並(~1mm砂粒含)	灰白5YR8/2	口縁部～底部50	口縁部～底部50	口縁部～底部50	16C前?	見込み部三文式印花底面部大窓	
094-007-0-3	SD13	陶器	内耳鉢	(11.2)	1.0	やや粗(~5mm砂粒含)	淡黄5YR8/3	口縁部～体部破片	口縁部～体部破片	口縁部～体部破片	14C後		
095-013-0-2	SD13	陶器	内耳鉢	(14.6)	並(~2mm砂粒含)	褐赤褐10YR5/1		口縁部～底部20	口縁部～底部20	口縁部～底部20			
096-013-0-6	SP16	陶器	内耳鉢	(16.3)	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/3		口縁部～底部15	口縁部～底部15	口縁部～底部15			
097-013-0-5	SD13	陶器	内耳鉢	(16.3)	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR7/6		口縁部～底部25	口縁部～底部25	口縁部～底部25	15C後		
098-010-0-3	SD13	陶器	内耳鉢	(16.3)	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR7/6		口縁部～底部70	口縁部～底部70	口縁部～底部70			
099-123-0-2	SP16	陶器	内耳鉢	4.2	28.4	並(~5mm砂粒含)	灰白5YR7/6						
100-123-0-3	SP16	陶器	内耳鉢	3.9	15.2	並(~5mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
101-121-0-5	SP26	陶器	内耳鉢	3.4	10.4	並(~5mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
102-121-0-6	SP26	陶器	内耳鉢	4.8	31.3	並(~5mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
103-12-0-7	SK22	陶器	内耳鉢	5.0	19.6	並(~5mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
104-158-0-1	SD60	工筋器	内耳鉢	(12.9)	1.9	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/4						
105-157-0-2	SD60	工筋器	内耳鉢	(10.9)	2.7	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
106-157-0-2	SD60	工筋器	内耳鉢	(12.7)	3.6	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
107-062-0-1	SK31	土師器	内耳鉢	(11.4)	2.5	並(~3mm砂粒含)	淡黄5YR8/4						
108-089-0-1	SK23	土師器	内耳鉢	(5.7)	1.0	やや粗(~1mm砂粒含)	淡黄5YR8/4						
109-080-0-2	SK23	土師器	内耳鉢	(11.2)	2.2	密	外、灰黄褐10YR6/2						
110-121-0-8	SK23	陶器	内耳鉢	(4.8)	30.3	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
111-081-0-1	SK32	土師器	内耳鉢	(10.0)	2.5	密	淡黄5YR8/4						
112-080-0-3	SK32	陶器	内耳鉢	(11.8)	6.8	並(~25mm砂粒含)	灰白5YR8/3						
113-094-0-5	SK24	陶器	内耳鉢	(13.5)	7.2	密	灰白5YR8/1						
114-084-0-1	SK19	陶器	内耳鉢	(12.8)	(7.6)	密	灰白5YR8/1						
115-129-0-3	SE62	石乳頭	内耳鉢	(7.3)	1.7	7.5	口(~2mm砂粒含)						
116-033-0-4	SE62	石乳頭	内耳鉢	(10.0)	1.6	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/4						
117-033-0-2	SE62	石乳頭	内耳鉢	(7.4)	2.0	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/6						
118-033-0-3	SE62	石乳頭	内耳鉢	(8.6)	2.1	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/6						
119-033-0-5	SE62	石乳頭	内耳鉢	(11.2)	1.7	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/6						
120-033-0-1	SE62	石乳頭	内耳鉢	(35.4)	8.0	並(~2mm砂粒含)	淡黄5YR8/6						
122-032-0-3	SE62	土師器	壺	(10.6)	13.9	並(~2mm砂粒含)	棕5YR7/6						
123-035-0-1	SE62	土師器	壺		9.4	並(~3mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
124-035-0-3	SE62	土師器	壺		(4.1)	並(~3mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
125-035-0-2	SE62	土師器	壺		(16.6)	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
126-035-0-4	SE62	土師器	壺		(13.0)	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2						
127-034-0-3	SE62	土師器	壺		4.4	6.8	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2					
128-033-0-1	SE62	土師器	壺		(10.2)	4.5	6.1	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2				
129-024-0-1	SE62	土師器	壺		(11.9)	5.5	6.1	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2				
130-032-0-2	SE62	土師器	壺		(13.0)	5.9	3.6	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2				
131-032-0-0	SE62	土師器	壺		(18.4)	5.1	3.6	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2				
132-130-0-5	SE62	石乳頭	壺		(30.1)	1.4	1.4	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2				
133-133-0-13	SE62	石乳頭	壺		5.0	15.8	1.5	並(~2mm砂粒含)	灰白5YR8/2				
135-133-1-14	SE62	金属製品	壺										
136-133-1-15	SE62	金属製品	壺										

図版番号	登録番号	遺構	区分	器種	口径	法量 (算水通量)	底径	器高 (cm)	胎土	素地色		調査	残存度(%)	产地	年代	備考
										内	外					
137	133-16 SE8	金属製品	Ⅳ	丸筒	7.2	2.1	1.8	9.1	2.1	赤	赤	明鏡 櫻	100			
138	162-02 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	9.8	2.1	1.8	9.2	2.1	赤	赤	赤黄 櫻 10YR8/6	100			口縁部 有
140	167-02 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	10.4	2.1	1.8	10.4	2.3	赤	赤	赤黄 櫻 10YR8/4	50			口縁部 有
142	167-02 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	11.2	2.2	1.8	11.2	2.4	赤	赤	赤黄 櫻 10YR8/3	50			口縁部 有
143	163-02 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	10.0	2.2	1.8	10.0	2.4	赤	赤	赤黄 櫻 10YR8/4	65			口縁部 有
145	165-02 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	12.0	2.7	1.8	12.0	2.7	赤	赤	赤黄 櫻 10YR8/4	80			口縁部 有
146	163-01 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	10.6	2.1	1.8	10.6	2.3	赤	赤	赤白 7.5YR8/1	80			口縁部 有
147	163-03 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	11.2	2.2	1.8	11.2	2.2	赤	赤	赤黄 櫻 7.5YR8/6	75			口縁部 有
148	162-06 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	11.9	2.1	1.8	11.9	2.1	赤	赤	赤黄 櫻 7.5YR7/6	23			口縁部 有
149	162-05 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	11.3	2.0	1.8	11.3	2.0	赤	赤	赤黄 櫻 7.5YR8/6	50			口縁部 有
150	162-05 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	11.8	2.0	1.8	11.8	2.0	赤	赤	赤黄 櫻 7.5YR8/8	50			口縁部 有
151	165-01 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	13.3	3.5	1.8	13.3	3.5	赤	赤	赤白 7.5YR7/4	30			口縁部 有
152	120-04 SD16	土師器	Ⅳ	丸筒	9.7	2.5	1.8	9.7	2.5	赤	赤	赤白 10YR8/3	50			口縁部 有
153	174-01 SK61	土師器	Ⅳ	丸筒	29.8	2.0	1.8	29.8	2.0	赤	赤	赤白 7.5YR8/3	20			内外面にスス付着
154	168-01 SD14	羽釜	Ⅳ	丸筒	23.0	2.0	1.8	23.0	2.0	赤	赤	赤白 7.5YR8/3	20			内外面にスス付着
155	120-01 SD16	土師器	Ⅳ	丸筒	23.5	2.0	1.8	23.5	2.0	赤	赤	赤白 7.5YR7/4	20			内外面にスス付着
156	120-02 SD16	土師器	Ⅳ	丸筒	37.4	10.5	1.8	37.4	10.5	赤	赤	赤白 7.5YR7/6	100			内外面にスス付着
157	020-03 SD16	土師器	Ⅳ	丸筒	26.0	12.6	1.8	26.0	12.6	赤	赤	赤白 7.5YR7/6	25			内外面にスス付着
158	021-01 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	6.7	2.5	1.8	6.7	2.5	赤	赤	赤白 15YR8/1	50			内外面にスス付着
160	162-01 SD14	土師器	Ⅳ	丸筒	11.0	1.8	1.8	11.0	1.8	赤	赤	赤白 15YR8/1	25			内外面にスス付着
161	021-01 SD15	土師器	Ⅳ	丸筒	13.1	3.0	1.8	13.1	3.0	赤	赤	赤白 15YR8/1	100			内外面にスス付着
162	018-07 SD16	土師器	Ⅳ	丸筒	6.9	2.0	1.8	6.9	2.0	赤	赤	赤白 15YR8/2	50			内外面にスス付着
163	021-03 SD15	土師器	Ⅳ	丸筒	13.5	6.7	1.8	13.5	6.7	赤	赤	赤白 15YR8/1	25			内外面にスス付着
164	042-02 SK26	土師器	Ⅳ	丸筒	11.7	6.0	1.8	11.7	6.0	赤	赤	赤白 15YR7/1	100			内外面にスス付着
165	018-06 SD16	土師器	Ⅳ	丸筒	6.9	3.0	1.6	6.9	3.0	赤	赤	赤白 15YR6/1	100			内外面にスス付着
166	164-04 SD14	土師器	小皿	丸筒	3.9	1.7	1.8	3.9	1.7	赤	赤	赤白 5YR4/8 透明	65			口縁
167	167-02 SD14	土師器	火皿	丸筒	21.5	1.8	1.8	21.5	1.8	赤	赤	赤白 5YR8/1	20			口縁部 有
168	163-04 SD14	土師器	火皿	丸筒	24.7	1.8	1.8	24.7	1.8	赤	赤	赤白 5YR7/8	30			口縁部 有
169	018-01 SD16	土師器	丸筒	8.2	4.2	1.8	8.2	4.2	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	50			口縁部 有	
170	018-04 SD16	土師器	丸筒	9.2	4.4	1.8	9.2	4.4	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	50			口縁部 有	
171	018-03 SD16	土師器	丸筒	10.6	5.3	1.8	10.6	5.3	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	100			口縁部 有	
172	018-02 SD16	土師器	丸筒	10.7	4.8	1.8	10.7	4.8	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	50			口縁部 有	
173	018-08 SD16	土師器	丸筒	9.6	6.6	1.8	9.6	6.6	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	100			口縁部 有	
174	018-05 SD16	土師器	丸筒	—	(4.0)	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	100			口縁部 有	
175	018-09 SD16	土師器	丸筒	—	5.4	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	100			口縁部 有	
176	018-10 SD16	土師器	丸筒	—	3.8	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/2	100			口縁部 有	
177	164-05 SD14	土師器	天目茶碗	丸筒	10.2	4.2	1.8	10.2	4.2	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	90			口縁部 有
178	167-03 SD14	土師器	天目茶碗	丸筒	10.9	4.3	1.8	10.9	4.3	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	50			口縁部 有
179	071-01 SK25	土師器	天目茶碗	丸筒	10.3	4.2	1.8	10.3	4.2	赤	赤	赤白 2.5YR7/1	100			口縁部 有
180	019-01 SD16	土師器	天目茶碗	丸筒	10.3	4.3	1.8	10.3	4.3	赤	赤	赤白 2.5YR7/3	50			口縁部 有
181	019-02 SK26	土師器	天目茶碗	丸筒	—	23.9	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	100			口縁部 有
182	042-01 SK26	土師器	天目茶碗	丸筒	35.5	4.0	1.8	35.5	4.0	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	100			口縁部 有
183	081-02 SK26	土師器	天目茶碗	丸筒	13.0	4.0	1.8	13.0	4.0	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	100			口縁部 有
184	019-02 SD16	土師器	天目茶碗	丸筒	34.6	10.5	1.8	34.6	10.5	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	15			口縁部 有
185	067-01 SK26	土師器	天目茶碗	丸筒	18.3	6.0	1.8	18.3	6.0	赤	赤	赤白 2.5YR7/2	100			口縁部 有
186	36-01 SK26	土師器	天目茶碗	丸筒	70.4	21.4	1.8	70.4	21.4	赤	赤	赤白 2.5YR7/3	100			口縁部 有
188	164-02 SD14	土師器	円形加工製品(施)	丸筒	—	—	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	100			口縁部 有
189	164-02 SD14	土師器	円形加工製品(施)	丸筒	—	—	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	100			口縁部 有
190	164-02 SD14	土師器	丸筒	—	—	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/4	100			口縁部 有	
191	077-02 SK40	土師器	丸筒	—	(9.4)	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/2	100			口縁部 有	
192	075-01 SE9	土師器	丸筒	—	—	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/2	100			口縁部 有	
193	075-02 SP1	土師器	丸筒	—	(10.5)	7.0	1.5	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/3	100			口縁部 有	
194	068-02 SP1	土師器	丸筒	—	(9.0)	—	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/6	100			口縁部 有	
195	068-01 SP1	土師器	丸筒	—	6.3	—	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR7/8	100			口縁部 有	
196	068-03 SK21	土師器	丸筒	—	9.2	2.2	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR8/3	100			口縁部 有	
198	038-01 SK21	土師器	丸筒	—	9.7	1.7	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR8/4	100			口縁部 有	
199	040-01 SK21	土師器	丸筒	—	10.2	1.6	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR8/3	100			口縁部 有	
200	078-01 SK35	土師器	丸筒	—	7.6	1.6	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR8/4	100			口縁部 有	
201	078-03 SK35	土師器	丸筒	—	5.5	1.0	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR8/2	85			口縁部 有	
201	078-03 SK35	土師器	丸筒	—	10.6	1.8	—	—	赤	赤	赤白 2.5YR8/2	100			口縁部 有	

图版	登錄番号	遺構	区分	器種	口径	法量 (cm)	底径	胎土	器蓋	調査		残存度(%)	産地	年代	備考
										高さ	直径				
202	078-04	SK95	土師器	皿	9.9	20	1.8	中や密(～2mm砂粒含)	灰白2-YR8.2	1.5	1.00	100	口縁部延有 口縁部延有		
203	078-02	SK95	土師器	皿	8.4	20	1.8	密(～1mm砂粒含)	灰白10-YR8.2	5.0	1.00	100	スズ付着		
204	143-06	SK37	土師器	灯明皿	12.6	7.2	1.8	密	密Y7.6	80			スズ付着		
205	143-04	SK37	土師器	灯明皿	8.8	5.5	1.6	密	密Y7.6	50			スズ付着		
206	143-05	SK37	土師器	灯明皿	10.8	7.5	1.3	やや粗	密Y7.5-YR8.3	80			スズ付着		
207	143-07	SK37	土師器	灯明皿	9.6	7.5	1.5	やや密	密Y7.6	65			スズ付着		
208	072-02	SK40	土師器	灯明皿	6.9	1.5	1.5	やや粗(～1.5mm砂粒含)	二ふた密Y7-YR7.4	100			スズ付着		
209	072-01	SK40	土師器	灯明皿	7.2	1.7	1.7	粗(～3.5mm砂粒含)	黄焼7-YR8.4	100			口縁部ニ油壺付着 灯明皿として使用		
210	046-01	SK42	土師器	皿	7.5	1.2	1.2	粗(～2mm砂粒含)	黄焼7-YR8.8	100			口縁部ニ油壺付着 灯明皿として使用		
211	046-02	SK42	土師器	皿	8.9	1.5	1.5	粗(～2mm砂粒含)	黄焼7-YR8.6	100			口縁部ニ油壺付着 灯明皿として使用		
212	046-03	SK42	土師器	皿	9.9	1.5	1.5	粗(～2mm砂粒含)	黄焼7-YR8.6	10			口縁部ニ油壺付着 灯明皿として使用		
213	047-03	SK41	土師器	皿	9.8	1.5	1.5	粗(～2mm砂粒含)	黄焼7.5-YR8.4	40			口縁部ニ油壺付着		
214	036-03	SK27	土師器	盤	1.5	1.5	1.5	粗(～1mm砂粒石英長石含)	淡黄2-YR8.3	80			伊藤4-b		
215	036-05	SK27	土師器	盤	1.5	1.5	1.5	粗(～1mm砂粒石英長石含)	二ふた密Y8.7/4	65			南伊勢土師器 伊藤4-d		
216	036-08	SK27	土師器	盤	1.5	1.5	1.5	粗(～1mm砂粒石英長石含)	淡黄2-YR8.3	100			外面入付着 伊藤4-c		
217	036-07	SK27	土師器	盤	1.5	1.5	1.5	粗(～1mm砂粒石英長石含)	淡黄2-YR8.3	100			外面入付着 伊藤4-b		
218	036-05	SK27	土師器	盤	1.5	1.5	1.5	粗(～1mm砂粒石英長石含)	淡黄2-YR8.3	100			外面入付着 伊藤4-b		
219	036-04	SK27	土師器	盤	1.5	1.5	1.5	粗(～1mm砂粒石英長石含)	淡黄2-YR8.3	100			外面入付着 伊藤4-b		
220	142-03	SK37	土師器	盤	23.6	1.2	1.2	粗(～1mm砂粒石英長石含)	淡黄2-YR8.3	20			外面入付着 伊藤4-b		
222	039-01	SK21	土師器	皿	12.2	6.5	3.2	密(～1mm砂粒含)	淡黄2-YR8.3	100			口縁部小片		
223	061-04	SK4	陶器	皿	15.9	6.9	3.9	やや密(～1.5mm砂粒含)	灰白2-YR8.1	100			口縁部小片		
224	141-07	SK37	陶器	皿	11.9	5.9	2.9	密	灰白N3.0	65			口縁部小片		
225	149-03	SK37	陶器	皿	12.8	6.6	3.4	密	金付灰白N3.0	65			口縁部小片		
226	152-01	SK37	陶器	皿	12.0	7.4	2.8	亞	オリーブ灰10-Y6.2	65			口縁部小片		
227	170-02	P180	陶器	皿	15.8	6.7	3.9	密	白N9.0	50			口縁部小片		
228	077-01	SP10	陶器	皿	11.7	6.4	3.3	やや密(～1.5mm砂粒含)	灰白2-YR8.2	100			口縁部小片		
229	061-01	SK44	陶器	皿	14.0	6.4	3.7	密	灰白10-YR8.1	50			口縁部小片		
230	061-03	SK34	陶器	皿	12.4	5.6	2.7	密	灰白10-YR8.2	100			口縁部小片		
231	061-02	SK34	陶器	皿	12.7	4.3	5.8	密(～2.5mm砂粒含)	赤色7-YR4.1	100			口縁部小片		
232	049-03	SK44	陶器	盤茶碗	11.1	3.8	5.3	密	灰白7.5-YR7.2	100			口縁部小片		
234	040-01	SK37	陶器	刷毛目碟	3.7	3.2	3.8	密	滑YR8.6	100			口縁部小片		
235	049-02	SK21	陶器	小碟	6.8	3.2	3.8	密	灰白2.5-YR7.3	100			口縁部小片		
236	050-01	SK44	陶器	小碟	5.6	3.3	5.2	密	灰白2-YR8.1	100			口縁部小片		
237	040-02	SK27	陶器	輪花皿	7.4	3.3	6.0	密	灰白N3.0	65			口縁部小片		
238	040-03	SK27	陶器	丸碗	6.0	3.8	5.4	密	灰白10-Y6.1	100			口縁部小片		
239	040-04	SK27	陶器	丸碗	8.3	4.3	6.2	密	灰白10-Y6.2	100			口縁部小片		
240	148-02	SK37	陶器	丸碗	9.6	4.3	6.3	密	灰白7.5-YR8.1	100			口縁部小片		
241	159-02	SK33	陶器	丸碗	8.6	4.3	5.9	密	灰白7.5-YR8.2	100			口縁部小片		
242	148-01	SK37	陶器	丸碗	8.6	3.3	5.3	密	灰白7.5-YR8.1	100			口縁部小片		
243	061-03	SK44	陶器	丸碗	9.1	3.7	5.4	密	灰白10-Y6.1	100			口縁部小片		
244	150-02	SK37	陶器	丸碗	8.7	4.3	5.6	密	灰白10-Y6.2	100			口縁部小片		
245	142-01	SK37	陶器	刷毛目碟	12.0	4.8	4.3	密	白N3.0	100			口縁部小片		
246	142-02	SK47	陶器	天目茶碗	7.1	4.6	4.7	密	明治2.5-YR2/2	100			口縁部小片		
248	049-01	SK44	陶器	皿	8.8	3.9	5.3	密	灰白10-YR7.1	100			口縁部小片		
249	077-02	SP10	陶器	皿	9.1	3.7	5.4	密	灰白10-YR7.1	100			口縁部小片		
250	150-02	SK37	陶器	丸碗	8.7	4.3	5.6	密	灰白10-Y6.3	100			口縁部小片		
251	049-06	SK44	陶器	丸碗	7.1	5.1	5.1	密	灰白5-YR8.1	100			口縁部小片		
252	095-02	SP71	陶器	素燒	4.7	3.1	3.1	密	黑7.5-YR7.1	100			口縁部小片		
253	082-01	SP71	陶器	素燒	5.0	3.7	3.7	密	灰白7.5-YR8.1	100			口縁部小片		
254	037-01	SK47	陶器	盤桂	7.1	4.6	4.7	密	灰白2.5-YR8.2	100			口縁部小片		
255	143-02	SK37	陶器	音叉、火炎	11.5	5.8	5.8	密	灰白10-YR7.3	100			口縁部小片		
256	036-02	SK27	陶器	花瓶	—	—	—	—	—	15			美濃	18C	
257	040-05	SK27	陶器	鉢	21.4	11.0	4.9	密	灰白7.5-YR7.1	50			美濃	18C	
258	096-02	SP71	陶器	鉢	19.6	11.0	5.2	密	透明5-G1-Y8.1	50			美濃	18C	
259	159-01	SK33	油壺	鉢	9.5	3.6	5.1	密	透明5-G1-Y8.1	50			美濃	18C	
260	061-05	SK34	油壺	鉢	9.8	3.7	5.1	密	透明5-G1-Y8.1	50			美濃	18C	
261	149-02	SK37	油壺	鉢	11.2	4.7	5.2	密	白N9.0	20			肥前(波佐見)	19C切	
262	140-04	SK37	油壺	鉢	11.2	4.5	5.1	密	青磁5B8.1	30			肥前(波佐見)	19C	
263	137-05	SK37	油壺	鉢	11.0	4.0	5.1	密	白N9.0	30			肥前(波佐見)	19C	
264	046-04	SK42	油壺	鉢	11.0	4.3	5.1	密	白N9.0	25			肥前(波佐見)	19C切	
265	047-01	SK47	油壺	鉢	11.0	4.3	5.1	密	白N9.0	15			肥前(波佐見)	19C	
266	169-01	P180	油壺	鉢	9.8	4.0	5.1	密	白N9.0	15			肥前(波佐見)	19C	
267	049-05	SK44	油壺	鉢	12.9	7.4	3.4	密	白	150			肥前(波佐見)	19C未?	
268	119-09	SK27	陶器	円形容器(天目茶碗)	4.2	—	—	—	—	15			高台部利用 内外面に鉢 底部外面に鉢	19C未?	

第7表 遺物觀察表(4)

図版番号	登録番号	遺構	区分	器種	口径	法量(cm)	胎土	調査地	年度(%)	产地		年代
										高さ	底径	
269.11.9.-08	SK27	陶器	円形加工製品(焼)		4.7		器高 31.4			高台部利用 内面に施		
270.11.9.-10	SK27	陶器	円形加工製品(焼)		5.5					高台部利用 内面に施		
271.12.0.-02	SK28	陶器	円形加工製品(焼)		5.3					高台部利用		
272.12.0.-07	SK28	陶器	円形加工製品(焼?)		5.1					体部利用		
273.12.0.-06	SK28	陶器	円形加工製品(焼?)		5.5					体部利用		
274.12.0.-03	SK28	燒造陶器	円形加工製品(焼?)		5.7					体部利用		
275.12.0.-08	SK28	陶器	円形加工製品(焼?)		4.8					体部利用		
276.12.0.-01	SK28	陶器	円形加工製品(焼?)		6.9					高台部利用 内面中央に刻花文		
277.12.0.-05	SK28	陶器	円形加工製品(焼?)		4.6					体部利用		
278.12.0.-04	SK28	陶器	円形加工製品(天目系陶)		6.1					体部利用		
279.12.2.-04	SK29	陶器	円形加工製品(天目系陶)		4.6					高台部利用 高台部に施		
280.12.1.-02	SK30	磁器	円形加工製品(小焼)		3.7					体部利用		
281.12.1.-04	SK35	須惠器	円形加工製品(焼)		5.5					体部利用 内外面にタスキ工具痕が明瞭		
282.12.1.-09	SK40	陶器	円形加工製品(天目系陶)		4.4					高台部の約三分の一を利用		
283.12.1.-10	SK40	陶器	円形加工製品(焼)		6.0					高台部利用		
284.12.0.-09	SK42	陶器	円形加工製品(焼)		4.9					高台部利用		
285.11.9.-06	SK43	陶器	円形加工製品(焼)		5.8					高台部利用 内面に施		
286.11.9.-01	SK48	陶器	円形加工製品(天目系陶)		5.4					えんじ色落部有		
287.11.9.-01	SK49	陶器	円形加工製品(天目系陶)		4.3					高台部利用 高台部に施		
288.12.1.-03	SP70	陶器	円形加工製品(皿)		10.4					体部利用		
289.13.0.-01	SK63	石製品	砾石		(10.0)					生上底? 一面に使用痕跡		
290.13.0.-04	SK42	石製品	砾石		(9.2)					手上底? 3面に使用痕跡		
291.13.1.-06	SP71	石製品	砾石		(9.9)					手上底? 3面に使用痕跡		
292.13.0.-03	SK27	石製品	砾石		(7.8)					手上底? 4面に使用痕跡		
293.12.9.-01	SK34	石製品	砾石		(8.5)					手上底? 4面に使用痕跡		
295.13.3.-06	SK27	金屬製品	便器(吸口)									
296.13.3.-11	SK27	金属製品	糸管(吸口)									
297.04.4.-01	SK28	土師器	土師器		7.8					口縁部に油墨付着 灰白色明瞭として使用		
298.04.4.-02	SK38	土師器	土師器		8.1					口縁部に油墨付着 灰白色明瞭として使用		
299.04.4.-03	SK38	土師器	土師器		9.4					口縁部に油墨付着 灰白色明瞭として使用		
300.04.4.-04	SK38	土師器	土師器		7.4					口縁部に油墨付着 灰白色明瞭として使用		
301.14.3.-02	SK45	土師器	土師器		10.8					口縁部に油墨付着 灰白色明瞭として使用		
302.14.3.-03	SK45	土師器	土師器		11.9					口縁部に油墨付着 灰白色明瞭として使用		
303.14.3.-03	SK45	土師器	土師器		8.5					口縁部至有		
304.09.4.-01	SK46	土師器	土師器		(11.5)					口縁部至有		
305.08.3.-01	SK49	土師器	土師器		6.8					口縁部至有		
306.08.6.-02	SK50	土師器	土師器		5.8					口縁部至有		
307.08.6.-02	SK50	土師器	土師器		6.0					口縁部至有		
308.08.6.-03	SK50	土師器	土師器		6.0					口縁部至有		
309.09.4.-01	SK62	土師器	土師器		5.9					口縁部至有		
310.09.4.-02	SK53	土師器	土師器		5.8					口縁部至有		
311.09.4.-03	SK53	土師器	土師器		7.1					口縁部至有		
312.10.4.-01	SK53	土師器	土師器		6.9					口縁部至有		
313.09.0.-01	SB1	土師器	輪		5.9					口縁部至有		
314.04.5.-01	SK38	土師器	焙烙		(24.9)					口縁部至有		
316.04.5.-03	SK38	土師器	焙烙		(38.4)					口縁部至有		
317.04.4.-06	SK38	土師器	焙烙		(37.8)					口縁部至有		
318.10.6.-03	SK38	土師器	焙烙		(42.4)					口縁部至有		
319.14.7.-04	SK45	土師器	焙烙?		10.5					口縁部至有		
320.14.1.-03	SK45	土師器	焙烙		(12.4)					口縁部至有		
321.14.1.-03	SK45	土師器	焙烙		6.2					口縁部至有		
322.14.1.-05	SK45	土師器	焙烙		7.3					口縁部至有		
323.15.5.-01	SK48	土師器	焙烙		7.5					口縁部至有		
324.08.5.-01	SK51	土師器	焙烙		9.3					口縁部至有		
325.09.4.-05	SK52	土師器	焙烙		8.7					口縁部至有		
326.09.4.-01	SK54	土師器	焙烙		9.0					口縁部至有		
327.10.0.-01	SB1	土師器	焙烙		(9.0)					口縁部至有		
328.11.0.-05	SP74	陶器	灰釉受皿		(11.3)					口縁部至有		
329.04.4.-08	SK38	陶器	小碗		5.4					口縁部至有		
330.04.4.-09	SK38	陶器	丸碗		(7.5)					口縁部至有		
331.04.4.-09	SK38	陶器	丸碗		(9.3)					口縁部至有		
332.09.5.-04	SK73	陶器	灰釉受皿		4.3					口縁部至有		
333.04.1.-03	SK39	陶器	丸碗		4.8					口縁部至有		
334.07.6.-01	SK41	陶器	丸碗		(9.0)					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					4.1					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					6.0					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					2.7					口縁部至有		
					1.9					口縁部至有		
					1.9					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					6.4					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					6.0					口縁部至有		
					6.0					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					4.6					口縁部至有		
					3.6					口縁部至有		
					1.7					口縁部至有		

固番	登録番号	遺構	区分	器種	口径	底径	法面	胎土	素地	色	調査	産地	年代	備考
335.151-01	SK45	陶器		丸窓	8.8	5.6	器高 [10.0]	器高 [10.0]	灰白5Y8/1 灰白5Y8/2	浅黄7.5Y7.3	素面10GY7/1	高台部100	13	
336.14-02	SK45	陶器		十字窓	12.1	2.6	密	密	灰白5Y8/2 灰白5Y8/1	明綠灰7.5Y8/3	紐部文 20	紐部文	180後	
337.153-02	SK45	陶器		碗	15.0	8.6	密	密	灰5Y5/1	暗褐7.5Y6/3				
338.147-01	SK45	陶器		香炉	6.6	6.6	密	密	灰白5Y8/1	暗褐10YR3/3				
339.140-05	SK45	陶器		鍾?	[17.5)	1.7	密	密	灰白5Y8/1	暗褐5Y8/3				
340.095-01	SK45	陶器		蓋?	4.8	3.0	密	密	灰白5Y8/1	暗赤褐5YR3/3				
341.151-02	SK45	陶器		湯?	4.5	4.5	密	密	灰白5Y8/2	浅黄7.5Y7.3	高台部100	13	蓋鉢 烹炊風	
342.145-01	SK45	陶器		花瓶?	5.4	5.4	密	密	灰白5YH8/2	黑11/1	暗褐7.5YR6/8	底部100	20	
343.156-02	SK48	陶器		不明?	15.8	15.8	平	平	灰白5YH8/2	黃金5YH7.8			信楽	
344.154-01	SK48	陶器		壺?	[25.0)	1.5	赤10R5/6					15	常滑	
345.102-01	SB4	陶器		壺?	[31.0)	1.5	赤10R5/6					15	常滑	
346.102-02	SB4	陶器		壺?	[39.0)	1.5	赤10R5/6					15	常滑	
347.108-01	SK43	陶器		土製品			密	密	暗赤褐5YR3/4	暗赤褐5YR3/4				
348.086-04	SK43	陶器		土製品			密	密	暗赤褐5YR8/2	暗赤褐5YR8/2				
349.125-07	SB1	陶器		土製品(陶器)	5.4	22.6	~Inm砂粒含)					100		
350.125-06	SB1	陶器		土製品(陶器)	5.8	34.0								
351.125-04	SB1	陶器		土製品(陶器)	4.3	9.1								
352.125-05	SB1	陶器		土製品(陶器)	4.2	14.9								
353.123-09	SB2	陶器		土製品(陶器)	7.8	11.9								
354.125-03	SB2	陶器		土製品(陶器)	5.3	22.0								
355.123-07	SB2	陶器		土製品(陶器)	5.7	39.1								
356.123-04	SB3	陶器		土製品(陶器)	2.8	7.7								
357.125-09	SB4	陶器		土製品(陶器)	2.4	3.0								
358.125-03	SB4	陶器		土製品(陶器)	5.2	45.0								
359.125-10	SB4	陶器		土製品(陶器)	5.9	53.0								
360.125-08	SB4	陶器		土製品(陶器)	6.1	43.2								
361.147-03	SK45	磁器	皿		22.0	12.0	3.2	織密	白N9/0	透明	N9/0	50	修復直有	
362.146-01	SK45	陶器	皿		[12.9)	[7.1)	3.6	織密	灰白N8/1	急付 淡付 暗付	暗付7.5Y4/3	25		
363.155-03	SK48	磁器	皿		[13.1)	[3.4)	3.7	密	明綠灰7.5CY8/1	明綠灰7.5CY8/1	明綠灰7.5CY8/1	20		
364.149-01	SK45	磁器	皿	紅皿	4.5	1.1	1.3	密	灰白N8/1	灰白N8/0	灰白N8/0	50		
366.048-03	SK54	磁器	皿		[13.9)	(8.0)	3.0	織密	灰白5Y7/1	明綠灰7.5CY8/1	明綠灰7.5CY8/1	40	17C後	
367.116-03	SB1	磁器	皿	庄重碗	[13.6)	(7.8)	3.9	織密	白色毛刷化透明	白色毛刷化透明	白色毛刷化透明	25		
368.155-02	SK48	磁器	皿	瓜葉碗	1.0	5.1	6.5	織密	灰白N8/1	灰白N8/1	灰白N8/1	75		
369.159-04	SK46	磁器	皿	瓜葉碗	[10.6)	6.2	6.6	密	明綠灰7.5Y8/1	青黑5B2/1	青黑5B2/1	30		
370.063-01	SK46	磁器	皿	瓜葉碗	10.4	5.1	6.1	密	灰白5Y8/1	青黑5B6/1	青黑5B6/1	50		
371.137-04	SK45	磁器	皿	瓜葉碗	[11.2)	5.7	6.5	密	灰白5Y7/1	暗黃5Y5/4	暗黃5Y5/4	50		
372.157-03	SK48	磁器	皿	蓋?	[5.4)	1.6								登次
373.095-03	SB1	磁器	碗			4.4		織密	白N9/1	透明	透明	50		
374.065-01	SK46	磁器	碗		[10.4)	(4.4)	5.6	密	白N9/1	急付 淡青	急付 淡青	50		
375.140-02	SK45	磁器	小碗		7.4	3.6	3.7	織密	灰白10Y8/1	透明	透明	50		
376.048-04	SK54	磁器	湯匙小碗		[9.4)	4.0	5.5	織密	白	明綠灰7.5CY8/1	明綠灰7.5CY8/1	19C後		
377.140-03	SK45	磁器	湯匙		[10.7)	(4.9)	6.0	密	灰白N8/0	明綠灰7.5CY8/1	明綠灰7.5CY8/1	100		
378.041-02	SK45	磁器	湯匙		9.4	3.7	5.4	密	灰白N8/1	灰白10Y7/1	灰白10Y7/1	100		
379.041-01	SK49	磁器	湯匙		9.8	4.3	5.3	密	灰白N8/1	灰白10Y8/1	灰白10Y8/1	100		
380.093-01	SK41	磁器	柒付大皿		[23.8)	6.4	5.3	織密	灰白N8/1	透明	透明	50		
381.156-01	SK48	五製品	碟		16.8	6.4	厚2.4							
382.129-05	SK43	石製品	底石		[7.4)	(5.3)	1.9							仕上強?
383.13-05	SB1	石製品	底石		[11.3)	3.9	1.7							3面に使用直有
384.139-02	SK45	錢製品	底石		[7.3)	7.0								元底 一面のみ使用直有
385.133-12	SB1	錢製品	底石											
386.133-03	SK50	金属製品	鍍金(通音)											
387.099-02	SB3	山茶碗			6.4		~2mm砂粒多含)							
388.099-01	SB3	山茶碗			7.4									
389.098-03	SB3	土師器	皿		11.7	2.3								
390.098-01	SB3	土師器	皿		10.4	1.8	並 (~4mm砂粒含)							
391.098-02	SB3	土師器	皿		9.8	2.8	並 (~6mm砂粒含)							
392.022-02	SE10	土師器	皿		5.5	0.8	並 (~2mm砂粒含)							
393.022-04	SE10	土師器	皿		7.3	0.8	並 (~1mm砂粒含)							
394.022-03	SE10	土師器	皿		6.7	0.8	並 (~1mm砂粒含)							
395.150-01	SK55	土師器	灯明皿		8.0	1.1	並 (~1mm砂粒含)							
396.088-01	SB3	瓦質	焰格		[38.6)									
397.138-02	SK55	瓦質	焰格		[35.6)									
398.054-01	SK57	瓦質	焰格		[36.2)									
399.138-01	SK59	瓦質	焰格		[36.5)									

図版	登録番号	遺構	区分	器種	口径	法量(cm)	胎土	器高	底径	地色	調査	残存度(%)	産地	年代	備考
番号	453 059-03 SD18	土器	小深	(80)	3.2	5.3	器高 5.8	灰白(Y8.1)	灰白(Y8.1)	灰白(Y8.1)	100	瀬戸	幕末～明治		
454 060-03 SD18	土器	端反襷		11.3	4.2	5.8	器高 5.8	灰白(Y8.1)	灰白(Y8.1)	透明	100	瀬戸	幕末～明治		
455 022-07 SE10	土器	紅皿(ミヤマ?)		2.1	0.8	1.2	器高 1.2	白	白	透明	100	九州	19C後		
456 022-07 SE10	土器	小杯		6.6	2.7	3.8	器高 3.8	透白(Y8.1)	透白(Y8.1)	透明	100	新潟?	幕末?		
457 053-02 SK57	土器	水注の蓋		2.1	1.9	1.9	器高 1.9	透白(Y8.1)	透白(Y8.1)	透明	100	瀬戸	幕末		
458 052-02 SK57	土器	端反襷		9.3	3.6	5.0	器高 5.0	透白(Y8.1)	透白(Y8.1)	透明	65	瀬戸	幕末		
459 052-01 SK57	土器	端反襷		10.5	4.3	6.3	器高 6.3	透白(Y8.1)	透白(Y8.1)	透明	50	瀬戸	幕末		
460 053-03 SK57	土器	端反襷		10.4	3.6	5.6	器高 5.6	透白(Y8.1)	透白(Y8.1)	透明	100	瀬戸	幕末		
461 096-01 SP69	土器	皿		14.2	6.4	5.2	器高 5.2	透密	透密	透明	80	瀬戸	幕末	底部ニ墨書き(もり川)	
462 140-01 SK59	土器	小深		7.6	2.8	5.2	器高 5.2	透密	透密	透明	50	瀬戸	美濃		
463 051-01 SK56	土器	端反襷		11.2	4.4	6.3	器高 6.3	透密	透密	透明	100	瀬戸	美濃		
464 119-02 SE10	土器	円形加工製品(株)		3.1	1.1	1.1	器高 1.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
465 119-04 SE10	土器	円形加工製品(株)		4.8	2.4	2.5	器高 2.5	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
466 119-05 SE10	土器	円形加工製品(株)		7.1	8.5	8.5	器高 8.5	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
468 122-09 SD18	土器	円形加工製品(不明)		3.1	1.1	1.1	器高 1.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
469 122-10 SD18	土器	円形加工製品(株)		4.9	3.5	3.5	器高 3.5	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
470 123-01 SD18	土器	円形加工製品(株)		4.8	1.9	1.9	器高 1.9	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
471 122-07 SK57	土器	円形加工製品(株)		6.3	6.6	6.6	器高 6.6	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
472 118-01 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.1	2.1	2.1	器高 2.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
473 118-02 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.1	2.6	2.6	器高 2.6	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
474 118-03 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.2	2.5	2.5	器高 2.5	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
475 118-04 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.4	3.4	3.4	器高 3.4	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
476 118-05 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.6	6.6	6.6	器高 6.6	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
477 122-05 SK57	土器	円形加工製品(株)		3.1	12.1	12.1	器高 12.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
478 122-06 SK57	土器	円形加工製品(株)		3.4	7.1	7.1	器高 7.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
479 118-06 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.1	3.0	3.0	器高 3.0	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
480 118-07 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.4	4.4	4.4	器高 4.4	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
481 118-08 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.6	2.3	2.3	器高 2.3	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
482 118-09 SK57	土器	円形加工製品(株)		1.5	0.9	0.9	器高 0.9	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
483 122-01 SK57	土器	円形加工製品(株)		4.3	18.9	18.9	器高 18.9	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
485 125-04 SK57	土器	円形加工製品(株)?		3.2	10.2	10.2	器高 10.2	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
486 118-01 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.8	5.2	5.2	器高 5.2	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
487 122-02 SK57	土器	円形加工製品(株)?		2.3	3.8	3.8	器高 3.8	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
488 118-11 SK57	土器	円形加工製品(株)		1.8	1.4	1.4	器高 1.4	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
489 118-12 SK57	土器	円形加工製品(株)		3.0	5.4	5.4	器高 5.4	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
490 118-13 SK57	土器	円形加工製品(株)		1.9	2.1	2.1	器高 2.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
491 118-14 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.2	3.0	3.0	器高 3.0	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
492 118-15 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.7	3.8	3.8	器高 3.8	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
493 118-16 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.4	3.0	3.0	器高 3.0	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
494 118-17 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.1	2.1	2.1	器高 2.1	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
495 118-18 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.7	6.3	6.3	器高 6.3	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
496 118-19 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.5	2.3	2.3	器高 2.3	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
497 118-20 SK57	土器	円形加工製品(株)		2.3	1.9	1.9	器高 1.9	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
498 128-01 SK61	石器	丸子		長11.0	幅4.6	1.9	器高 1.9	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
499 135-01 SK64	木製品	杓子		長13.7	幅6.3	厚0.5	器高 0.5	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
500 135-02 SP77	木製品	下鉢		幅8.3	厚2.0	透2.0	器高 2.0	透明	透明	透明	100	瀬戸	美濃		
501 135-03 SP77	木製品	合付臺		6.5	3.1	3.1	器高 3.1	やや密(～1mm砂粒含)	やや密(～1mm砂粒含)	やや密(～1mm砂粒含)	100	瀬戸	美濃		
503 179-01 包含層	土師器			10.9	1.9	1.9	器高 1.9	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	100	瀬戸	美濃		
505 107-02 包含層	土師器			11.4	2.1	2.1	器高 2.1	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
511 068-04 包含層	土師器			(10.4)	2.4	2.4	器高 2.4	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
512 107-05 包含層	土師器			9.6	2.2	2.2	器高 2.2	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
513 174-02 包含層	土師器			(10.2)	1.4	1.4	器高 1.4	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
514 174-03 包含層	土師器			9.4	1.8	1.8	器高 1.8	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
507 068-06 包含層	土師器	光明皿		(12.5)	3.1	3.1	器高 3.1	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	100	瀬戸	美濃		
508 068-07 包含層	土師器			10.9	1.9	1.9	器高 1.9	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	80	瀬戸	美濃		
510 106-03 C3	包含層	土師器		11.4	2.1	2.1	器高 2.1	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
511 068-04 包含層	土師器			(10.4)	2.4	2.4	器高 2.4	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
512 107-05 包含層	土師器			6.0	5.5	5.5	器高 5.5	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	80	瀬戸	美濃		
513 173-02 包含層	土師器			6.9	3.2	3.2	器高 3.2	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	50	瀬戸	美濃		
514 106-01 包含層	土師器			7.0	0.8	0.8	器高 0.8	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	100	瀬戸	美濃		
520 068-05 包含層	土師器			5.7	1.0	1.0	器高 1.0	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	透白(YR8.1)	100	瀬戸	美濃		

第11表 遺物觀察表(8)

固版番号	通番号	構造区分	器種	法量(cm)	胎土	色調	釉	保存度(%)	产地		年代
									蓋	蓋	
521.009-0-01	包含層 土器	灯明皿	口徑	6.3	1.4	やや密(～1mm砂粒含)	焼	75	口縁部に一部入付着	口縁部として使用されるこ	備考
522.177-0-01	包含層 土器	火箸	口徑	8.0	3.4	やや密	焼	75	口縁部外側に砂粒付着	口縁部外側に砂粒付着	
523.176-0-02	包含層 土器	火箸	口徑	(19.8)	1.74	12.2	焼	75	口縁部外側に砂粒付着	口縁部外側に砂粒付着	
524.115-0-04	包含層 土器	火鉢	口徑	16.6	14.6	9.2	やや粗	75	口縁部～体部6.5cm	口縁部～体部6.5cm	
525.009-0-01	包含層 土器	燈焰	口徑	(38.5)	1.4	やや密(～3mm砂粒含)	焼	75	口縁部5.0cm	口縁部5.0cm	
526.178-0-02	包含層 土器	仏具?	口徑	6.3	1.4	やや密(～1mm砂粒含)	焼	75	口縁部に一部入付着	口縁部として使用されるこ	備考
527.006-0-02	包含層 土器	火箸	口徑	8.0	1.5	やや密	焼	75	口縁部外側に砂粒付着	口縁部外側に砂粒付着	
528.001-0-03	包含層 土器	土筆	口徑	16.6	14.6	9.2	やや粗	75	口縁部外側に砂粒付着	口縁部外側に砂粒付着	
530.175-0-06	包含層 土器	土筆	最大径	6	1.4	外にふい縁	焼	75	外にふい縁	外にふい縁	
531.009-0-01	包含層 土器	土人形	最大径	3.4	1.4	内にふい縁	焼	75	内にふい縁	内にふい縁	
532.009-0-04	包含層 土器	土人形	口徑	12.7	8.1	3.1	灰白	75	灰白	灰白	
533.113-0-05	包含層 土器	土人形	口徑	13.1	6.8	2.9	灰白	75	灰白	灰白	
534.174-0-04	包含層 土器	丸皿	口徑	(11.5)	6.8	2.5	灰白	75	灰白	灰白	
535.174-0-01	包含層 土器	丸皿	口徑	10.4	5.4	2.4	灰白	75	灰白	灰白	
537.111-0-02	包含層 土器	丸皿	口徑	(10.5)	4.6	2.5	灰白	75	灰白	灰白	
538.111-0-01	包含層 土器	丸皿	口徑	7.4	4.0	1.8	灰白	75	灰白	灰白	
539.005-0-02	包含層 土器	丸皿	口徑	(13.2)	5.7	3.6	灰白	75	灰白	灰白	
540.009-0-02	包含層 土器	輪天皿	口徑	12.5	6.0	3.1	灰白	75	灰白	灰白	
541.009-0-04	包含層 土器	輪天皿	口徑	12.8	5.7	2.9	やや密(～2mm砂粒含)	75	透明	透明	
542.009-0-05	包含層 土器	輪天皿	口徑	11.6	4.4	3.0	やや密(～2mm砂粒含)	75	透明	透明	
543.110-0-04	包含層 土器	米仔皿	口徑	12.4	6.8	3.0	やや密(～2mm砂粒含)	75	透明	透明	
544.009-0-05	包含層 土器	米仔皿	口徑	11.5	5.3	3.5	基(～3mm砂粒含)	75	透明	透明	
545.009-0-04	包含層 土器	米仔皿	口徑	13.6	8.4	3.2	密	75	透明	透明	
546.101-0-01	包含層 土器	米仔皿	口徑	(9.8)	4.0	2.0	やや密(～1mm砂粒含)	75	透明	透明	
548.111-0-04	包含層 土器	米仔皿	口徑	9.8	4.5	2.1	粉密	75	透明	透明	
549.111-0-02	包含層 土器	米仔皿	口徑	8.4	2.9	1.9	粉密	75	透明	透明	
551.109-0-03	包含層 土器	米仔皿	口徑	9.4	3.0	1.7	粉密	75	透明	透明	
552.111-0-04	包含層 土器	米仔皿	口徑	6.2	2.2	1.5	粉密	75	透明	透明	
553.111-0-08	包含層 土器	米仔皿	口徑	6.8	2.8	1.5	粉密	75	透明	透明	
554.111-0-09	包含層 土器	米仔皿	口徑	6.1	2.9	1.4	粉密	75	透明	透明	
555.111-0-10	包含層 土器	米仔皿	口徑	9.6	4.5	1.8	粉密	75	透明	透明	
556.110-0-02	包含層 土器	米仔皿	口徑	6.9	2.8	1.3	粉密	75	透明	透明	
557.111-0-03	包含層 土器	米仔皿	口徑	7.4	3.6	1.7	粉密	75	透明	透明	
558.111-0-01	包含層 土器	米仔皿	口徑	6.8	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
559.111-0-08	包含層 土器	米仔皿	口徑	9.2	2.4	1.5	アリ	75	透明	透明	
560.009-0-02	包含層 土器	丸碗	口徑	(7.9)	3.3	3.3	やや密	75	透明	透明	
561.177-0-02	包含層 土器	丸碗	口徑	(12.3)	(10.0)	2.7	密	75	透明	透明	
562.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	(8.8)	(3.7)	5.9	基(～1mm砂粒含)	75	透明	透明	
563.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	8.8	3.8	6.2	密	75	透明	透明	
564.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.1	6.0	粉密	75	透明	透明	
565.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	9.6	4.3	5.8	密	75	透明	透明	
566.111-0-02	包含層 土器	丸碗	口徑	9.2	2.4	1.5	アリ	75	透明	透明	
567.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(7.9)	(5.7)	3.3	やや密	75	透明	透明	
568.111-0-04	包含層 土器	丸碗	口徑	(12.3)	(10.0)	2.7	密	75	透明	透明	
569.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	(8.8)	(3.7)	5.9	基(～1mm砂粒含)	75	透明	透明	
570.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
571.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
572.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
573.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	(9.3)	(5.0)	4.3	やや粗	75	透明	透明	
574.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	(5.0)	4.3	やや粗	75	透明	透明	
575.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.0	やや密	75	透明	透明	
576.111-0-02	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
577.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
578.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
579.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
580.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
581.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
582.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
583.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
584.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
585.111-0-02	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
586.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
587.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
588.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
589.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
590.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
591.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
592.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
593.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
594.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
595.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
596.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
597.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
598.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
599.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
600.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
601.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
602.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
603.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
604.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
605.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
606.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
607.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
608.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
609.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
610.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
611.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
612.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
613.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
614.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
615.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
616.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
617.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
618.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
619.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
620.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
621.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
622.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
623.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
624.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
625.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
626.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
627.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
628.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
629.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
630.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
631.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	8.6	3.8	5.1	やや密	75	透明	透明	
632.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
633.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	6.6	2.9	1.4	アリ	75	透明	透明	
634.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	9.7	4.0	5.1	粉密	75	透明	透明	
635.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑	9.9	3.6	5.3	やや密	75	透明	透明	
636.111-0-06	包含層 土器	丸碗	口徑	11.7	6.8	6.2	密	75	透明	透明	
637.111-0-01	包含層 土器	丸碗	口徑	10.4	4.9	5.6	やや密	75	透明	透明	
638.111-0-03	包含層 土器	丸碗	口徑	(11.0)	3.2	5.0	やや粗	75	透明	透明	
639.111-0-05	包含層 土器	丸碗	口徑</td								

第12表 遺物觀察表(9)

図版	登録番号	遺構	区 分	器 型	種	法量 (cm)		胎 土	器 高	底 径	口 径	器 形	地 色	調 研	残存度 (%)	産 地	年 代	備 考
						口径	底径											
586	17.8-03	包含層	磁器	漆利	漆利	10.4	6.5	9.5	やや歪 舌	5.4	10.4	円形	淡青5YR8/3	青	50	口縁部一部欠	入行着 三又チタン直 内面底部に6ヶ所チタン直	
587	17.6-01	包含層	磁器	蓋付?	蓋付?	(16.7)	8.2	10.1	歪 舌	5.5	5.0	円形	淡青2.5YR8/3	淡青5YR8/3	90	底部100 口縁部一部欠	19C?	
588	05.1-01	包含層	磁器	鉢	鉢	10.4	5.0	2.5	鉢	9.5	10.4	円形	白N9.0	暗赤5YR8/1	90	明緑灰10G7/1		
589	10.7-05	包含層	磁器	小皿	小皿	10.4	6.1	2.2	鉢	6.6	13.8	円形	白10Y8/1	白(10Y8/1)	100	口縁部一部欠		
590	11.2-01	包含層	磁器	塗付皿	塗付皿	12.0	5.1	6.4	歪 舌	6.6	3.7	円形	明緑5G/1	青黒(0B32/1)	100	明緑灰5G/1	修復直有(ガラス質のもので接合)	
591	17.8-01	包含層	磁器	碗	碗	9.7	3.5	5.4	鉢	12.0	5.1	円形	灰白NB8-1	釉付	50	釉付	着底	
592	11.1-02	包含層	磁器	碗	碗	9.7	3.6	5.3	鉢	10.0	5.3	円形	灰白NB8-0	釉付	90	透明	肥前	「くわんか手」
593	11.1-04	包含層	磁器	碗	碗	(9.7)	(5.0)	5.3	鉢	9.0	4.0	円形	灰白N9.1	釉付	肥前(波佐見)	肥前(波佐見)	「くわんか手」	
594	09.5-05	包含層	磁器	碗	碗	(9.7)	(5.0)	5.3	鉢	9.0	4.0	円形	灰白10Y7/1	暗赤灰10G7/1	25	暗赤灰10G7/1	肥前(波佐見)	「くわんか手」
595	15.9-03	包含層	磁器	碗	碗	2.0	8.2	8.2	鉢	2.0	4.0	円形	灰白5Y8/2	釉付	100	口縁部一部欠		
596	10.9-01	包含層	磁器	小瓶	小瓶	4.5	1.4	1.5	歪 舌	5.4	2.3	円形	灰白5Y8/1	釉付	100	釉付	肥前	「くわんか手」
597	11.1-05	包含層	磁器	廣東碗の蓋	廣東碗の蓋	9.5	4.8	2.9	鉢	9.5	4.8	円形	灰白7.5Y8/1	釉付	50	透明	肥前	「くわんか手」
598	11.2-02	包含層	磁器	紅皿	廣東碗の蓋	9.0	3.6	3.1	鉢	9.0	4.5	円形	灰白10Y8/1	釉付	50	透明	肥前	「くわんか手」
599	11.0-06	包含層	磁器	小碗	小碗	6.7	2.4	2.4	鉢	6.7	2.6	円形	灰白7.5Y8/1	釉付	50	透明	肥前	「くわんか手」
600	11.1-01	包含層	磁器	花瓶	花瓶	6.4	3.6	3.6	鉢	6.4	3.6	円形	灰白10Y8/1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
601	17.4-05	包含層	磁器	端反碗	端反碗	10.1	5.4	5.8	鉢	11.0	5.4	鉢	白N9.1	釉付	100	口縁部欠	口縁部欠	
602	11.2-04	包含層	磁器	端反碗	端反碗	9.1	3.7	4.6	鉢	9.1	3.7	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
603	16.9-02	包含層	磁器	盖	盖	10.7	4.2	5.9	鉢	10.7	4.2	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
604	17.4-05	包含層	磁器	碗	碗	11.8	4.6	5.2	鉢	11.8	4.6	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
605	10.0-02	包含層	磁器	廣東碗	廣東碗	11.0	5.4	6.3	鉢	11.0	5.4	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
606	11.1-07	包含層	磁器	廣東碗	廣東碗	9.1	3.7	4.6	鉢	9.1	3.7	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
607	11.4-01	包含層	磁器	端反碗	端反碗	11.2	3.9	6.1	鉢	11.2	3.9	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
608	10.9-04	包含層	磁器	端反碗	端反碗	9.5	3.5	2.7	鉢	9.5	3.5	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
609	11.5-01	包含層	磁器	端反碗	端反碗	11.8	4.6	5.2	鉢	11.8	4.6	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
610	10.9-03	包含層	磁器	端反碗	端反碗	10.7	4.2	5.9	鉢	10.7	4.2	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
611	11.2-03	包含層	磁器	端反碗	端反碗	9.5	3.5	2.7	鉢	9.5	3.5	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
612	10.0-03	包含層	磁器	端反碗	端反碗	(11.3)	4.0	6.5	鉢	9.4	3.4	鉢	白N9.1	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
613	17.0-01	包含層	磁器	端反碗	端反碗	9.4	3.4	5.3	鉢	9.4	3.4	鉢	白N9.0	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
614	11.0-03	包含層	磁器	端反碗	端反碗	12.8	5.1	6.8	鉢	12.8	5.1	鉢	白N9.1	釉付	50	透明	肥前	「くわんか手」
615	12.2-03	包含層	磁器	円形加工製品(山茶碗)	円形加工製品(山茶碗)	7.9	7.5	7.5	鉢	7.9	7.5	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
616	12.6-02	包含層	磁器	円形加工製品(山茶碗)	円形加工製品(山茶碗)	5.9	3.18	3.18	鉢	5.9	3.18	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
617	17.5-02	包含層	磁器	円形加工製品(山茶碗)	円形加工製品(山茶碗)	7.3	98.5	98.5	鉢	7.3	98.5	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
618	12.1-01	包含層	磁器	円形加工製品(山茶碗)	円形加工製品(山茶碗)	7.0	97.5	97.5	鉢	7.0	97.5	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
619	12.6-01	包含層	磁器	円形加工製品(山茶碗)	円形加工製品(山茶碗)	6.7	49.9	49.9	鉢	6.7	49.9	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
620	17.5-02	包含層	磁器	円形加工製品(山茶碗)	円形加工製品(山茶碗)	7.5	105.2	105.2	鉢	7.5	105.2	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
621	16.0-01	包含層	磁器	円形加工製品	円形加工製品	7.5	105.2	105.2	鉢	7.5	105.2	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
622	12.2-03	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.5	30.0	30.0	鉢	5.5	30.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
623	12.4-01	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.3	34.2	34.2	鉢	5.3	34.2	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
624	12.4-02	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.5	29.6	29.6	鉢	5.5	29.6	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
625	12.4-03	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.4	32.0	32.0	鉢	5.4	32.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
626	12.4-04	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.5	39.4	39.4	鉢	5.5	39.4	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
627	12.4-05	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.5	33.0	33.0	鉢	5.5	33.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
628	12.4-06	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.5	33.0	33.0	鉢	5.5	33.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
629	12.6-10	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	2.5	6.5	6.5	鉢	2.5	6.5	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
630	12.6-12	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	2.8	3.5	3.5	鉢	2.8	3.5	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
631	17.3-06	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	4.4	26.5	26.5	鉢	4.4	26.5	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
632	12.5-02	包含層	磁器	円形加工製品(天目茶碗)	円形加工製品(天目茶碗)	4.7	16.9	16.9	鉢	4.7	16.9	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
633	12.6-03	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	4.7	20.0	20.0	鉢	4.7	20.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
634	12.3-08	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.4	32.0	32.0	鉢	5.4	32.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
635	17.5-03	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.4	32.0	32.0	鉢	5.4	32.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
636	17.3-07	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.5	32.0	32.0	鉢	5.5	32.0	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
637	12.4-07	包含層	磁器	円形加工製品(丸焼)	円形加工製品(丸焼)	5.1	25.4	25.4	鉢	5.1	25.4	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
638	12.3-13	包含層	磁器	円形加工製品(小碗)	円形加工製品(小碗)	3.0	16.1	16.1	鉢	3.0	16.1	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」
639	12.6-27	包含層	磁器	円形加工製品(小碗)	円形加工製品(小碗)	3.1	7.1	7.1	鉢	3.1	7.1	鉢	白N9.8	釉付	100	透明	肥前	「くわんか手」

第13表 遺物観察表(10)

图版	登錄番号	遺物	区 分	重量	器 器	量 [cm]	口 径	底 直	器 高	胎 土			色 調			产地	年 代	備 考
										素 地	胎 土	胎 土	素 地	胎 土	胎 土			
640	127-04	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	2.5			4.1									体部利用
641	126-09	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	2.7			4.2									口縫部利用
642	124-03	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	3.8			8.6									高台部利用
643	123-05	包含層	磁器		円形加工製品(焼?)	1.9			2.2									体部利用
644	127-01	包含層	磁器		円形加工製品(焼?)	3.2			6.8									体部利用
645	127-02	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	2.7			6.6									体部利用
646	127-03	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	2.6			5.1									体部利用
647	124-05	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	4.3			9.1									体部利用
648	126-08	包含層	磁器		円形加工製品(皿)	2.7			6.9									高台部部分利用
649	173-04	包含層	磁器		円形加工製品(焼)	最大径3.2												体部利用
650	124-10	包含層	磁器		円形加工製品(丸東洋)	6.7			5.3									高台部利用
651	124-09	包含層	磁器		円形加工製品(丸東洋)	3.3			11.3									高台部利用
652	123-06	包含層	磁器		円形加工製品(焼?)	4.4			11.3									高台部利用
653	173-08	包含層	磁器		円形加工製品(焼?)	4.4			16.1									高台部利用
654	131-08	包含層	磁器		円形加工製品(焼?)	2.3			1.1									混入品か?
655	130-06	包含層	石製品		研磨石	(9.7)			2.5									中埴?
656	132-01	包含層	石製品		研磨石	(19.3)			3.1									中埴? 表裏2面に使用痕跡
657	131-04	包含層	石製品		研磨石	(3.4)			(7.6)									仕上底 表裏2面に使用痕跡
658	131-03	包含層	石製品		研磨石	(9.9)			6.1									仕上底 表裏2面に使用痕跡
659	131-01	包含層	石製品		研磨石	(5.0)			1.1									仕上底 表裏2面に同一箇所
660	176-02	包含層	金屬製品		鍛錬	(9.4)			5.5									多点、
661	133-02	包含層	金屬製品		鍛錬													表面欠損?
662	123-01	包含層	金屬製品		鍛錬													
663	133-08	包含層	金屬製品		鍛錬													
664	176-03	包含層	金屬製品		精耕車	至4.6			厚0.8									100
665	133-07	包含層	金屬製品		精耕車(吸口)													
666	176-05	包含層	金屬製品		精耕車													
667	176-06	包含層	金屬製品		精耕車													
668	176-07	包含層	金屬製品		精耕車													
669	176-08	包含層	金屬製品		精耕車													
670	133-09	包含層	金屬製品		精耕車													
671	133-10	包含層	金屬製品		精耕車													

第14表 遺物觀察表[1]

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いっぽんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ(きゅうこうく)けんせつじぎょうにともなう ろくだいびいいせき(えいちく)はくつちょうさはうこく							
書名	一般国道23号中勢道路(9工区)建設事業に伴う六大B遺跡(A地区)発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-10							
編著者名	本堂弘之							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 ☎ 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 1999年 2月 1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在 地	コード		北 緯 °, ′, ″	東 経 °, ′, ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
六大B遺跡 (A地区)	三重県津市大里窪田町 字出口	市町村	遺跡番号	34° 45' 48"	136° 29' 51"	19930817 19931216 19940621 19940808	1,270 670	一般国道23号中勢 道路建設事業に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
六大B遺跡 (A地区)	集落跡	平安時代～ 明治時代	礎石建物・溝・井戸・ 土坑		山茶椀・土師器羽釜・ 土師器皿・瓦質土器・ 施釉陶器・磁器・ 円形加工製品		陶器・磁器等を使った円 形加工製品が多量に出土。	

写 真 図 版



調査前遠景（窪田宿全景）（北西から）



調査区遠景（東から）



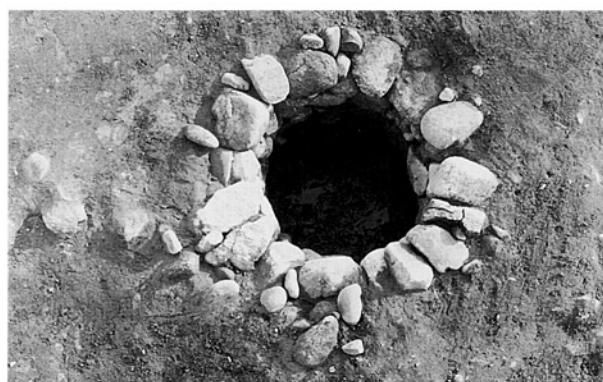
調査前近景（南から）



平成 6 年度調査区全景（南東から）



SD13・SP76（東から）



SE 10（北から）



SE 9（北から）



SE 10 断面（南から）



SB 4 硙石南東角



SE 10 底部（南から）



平成5年度調査区全景（垂直写真 上が南東）



SB1・SB4（南西から）



SB 2・SB 3 (北から)



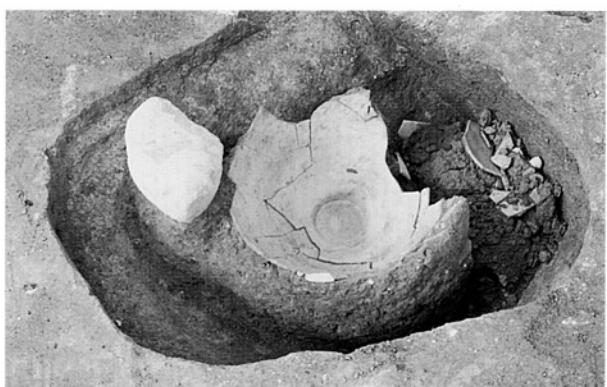
SB 4 (南西から)



S B 2 東角



平成 5 年度調査区南東部（北から）



S Z 66



S Z 67



S Z 68



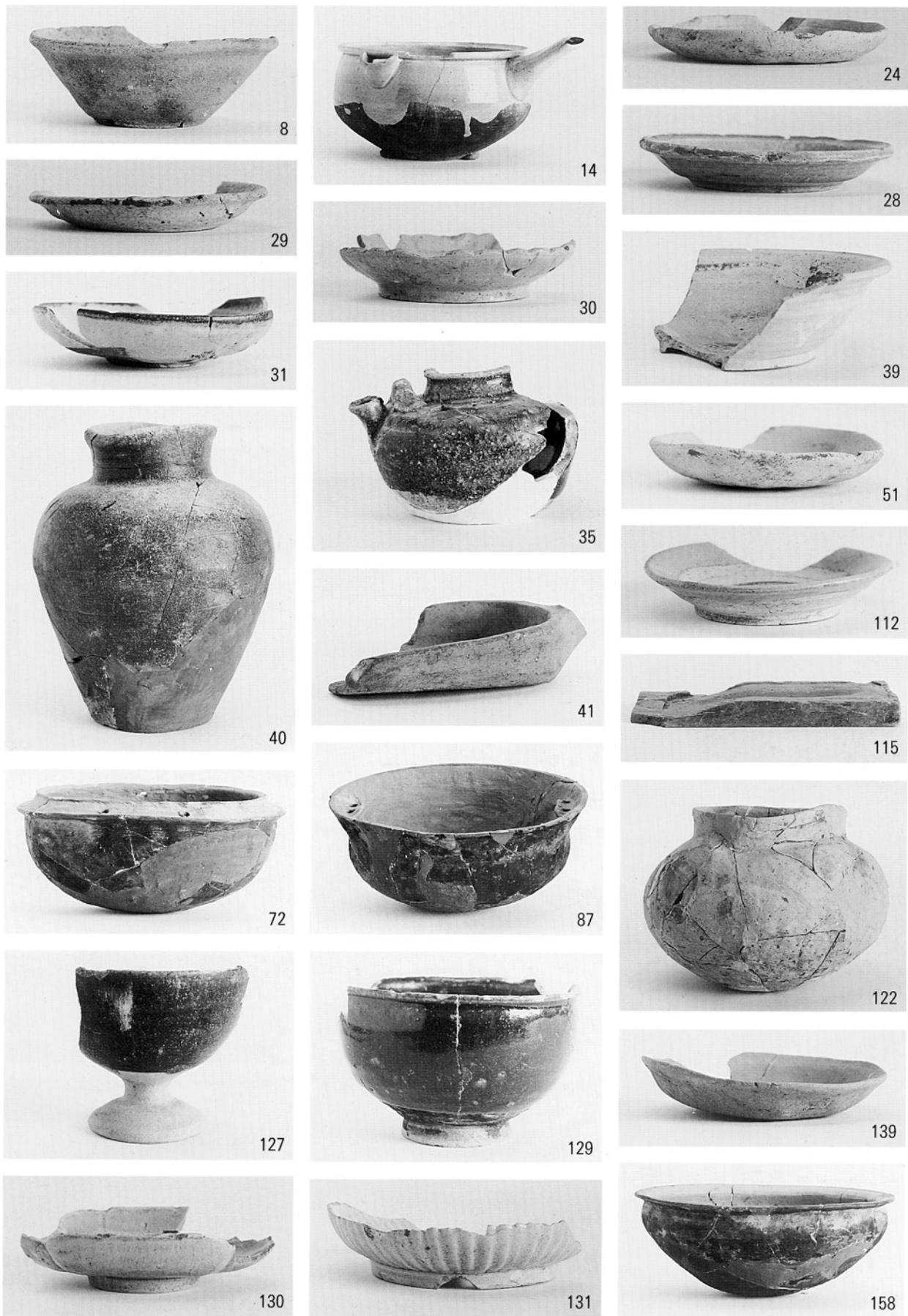
S Z 72

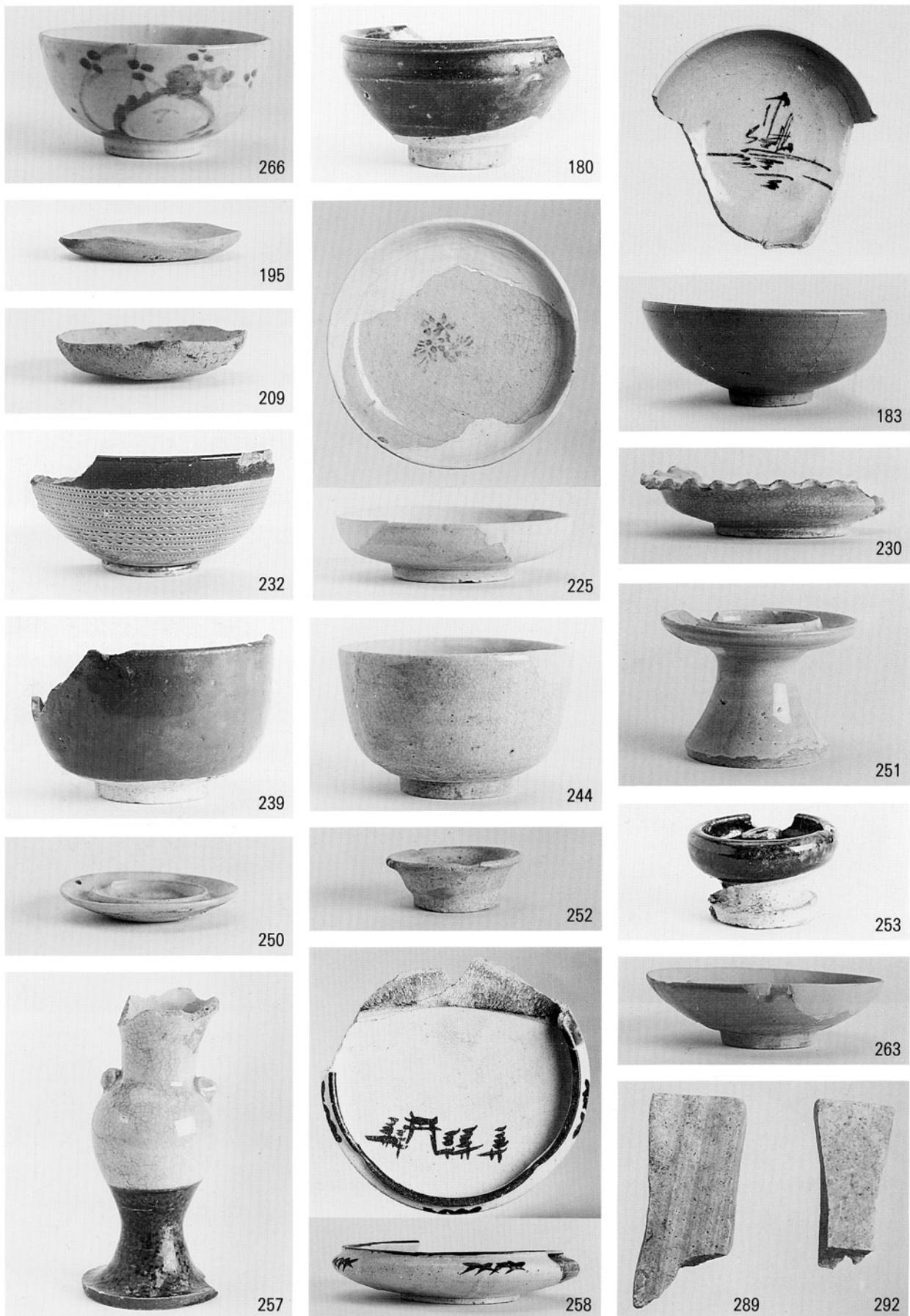


S B 3 の礎石

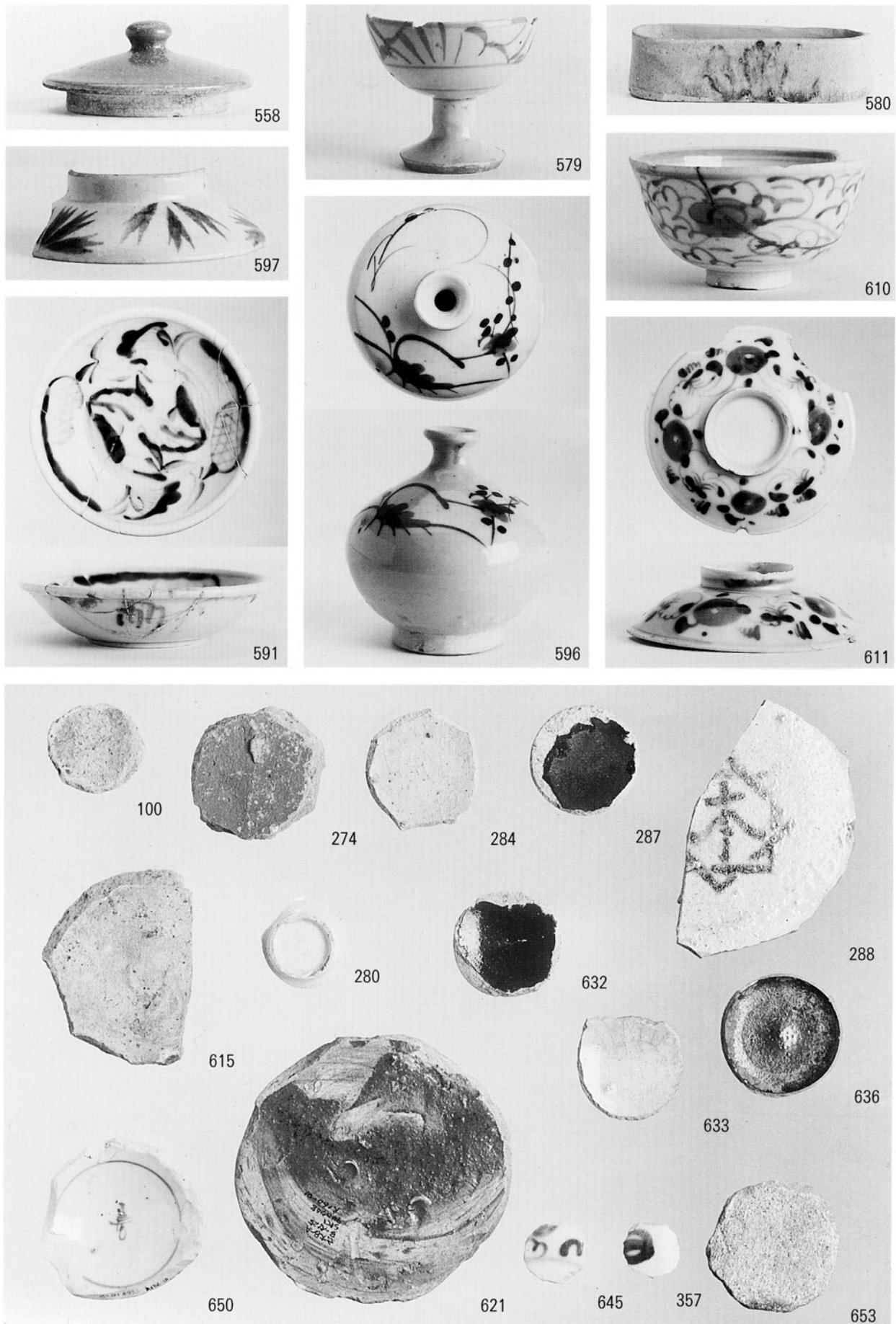


「向 空也上人堂」道標







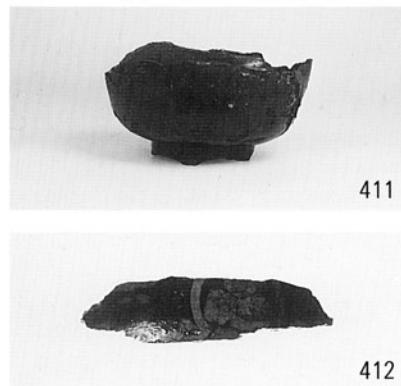




187



402



411



412

平成 11(1999) 年 2 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 5 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 115-10
一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う
六大B遺跡（A地区）発掘調査報告

1999.2

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 共 立 印 刷 株 式 会 社